

物價ノ著シク騰貴シタルハ増税モ亦其一原因タリシコト爭フヘカラサルノ事實ナリ。然リト雖モ現今ノ經濟界ニ於テ生産費ハ必スシモ物價ノ高低ヲ決定スル能ハサルカ如ク租税モ又物價騰貴ノ必然的原因ニアラス。換言スレハ前轉セル租税ハ直チニ其レ丈ケ物價ヲ高ムルトモ限ラサルナリ。蓋シ或ハ之ヲ高ムルコトモアラン、サリナカラ時トシテハ亦之ナキコトアルヲ免レス、何トナレハ縱令租税ニシテ前轉セルモ、若シ其場合ニ於ケル物價ニシテ恰モ下落ノ刹那ニ際センカ、租税ハ物價ヲ高メサルモ猶能ク其下落ヲ止ムル作用ヲ爲スヘケレハナリ。

今ヤ我國ハ戰後ノ餘響ヲ受ケ、苛稅收歛ノ聲漸ク市井ノ間ニ聞ユ。斯ノ如キハ必スシモ野人ノ泣キ言トシテ一笑ニ附スヘカラスト雖モ、亦必スシモ之カ爲其レ丈ケ物價ノ騰貴ヲ惹起シタリト速斷スヘカラサルナリ。我國ノ現行租稅制度ハ直接ニ生産行爲ヲ捕打シテ却テ消費行爲ニ寛ナラサルヤノ疑ナキ能ハス、各地ニ於ケル料理店業及類似ノ營業ノ繁昌増加スル觀アルハ、豈之ヲ

證スルニアラストセンヤ。

### 第七節 轉嫁ト外國人

租税ノ轉嫁ハ強チ内國人ノ間ノミニ止マラスシテ、或ハ其負擔ヲ以テ外國人ニ歸セシムルコトアリ、之ニ反シテ須ラク外國人ノ負擔スヘキ租税ヲ移シテ内國人ニ負ハシムルコトアリ、須ラク外國人ノ負擔スヘキモノヲ以テ内國人ノ負擔ニ歸セシムルハ戻稅輸出獎勵金等ナリ。此等ハ外國市場ニ於テ内國品ノ賣値ヲ低クシ頼リテ以テ外國人ノ需用ヲ誘起スルカ故ニ、取リモ直サス内國人民ノ負擔ニ由リテ其價格ヲ安クスルモノナリ。近時獨米諸國ノ商工業者カ輸出貿易上慣用ノ手段タル「だむびんぐ」換言スレハ内國市場ニ於ケル賣値ヲ高クスル代リニ外國市場ニ於テ安賣リスル方法ハ尤モ其甚タシキモノナリ。

之ニ反シ内國人ノ負擔ヲシテ其實外國商人又ハ消費者ニ歸セシムル場合

アリ、是レ恰モ前者ノ反對ニシテ外國ノ貿易業者等カ其販路ヲ擴張セント欲シ、強ヒテ低價ノ貨物ヲ輸入スルトキハ兎モ角内國人ノ負擔ヲ減シテ其レ丈ケ外國人ノ負擔ヲ増ス結果ヲ生セン南亞戰爭ノ際英國政府カ從來ノ國是ニ反シ大膽ニモ穀物輸入税ヲ新設セシニ當リテヤ、教授エ<sup>じう</sup>るすハ之ヲ評シテ、該税ハ一般ノ穀物ニ課スルカ故ニ外國生産者ハ低價ヲ以テ尙満足セサルヲ得サルヘシト云ヘリ、加之外國ニ比シ極メテ生産費低キ内國品ニ對シ適度ノ輸出税ヲ課スルトキハ、其負擔ハ大低輸入國ノ需用者又ハ消費者ニ歸スヘシ。

昔人曰ク租税ハ總テノ人ノ負擔ニ歸ス、是レヲ以テ正當ナリト、念フニ此説タル事物ノ一面ノミヲ見テ其全豹ヲ洞察セサルノ失アルヲ免レス、租税ノ轉嫁ハカク樂天的ナル能ハサルト同時ニ亦悲觀的タルヲ容サス、要ハ税源ノ所在ヲ考察シテ以テ其歸宿スル所ヲ窮ムルニアリ。

#### 第四款 租税制度論

凡ソ租税制度ハ各種ノ租税ヲ配合シテ以テ總テノ税源ヲ網羅シ、且國民ノ擔税力ニ順應セシメンコトヲ期セサルヘカラス、今左ニ現行租税中ノ重ナルモノヲ説述セントス

#### 第二十一章 收益税

收益税ハ所謂收益ヲ税スルヲ以テ目的トスル租税ナリ、地租家屋税營業資本利子税給料税等ハ嘗テ相據テ以テ收益税制度ヲ構成セシコトアリ、其特色ノ重ナル點ヲ述フレハ左ノ如シ。

一、市町村其他下級ノ地方團體ニ對シテハ始終確實ナル收入ヲ與フルモノナリ、大凡地方團體ニアリテハ納税者ノ數少ナキノミナラス、其區域又狹小ナルヲ免レス、從テ課税ノ目的物モ亦自ラ少ナシ、是レヲ以テ人口ノ異動、其

他經濟上ノ變遷ニ應シテ其收入常ニ増減スル租税ノ如キハ最モ不可ナリ例ヘハ登録税ノ如キハ經濟界ノ景氣不景氣ニ由リテ影響セラレルヤ甚タ

大ナルヲ以テ市町村税トシテ不適當ナルカ如シ。  
二、是レニ反シ中央政府ニ對シテ收益税ノ便利ナル所以ハ外觀上ノ標準ニ依リテ課税スルコト多キヲ以テ其賦課徵收ノ容易ナルコトニアリ例ヘハ地租ノ徵收ノ如キハ單ニ地方團體ヲシテ徵税令書ヲ配付セシムレハ即チ足ルカ如シ

獨逸ニ於テ今尙純然タル收益税制度ヲ有スルハ<sup>えさすろごりんげん</sup>及兩めくれんぶるひ耳獨逸以外ニ於テ佛蘭士、白耳義、露士亞、羅馬尼、塞爾維勃、牙利等ナリトス。

收益税ノ種類少カラサルモ左ニ其重ナルモノヲ説明セン

## 第一項 地租論

### 第一節 地租ノ概要

地租ハ收益税中最要ナル租税トス、而シテ其人心ニ浸潤セルコト既ニ久シキカ故ニ、世人ハ漸ク其負擔ヲ忘ルルモノノ如シ、但歐洲ノ西部諸國ニ於テハ最早之ヲ以テ中央政府ノ重要ナル財源トハ看做サスシテ、寧ロ之ヲ輕減スル傾キアリ、佛蘭士ノ如キハ其一例ナリ、加之獨逸聯邦ノ一タル普魯西ニ於テハ千八百九十一年及九十三年ノ法律ヲ以テ、地租ハ勿論、收益税ノ一種タル營業税ヲモ移シテ之ヲ地方團體ノ財源ニ充ツルニ至レリ、凡ソ租税ノ制度ハ其國ニ於ケル經濟組織及發達ノ如何ニ依テ自ラ異ルハ云フヲ俟タサルモ、收益税ノ如キハ其性質上中央政府ノ財源タルヨリハ寧ロ地方政府ノ財源タルニ適セリ、是レ其收入確實容易ナルノミナラス、地方團體ノ經營施設ハ其納税者及擔税者タル土地所有者、家屋所有者又ハ營業者ノ利益ヲ増進スルコト尠カラサルノミナラス、其實體ノ如キ全國ヲ通シテ調査スルヨリハ寧ロ市町村ノ如

キ一地方ニ於テ之ヲ調査協定スル方容易ニシテ且公平ナルヲ得ヘシ。  
 地租ノ制度ハ國ニ依リテ異ナルモ、由來其客體トシテ各國政府ノ採用スル  
 所ト爲レルハ土地ノ面積(反別)地代、小作料、土地ノ賣買價格及地價等ナリトス  
 本邦ニ於テハ明治六年地租ノ改正ヲ企テシ迄ハ大抵反別及石高ヲ以テ其客  
 體ニ充テシモ、改正後普魯西ノ例ニ倣ヒテ地價ヲ採用セリ、元來地租ノ客體ト  
 シテハ種々ノ制度方法アリ、其最モ進歩セサルニ方リテヤ、農家用ノ器具タル  
 鋤、鎌若クハ種子ノ多少ニ依リテ課稅セルコトスラ之アリ、顧フニ農業法ノ  
 進歩セサル時代ニ於テハ此等ノ事柄ハ大體土地ノ收穫ノ多少ヲ現ハス標準  
 タルコトヲ得ヘシ、然ルニ一タヒ農業ノ進歩スルヤ漸次斯カル課稅ノ標準ヲ  
 以テシテハ管ニ公平ヲ期シ難キノミナラス、收入モ亦少ナキヲ以テ或ハ反別  
 ニ據リ、或ハ收穫ニ據リ、或ハ地代ニ據リ、或ハ賣買價格ニ據ルニ至レリ蓋シ地  
 代ヲ地租ノ客體ト爲スハ英吉利ニ於ケル地方稅トシテノ地租ニシテ土地ノ  
 賣買價格ヲ以テ其客體トナスハ獨逸聯邦ノ一タルば一でん大公國ニ於テ之

ヲ見ル、若シ夫レ單ニ理論上ヨリ觀察スルトキハ、地代或ハ賣買價格ヲ以テ課  
 稅ノ標準トナスハ最モ公平ナルモノノ如シ、何トナレハ、二ツナカラ共ニ土地  
 所有者ノ真正ノ擔稅力又ハ資力ヲ現ハスト認ムルコトヲ得ヘケレハナリ、然  
 ルニ實際ニ至リテハ然ラス、此等ノ事實ハ變動常ナク増減高低一樣ナラサル  
 ノミナラス且又之ヲ定ムルニ一定ノ標準ナシ、近時我國ニ於テハ宜シク土地  
 ノ賣買價格ヲ以テ課稅ノ目的物トナシ以テ地租ヲ改正スヘシト主張スル者  
 アリ、一應尤モノ如シト雖モ徒ラニ理論ニ拘泥シテ實際ヲ忘ルルノ誹リアル  
 ヲ免レサルヘシ。

## 第二節 地價

我國ニ於テハ所謂地價ノ制度ヲ採用セリ、抑地價トハ土地ノ賣買價格ニア  
 ラス、收穫及土地ノ肥瘠其他土地所有者ノ所得ニ影響スヘキ事情ヲ斟酌酌量  
 シテ以テ評定シタル價格ヲ云フ、是レヲ以テ地租改正ノ際ニ於テハ地價ハ土

地ノ賣買價格ト相去ルコト決シテ遠カラサリシモ、年所ヲ經ルニ從ヒ周圍ノ經濟狀態ノ變遷スルニ連レ地價ト時價トノ間ニハ非常ノ懸隔ヲ生セシコト稀ナラス、何トナレハ、土地ノ賣買價格ハ常ニ騰貴スル傾向アルニ拘ハラヌ、所謂地價ハ依然トシテ舊ノ如クナルヲ以テナリ、是レ往々地租ノ改正ヲ主張スルモノアル所以ナリ、然レトモ地代及賣買價格ニシテ既ニ一定ノ標準ナシトセハ、縱令實際ニ適合セサル地價ト雖モ、尙容易ニ之ヲ變更スルノ理由ナシ、是レ地價ハ實在的ノ價格ニアラサルモ地代又ハ賣買價格ト雖モ、亦一定ノ標準ナク等シク實在的ト云フ能ハサル所以ナリ、況ンヤ、地租ハ其性質一定不動ナルヲ貴フニ於テヤ、何トナレハ、地租ノ増減ハ直チニ土地所有者ノ所得ヲ増減スルノミナラス、延テ其財產ノ増減ヲモ惹起スルヲ以テナリ、地租ノ加重セラルルトキハ土地ノ價格ハ下落シ、是レニ反シテ輕減セラルルトキハ其價格モ又自ラ騰貴スルハ賭易キノ道理ナリ、是レ英國ニ於テハ千六百年代ノ終ニ制定スル制度ヲハ今尙墨守セル所以ナルヘシ。

元來租稅ノ増減ナルモノハ其影響スル所單ニ負擔ノ増減ノミニ止マルモノアリ或ハ之ニ反シ管ニ租稅ノ負擔ノ増減ニ止マラスシテ納稅者及擔稅者ノ財產ヲモ増減スルコトアリ、地租ノ如キハ則チ其一例ナリ、地租ニシテ加重セラレンカ土地ノ賣買價格ハ下落スヘク、是レニ反シテ、若シ地租ノ輕減アルトキハ必ス土地ノ賣買價格ハ騰貴スヘシ、是レニ由リテ之ヲ觀レハ、地租ノ増減ハ地租ト其課稅物件タル土地價格ノ上ニ二重ノ増減ヲ惹起スヘシ、地租ノ如キ租稅ハ成ルヘク變更セサルヲ以テ可トスル所以ノ理茲ニ於テカ明カナリ。

我國ニ於テ地價ヲ評定スルニ當リ、採用セシ方法ヲ説明スレハ左ノ如シ。

### 第三節 地價ノ定メ方

耕地ヲ分チテ八等乃至九等ト爲シ、田ニ在リテハ米、畠ニ在リテハ麥又ハ桑、茶、麻、藍等ヲ以テ其收穫ト認メタリ、而シテ地主ヲシテ既往五箇年中ノ最モ豊

凶不變ナル平年ノ收穫ヲ届ケ出テシメ、政府ハ又古來ノ地租ノ輕重及一般收穫ノ情況等ヲ斟酌シテ以テ各田畑ノ收穫高ヲ定メタリ。既ニ土地ノ收穫高ヲ確メタル後次テ之ヲ貨幣ニ換算スルヲ順序トス、當時米一石ノ直段ハ全國ヲ平均シテ四圓十八錢五厘、麥ハ壹圓九十錢ニ當レリ、而シテ其收穫ノ代價中ヨリ先ツ種、肥料トシテ其一割五分ヲ引去リ、更ニ地租及地方稅トシテ各々地價ノ百分ノ三及一ヲ控除シタリ、終リニ其剩餘金額ヲ還元スルニ當リ田ニ在リテハ六分畑ニ在リテハ六、六三分ヲ以テシタリシカ、往々百分ノ七ヲ用ヒタル例ナキニアラス、元來地價ト云ヘハ動モスレハ賣買價格ト混同セラレ易シト雖モ、今ヤ兩者ハ全然別物ニシテ、地價ハ謂ハハ假想的ノ價格タリ、現ニ普通ノ田畑ニ在テハ其地價ハ多ク其賣買價格即チ時價ノ四分ノ一ヨリ五分ノ一ノ間ニアリ、最モ高キ地價ト雖モ賣買價格ノ三分ノ一ヲ上ホルコトナシ、而シテ市街宅地ニ至リテハ其賣買價格ハ地價ノ十百千倍ニ達スルコト左迄珍シカラス、是レ實ニ已ムヲ得サル次第ニシテ、地租ノ改正ハ明治維新草創ノ事ニ屬

シ、交通ノ便未タ開ケス、維新大改革ノ後ヲ承ケテ未タ經濟上ノ進歩トシテ見ルヘキモノナカリシカハ、土地ノ價格ハ非常ニ廉ニシテ從ツテ廉ク地價ヲ見積リタルハ毫モ怪ムニ足ルナシ。人或ハ地租ノ改正ヲ唱フル者アリト雖モ退イテ之ヲ土地所有者ノ一家ノ經濟ヨリ觀ルトキハ、夫ノ物價ノ騰貴セルハ單リ米ノミナラス、土地所有者ノ需要スル總テノ品物ハ同シ割合又ハヨリ以上ノ速度ヲ以テ騰貴セシカ故ニ、唯數字のニ言ヘハ地租ハ増徴スルモ敢テ不可ナカラシモ、實際ノ擔稅力ヲ察スルトキハ未タ容易ク改正ノ當否ヲ斷定スルコト能ハサルナリ。

#### 第四節 地租率及其負擔

地租ノ稅率ハ其初地價ノ百分ノ三ナリシカ、後是レヲ輕減シテ百分ノ二、五トナセリ、若シ夫レ地租ヲ以テ地價ノ三分トセンカ、地租改正當時ノ米價ヨリ打算スルトキハ、地租ノ負擔ハ大抵收穫ノ三割二分餘ニ當ル見當ナリキ、三割

ノ負擔ハ必スシモ低シト云フヘカラス。然ルニ日清戰役後所謂戰後經營ノ爲  
 明治三十一年法律第三十二號ヲ以テ爾後五年ヲ期シテ田畑ノ地租ハ地價ノ  
 千分ノ八、市街宅地租ハ千分ノ二十五ヲ增徴スルコトト定メタリ。後又日露戰  
 争ニ際シ、戰時財政計畫ノ一端トシテ市街宅地租ヲ百分ノ二十、郡村宅地租ヲ  
 百分ノ八、其他ノ土地ノ地租ヲ百分ノ五、五ニ改メ、而シテ之カ爲得ル所ノ增收  
 額ハ一千八百六十萬二千九百六圓ニ達セリ。然ルニ第二十六議會ノ開會中稅  
 制整理及負擔輕減ノ聲漸ク發リ、終ニ宅地價ノ整理ヲ行フト同時ニ田畑等ノ  
 稅率ヲ改正セリ其結果明治四十二年度ノ豫算ニ八千五百四十八萬八千三百  
 九十七圓ナリシ地租ノ收入ハ同四十四年度ノ豫算ニハ減シテ七千五百七萬  
 二千七百六十五圓トナレリ。現行稅率ハ左ノ如シ、

宅地	地價百分ノ二箇半
田畑	地價百分ノ四箇半
其他ノ土地	地價百分ノ五箇半

猶北海道ニ於ケル宅地以外ノ土地ノ地租ハ當分左ノ稅率ニ依ル、

田畑	地價百分ノ三箇二
其他ノ土地	地價百分ノ四箇

凡ソ土地ハ有租地(地租條例第三條)ニアラサレハ即チ免租地(同條例第四條  
 ニシテ、二者ノ中孰レカ必ス其一ニ居ルモノトス有租地ハ二類ニ分タレ、其第  
 一類地ハ田畑宅地鹽田鑛泉地ヨリ成リ、第二類地ハ池沼山林牧場原野雜種地  
 等ナリ。然リ而シテ地租ハ地價ヲ以テ其客體ニ充ツルカ故ニ年ノ豊凶ニ由リ  
 テ増減セサルヲ原則トシ、其増減ハ唯地價ノ變動アル場合ニ限ラル、地價ハ地  
 租條例第七條ノ規定ニ該當スルニ由リテ始テ變更スルヲ得ヘク、而シテ其之  
 ヲ變更シ得ル場合ハ

- 一 地目又ハ地類ノ變換シタルトキ、
- 二 開墾シタルトキ、
- 三 開拓墾下年期明ニ至リタルトキ、

四 荒地免租年期明ニ至リ原地價ニ復シ難ク、若クハ他ノ地目ニ變換シタルトキ、又ハ低價年期明ニ至リ原地價ニ復シ難キトキ、是レナリ。

地目又ハ地類變更ト云ヒ、將タ開墾又ハ荒地ト云ヒ、皆地租條例第三條第二項以下ニ於テ明カニ規定セル所ナリ

### 第五節 地租徵收期

地租ノ徵收期ハ田畑宅地山林等ニ由リテ異リ亦異ナラサルヲ得サルナリ何トナレハ所得ノ財源トシテ各其性質ヲ異ニスルノミナラス設令同一種類ノ土地ト雖モ都鄙其所ヲ同フセサルカ爲其關係ヲ異ニスルヲ以テナリ。あだむ、すみす所謂租稅ハ宜シク納稅者ニトリテ便利ナルヘシト予輩特ニ地租ニ於テ適切ナルヲ見ル地租條例第十二條ニ依ルニ其納期左ノ如シ

#### 一 宅地

- 第一期 其年七月一日ヨリ 地租額二分ノ一
- 同七月三十一日限リ
- 第二期 翌年一月一日ヨリ 地租額二分ノ一
- 同一月三十一日限リ

#### 二 田

- 第一期 其年十二月十六日ヨリ 地租額四分ノ一
- 翌年一月十五日限リ
- 第二期 翌年二月一日ヨリ 地租額四分ノ一
- 同二月末日限リ
- 第三期 翌年三月一日ヨリ 地租額四分ノ一
- 同三月三十一日限リ
- 第四期 翌年五月一日ヨリ 地租額四分ノ一
- 同五月三十一日限リ

#### 三 其他ノ土地

- 第一期 其年九月一日ヨリ 地租額二分ノ一
- 同九月三十日限リ
- 第二期 其年十一月一日ヨリ 地租額二分ノ一
- 同十一月三十日限リ

是レニ由リテ之ヲ觀レハ田租ハ納稅者ヲシテ納稅シ易カラシメンカ爲收穫シタル後ヲ見計ヒ數次ニ之ヲ刻シテ納付セシムル趣意ニ出テシヤ明カナリ唯予輩ハ疑フ其第一期ハ十二月下半ト定メスシテ之ヲ十一月ト定ムル方



却テ納稅者ニトリテ又國庫ニトリテ便利ナラサルヤ然ルトキハ納稅者ハ  
年末金融最モ頻煩ナル時期ヲ避ケテ其所有米穀ヲ處分シ得ルノミナラス第  
一期ト第二期トノ間ニ於テ二ヶ月以上ノ間隔ヲ有スルコトヲ得ヘシ然リ而  
シテ宅地租ノ如キハ之ヲ二期ニ分納スルノ制ヲ採ラスシテ寧ロ田租ノ如ク  
四期ニ徵收スル方却テ時宜ニ適スルコトナラント思ハル。

### 第六節 地租ノ收入

地租ノ收入ハ他稅ニ比シテ比較的確實ナリト雖モ而モ其長所ハ即チ短所  
ノ存スル所ニシテ社會及經濟上ノ進歩ニ連レ自然ニ增收スルコト甚タ少シ  
故ニ其増減ハ稅率ノ加減ニ俟ツヘキナリ本邦ノ地租ノ收入ハ左ノ如シ

- 一 田租 四五三三五〇一七
- 二 畑租 九八七八二二四

大正四年度

- 三 宅地租 一六二八四三六二
- 四 雜地租 一七七〇五六六

而シテ以上ノ計數ハ大正三年一月一日現在地價額ニ依リ算出シ之ニ増減  
見込額等ヲ加除シタルモノニシテ之ヲ前年度豫算額ニ比スレハ二百六萬六  
千八百七十七圓ヲ減少ス此減少ヲ生シタル所以ハ田畑地租ノ稅率ヲ低減シ  
タルカ爲ト風水害ノ被害多キカ爲ナリ。

其他重ナル諸國ニ於ケル地租ノ收入ヲ左ニ掲記セン

國名	千九百十三年度	收入額
英國	千九百十三年度	七二八四七八磅 <sup>(1)</sup>
佛國		二一〇一三一八三一フラン
伊國		八一八〇〇〇〇〇リラ
露國		八五八二五一九八留 <sup>(2)</sup>
奧國		一六一九八〇〇〇〇クローチン
匈國		七一七五〇〇〇〇クローチン

收益稅 地租ノ收入 家屋稅ノ來歴

露國ニ於テハ尙此外ニ帝室所屬農民ノ負擔スル三千五百四十八萬千七百七十六留アリ

三七〇

## 第二項 家屋稅論

### 第一節 家屋稅ノ來歴

家屋稅ハ其初地租ト合同シテ一租稅ヲ構成セシヲ常トス、國稅トシテノ英國ノ地租ノ如キ今モ尙其形跡ヲ存スルアリ。現ニ我國ノ如キ宅地租アルモ國稅トシテノ家屋稅ナシ是レ宅地租ハ元ト土地及家屋兩ナカラ之ヲ稅スルノ主意ナリシヲ以テナリ、尤モ市街地ニ於テハ夙ニ家屋稅ノ行レシ例ナキニアラス、嘗テ地租ノ外殆ト他種ノ租稅ヲ容レサリシ我國ニ於テスラ尙市街地ノ家屋ハ間口ノ長短ニ依リ一定ノ地子錢又ハ冥加金ヲ課セラレタルコトアリキ、歐洲ニ於テハ家屋稅ノ發達セル國ト否ラサルモノトアリ、例ヘハ獨逸ノ南部諸國ニ於テハ家屋稅ハ夙ニ彼ノ一般資產稅ヨリ分化シ來リテ、地租ト併ヒ

行レタルニ反シ、北獨逸諸國ノ普魯西、索遜王國等ニ於テハ千八百年代ノ中頃ニ至ル迄佛國ノ入市稅ニ倣ヒ、所謂城門稅ノ行ハレシ爲政府ノ財源裕カナリシカハ、特ニ家屋稅ヲ設クルノ必要ヲ見サリシカ如シ。

家屋稅ハ地租ニ次テ收益稅中ノ重ナルモノニシテ、家屋ノ建坪若クハ其價格ヲ以テ客體トスルヲ例トス、然レトモ家屋ノ性質タルヤ、其用途、建築方法所在地又ハ地位ニ由リテ自ラ異ルヲ以テ、課稅ノ方法モ亦一樣ナルヲ得ス、畧言スレハ完全ナル租稅ノ客體ヲ見出スコト容易ナラサルナリ、是レ佛國等ニ於テ近時ニ至ルマテ特別ノ家屋稅ヲ設ケス、劣ニ地租ノ一種トシテ存在セシ所以ナリ、併シナカラ家屋ハ課稅ノ目的物トシテ我德川時代ニ於テハ重ナル宿驛若クハ市街ノ家屋ハ間口ノ間數ニ依リテ以テ課稅セラレタリキ、今ヤ府縣稅トシテ地方財源ニ充テラルルト雖モ、多クハ市稅ニ限ラレ末タ普ネク行ハルルニ至ラス。

家屋稅ハ固ト收益稅ノ一種ニシテ家屋ノ建坪又ハ價格ヲ以テ其客體トナ

スヲ常トス、然レトモ家屋ハ其使用方法、建築ノ具合、及位置等ニ由リテ自ラ一様ナル能ハサルヲ以テ、一般普通ノ客體ヲ見出スコト誠ニ難シ。是レ本邦等ニ於テハ今尙地租ノ一種トシテ其中ニ含マレシ所以ナリ。但課税ノ目的物タル家屋ハ最モ明確ニシテ隱蔽遁脱スルコト能ハサルヲ以テ、埃國ニ於テハ十九世紀ノ初以來緩急事アル毎ニ財源ヲ茲ニ涉獵セシヲ以テ、維納府ノ家屋税ノ如キハ他ノ歐洲ノ大都府ニ比シ大ニ發達セシ所アルヲ見ル。

## 第二節 家屋税ノ種類

古來各國ニ行ハレシ家屋税ノ重ナル制度ハ大要左ノ如シ。

- 第一、家賃税 即チ家屋ノ賃賃價格又ハ借家料ヲ以テ客體トナス、有名ナル財政學者わぐなノ如キハ家屋税ハ宜シク家屋ノ賃賃價格ニ依ルヘシト云ヘリ、而シテ其理由ハ最モ調査シ易ク且隱匿シ難キカ故ナリ。
- 第二、建坪税 是レ從來最モ廣ク行ハレシ制度ニシテ、家屋ノ建坪即チ廣狹

大小ヲ以テ課税ノ標準トナスナリ、時トシテハ管ニ建坪ノミナラス、家屋ニ附屬スル土地モ又其中ニ含マルルコトアリ。

第三、階級税 家屋ノ階級税トハ其大小、間數、建築方法、建坪、位置等ヲ參酌シ一定ノ標準ヲ定メテ家屋ノ等級ヲ定メ、此ニ據リテ以テ税率ヲ定ムル租税ヲ云フ。收益税トシテノ家屋税ニ適スルハ蓋シ階級税ナラン、而シテ一度家屋ノ階級ヲ定メタル以上之ヲ賦課徴收スルコト簡易ナルヲ以テ甚々實行ニ便ナリ。

第四、價格税 家屋ノ價格税ハ其價格ヲ以テ客體ニ充ツ、而シテ價格ニ三種アリ、一ハ建築費ヲ標準トスル建築價格ニシテ、二ハ建築費、家屋ノ地位、建坪、裝飾、使用ノ方法其他家屋ノ價格ニ影響スル一切ノ關係ヲ參酌シテ以テ調査セラル評定價格ナリ。三ハ家屋ノ賣買價格又ハ時價ナリトス。

第五、門窓税 是レ從來佛國ニ行ハレシモノニシテ、窓戶ノ大小多少ヲ以テ其客體ニ充ツ之カ爲佛國ノ家屋ハ窓ノ數少ク住民ノ衛生ヲ害フ患アルヲ免

レスト云フ。

### 第三節 家屋税ノ概要

今各國ニ行ハルル家屋税ヲ見ルニ、其最モ普通ナルハ、奥地利、普魯西、ばいり、や等ノ制度ニシテ、大要市街地ト田舎トニ因リテ課税方法ヲ別ツ。即チ市街又ハ市街ノ性質ヲ具フル地方ニ於テハ家屋ノ賃貸價格ヲ以テ客體トシ、田舎ニ在リテハ建坪ヲ以テ之ニ充ツ。尤モ奥國ノ家屋税法ハ間數ニ依リテ階級ヲ定メ此ニ據リテ以テ課税スルカ故ニ、田舎ニ在リテハ階級税ヲ採リ、市街地ニ於テハ家賃税ヲ採ル。

大正元年度ニ於ケル道府縣歳入中戸數割及家屋税家屋割ヲ含ム合計千五百四十三萬六千六百七十九圓ヲ算セリ。是レ元トヨリ家屋税ノ總計ニアラス府縣中未タ家屋税ヲ行ハスシテ依然戸數割ヲ實行シ居ルモノ少カラス以テ家屋税ノ負擔重カラサルヲ證スルニ足ラン。予輩ハ家屋税ヲ以テ地方税源ニ

充ツルノ適當ナルヲ信スルト同時ニ將來益々之ヲ發達セシメテ眞ノ地方税源タルニ適セシメンコトヲ欲シテ止マサルナリ。

明治四十三年度ニ於ケル我全國六十六市區ノ家屋税ノ收入ハ三百九十六萬七千二百六十圓ニシテ、之ヲ十年前ノ同三十四年度ニ比スルトキハ三倍ノ増加ナリ。其他諸外國ニ於ケル家屋税ノ收入ハ大略左ノ如シ。

英國(1913年度決算)	一九五九三三九磅
佛國(1913年度決算)	七一六八五〇五二フラン
奥國(1906年度決算) <small>家賃税 階級税</small>	七一三二九〇〇〇クローネン 一〇六三二〇〇〇クローネン
匈國(1911年度決算)	四五〇〇〇〇〇クローネン
普國(1907年度決算) <small>市街地 田舎</small>	五九四七五〇〇〇マーク 一八四二〇〇〇〇マーク
ばいり&(1913年度決算)	六八五〇〇〇〇マーク
伊太利(1914年度決算)	一〇六〇〇〇〇〇〇リラ

## 第三項 營業稅

## 第一節 營業稅ノ意義

營業稅ノ起源ハ家屋稅ト相前後セリ、但其遍ク行ハルルニ至リシハ僅ニ茲百年ヲ出テスシテ、英吉利等ニ於テハ猶未タ之ヲ行ハサルナリ。

營業稅ヲ説明セントスレハ先ツ營業其物ノ意義ヲ明カニスルノ必要アリ蓋シ狹義ノ營業トハ粗製品ノ形狀ヲ變更スル爲ニ營マルル所ノ生産行爲ヲ云フ、之ニ反シテ廣義ノ營業トハ營利ノ目的ヲ以テ個人カ絶エス又主トシテ營ム所ノ經濟行爲ノ總稱ニシテ、各國ノ租稅立法上營業ノ意義ハ此解釋ニ從フ例多シ。然ルニ時トシテ以上ノ廣狹ニ意義ノ外、更ニ第三ノ解釋ヲ試ムル者アリ、其說ニ依レハ營業トハ資本ヲ基礎トシテ以テ營ム所ノ經濟行爲ヲ云フナリ、以上ノ三定義中其孰レカ最モ實際ニ適スルヤヲ觀ルニ寧ロ第三ノ定義ヲ以テ最モ適當トスヘキニ似タリ、殊ニ營業稅發達ノ歴史及其租稅制度上ニ

於ケル關係ヲ觀察スルトキハ之ニ據ルノ外ナキヲ認ム。但從來立法上學理上最モ多ク採用サレシハ第二ノ解釋トス。

營業ノ定義竝ニ解釋ニ依リテ自ラ營業稅ノ範圍ハ定ルヘシ、從來第二ノ定義カ採用セラレタル所以ハ主トシテ學說上正當ト認メラレタルト、次ニハ廣ク營業ノ範圍ヲ解釋シテ以テ歲入ノ多キヲ圖ルノ趣意トニ出テタリシナリ。然シナカラズノ如クナルトキハ吾人ハ租稅制度ヲ制定スル上ニ於テ多少ノ困難ヲ來サンコトヲ慮ル、他ナシ第二ノ解釋ニ從ハンカ、營業稅ハ變シテ一種ノ所得稅トナルノ嫌ナシトセサレハナリ、茲ニ於テ乎、租稅制度ノ上ニ於ケル營業稅ノ位置ヲ定ムルハ洵ニ難シ、現ニ英吉利ノ所得稅法ヲ見ルニ、所得稅中ニ他國ニ於ケル營業稅ト認メラルル部分ヲ包含セリ。奧地利ニ於テハ營業稅ト所得稅トヲ區別シ兩々相行ハルレトモ其實寔ニ相近似ス、蓋シ同國ノ立法者ノ意志ハ主トシテ相似タル二種ノ租稅ヲ竝ヘ行ヒ、以テ課稅上遺漏ナカラシメンコトヲ期スルニ外ナラサルナリ。是レヲ以テ營業稅ヲシテ一方ニ於テ

ハ地租家屋税一方ニ於テハ所得税トノ間ニ立チ以テ一個獨立ノ租税タラシメントスルニハ須ラク予輩ノ所謂第三ノ定義ニ從ヒ、營業上使用スル所ノ資本ヲ以テ其客體ト看做スニ如クハナシ、斯ノ如クナレハ恰モ租税發達ノ歴史ト相符合セシムルヲ得ルノミナラス、又各種ノ租税ノ調和均衡ヲ保ツ上ニ於テ甚タ便利ナリトス。

## 第二節 營業稅ノ範圍

要スルニ營業稅ヲ賦課セラルル營業ハ重要ナル營業ト言フヲ得ヘク、而シテ須ラク其之ヲ賦課セラルヘクシテ而シテ賦課セラレサル營業ハ大略左ノ如シ。

一、英語ノ所謂「りべらる、ぶろふえつしよん」ニ從事スル者、例ヘハ教員、官吏、宗教家、美術家等ノ如シ、但佛蘭士ニ於テハ此等ノ職業ニ從事スル者ト雖モ尙營業稅ヲ課セラルルコトアリ、同國ノ營業稅ハ之ヲ「あんぼー」又「こんどりび」

よんで、ばたんど」ト云ヒ、文字通りニ譯セハ營業免許稅トナルノ理ナリ、而シテ其範圍極メテ廣ク學校教員ノ如キモ亦課稅ヲ免ルルコト能ハス。

二、一家内ニ於ケル副産業、特ニ狹義ノ農林業及自家製ノ粗製品ニ人工ヲ加ヘテ製造販賣スル職業、故ニ農業者カ農業ニ由リテ得ル所ノ藁稈ノ如キ物ニ人工ヲ加ヘテ草鞋、草履、繩、俵等ヲ造リ、之ヲ販賣スルモ工業者トシテ營業稅ヲ課スヘカラス念フニ農業及林業モ等シク營業ナルコトハ商工業ト異ナル處ナシ、然レトモ其營業稅ヲ課セラレサル所以ハ他ナシ、農業者及土地所有者ニ對シテハ既ニ地租ノアルアリ、而シテ地租ハ農林業者ニ課セララルル租税ニシテ、營業稅ハ商工業者ニ課セラルル租税ト云フモ不可ナケレハナリ、以テ租税制度上ニ於ケル營業稅ノ地位ヲ知ルニ足ラン。

三、商事株式會社及鐵道會社等、此等ノ營業カ營業稅ヲ課セラレサル所以ハ他ナシ、彼等ハ寧ロ特別ノ租税ヲ課セララルルヲ以テ通則トスレハナリ、但我國ニ於テハ之ニ反ス。

其他我邦ノ營業稅ハ除外又ハ例外ヲ設ケテ、國稅トシテノ營業稅ヲ課セサルモノ少カラス。然リ而シテ各國ノ營業稅法ハ營業ノ定義ヲ下サスシテ、其之ヲ課スヘキ營業ノ種類ヲ列舉スルヲ常トセリ。我國ノ營業稅法(明治二十九年三月法律第三十三號同四十二年四月法律第四十五號改正)第一條ハ十二類二十五種ノ營業ヲ列舉セリ。即チ第一、物品販賣業、第二、銀行業、保險業、第三、金錢貸付業、物品貸付業、第四、製造業、印刷業等、第五、運送業、運河業等、第六、倉庫業、第七、鐵道業、第八、請負業、第九、席貸業、料理店業、第十、旅人宿業、第十一、周旋業、第十二、仲立業、問屋業等ノ如シ。

### 第三節 營業稅ノ客體

營業稅ニハ地租ノ如ク完全ニシテ且何レノ場合ニ於テモ適用サルヘキ一般普通ノ客體ナシ、是レ營業稅ノ實際ニ於テ區々タル所以ナリ。我國ノ營業稅ニハ直接ニ營業ノ收益ニ課スルモノト、之ニ反シテ外觀上ノ標準ニ從ツテ間

接ニ之ヲ推定スルモノトノ二種アリ。而シテ租稅ノ客體トナルヘキモノ大要七種アリ、一、賣上金額、二、建物賃賃價格、三、從業者、四、資本金額、五、請負金額、六、收入金額、七、報償金額是レナリ。營業稅法第十二條(斯ノ如ク租稅ノ客體ハ區々ニ互リ居ルヲ以テ一租稅トハ云ヒナカラ其實七種ノ租稅ト看做シ得サルニアラス、營業稅ノ複雜ナル所以ノ理モ茲ニ於テカ明カナラレ、然シナカラ原則トシテハ勉メテ收益稅ノ性質ヲ保ツヲ要スルヤ、言ヲ俟タス。

### 第四節 各國ノ立法例

各國ノ營業稅法ヲ見ルニ其代表的制度ト認ムヘキモノニアリ、一ハ佛蘭士ノ營業稅法ニシテ一ハ普魯西ノ營業稅トス。但普魯西ニ於テハ現今營業稅ハ國稅ニアラス、地方稅トシテ存在スルノミ而シテ其課稅法タルヤ大體ノ標準ニ據ルモ實際納稅者ノ擔稅力ニ適合セシムルヲ以テ眼目トス。サレハ政府ハ大體ノ標準ニ從ツテ之ヲ納稅者ニ賦課スルニ止マリ、各營業者ハ各自ノ協議

ニ依リテ其納税又ハ負擔金額ヲ定ムルコトトナル。佛蘭士ノ營業税法ハ之ニ反シ課税ノ目的物タル租税ノ客體ハ外觀ニ依リテ確カメ得ヘキモノヲ採用セリ。例ヘハ營業ノ種類、建物ノ賃貸價格等ノ如シ。故ニ普魯西ノ營業税ノ如ク課税上臆斷ノ弊ナキ代リニ亦餘リニ形式ニ拘泥スルノ虞レアリ。我國ノ營業税ハ兩者ノ折衷ト言フモ可ナリ。唯惜ムヘキハ兩者ノ長所ヨリハ寧ロ短所ノミヲ有セル嫌ヒアルニ在リ。佛蘭士及普魯西ノ營業税ハ我國ノソレニ比シテ遙ニ巧妙ナル規定ヲ存スルヲ見ル。請フ之ヲ論セシ。

一、佛國 佛蘭士ノ營業税ハ前述ノ如ク外觀ニ從テ確メ得ヘキモノヲ以テ課税ノ目的物トス。其一ハ即チ營業ノ種類ニシテ、一ハ建物ノ賃貸價格是レナリ。而シテ如何ニ營業ニ大小盛衰アルニ關セス。各營業者ハ營業ノ種類ニ基ク一定ノ營業税ト、建物ノ賃貸價格ニ對スル營業税トノ二者ヲ併セ負ハサルヘカラス。營業ノ種類ニ依テ納ムル營業税トハ、例ヘハ銀行業者ハ銀行業者トシテ一定ノ營業税ヲ納メ(資本ノ多少ニ拘ハラズ)官吏ハ官吏トシテ一定ノ金額

ヲ納メ、教員ハ教員トシテ亦一定ノ金額ヲ納ムルカ如ク、其營業ノ種類ニ依リテ一定セルモノニシテ、云ハハ營業免許税トモ云フヘク、各種ノ業務ヲ營ムニ付キテ規模ノ大小盛衰ノ如何ヲ問ハス。常ニ同一ノ免許税ヲ納付且負擔セシムル譯ナリ。但營業ノ種類ノ異ナルニ從ヒ其收益モ亦自ラ異ナルカ故ニ、其税率ヲ異ニスルハ止ムヲ得サルナリ。尤モ營業ニシテ同シケレハ稅額モ同シキコト前述ノ如クナル故、之ヲ稱シテ「ごらあゆに」即チ確定税率ト名ク。

建物ノ賃貸價格ニ課スル營業税ハ確定税率ノ場合ニ異ルナリ。建物ノ賃貸價格高ケレハ高キ程稅額モ亦増加セサルヲ得ス。故ニ之ヲ名ケテ比例稅ごらあぶろぼーしよねるト云フ。斯ノ如クシテ營業者ハ皆確定率ト比例率トヲ併課セラルルモノトス。

而シテ營業ヲ大別シテ四種トナス。第一種普通商工業者、第二種ハ大規模ノ運輸業者、銀行業者等ニシテ、第三種ハ第一種ニ含容セラレサル大商工業、製造業、冶金業及株式又ハ類似ノ會社等ヲ含ミ、第四種ハ所謂自由職業ナリトス。第



一種ノ營業ニアリテハ八種ノ營業ヲ含ミ、而シテ此等ノ營業ハ土地ノ等級ニ由リテ更ニ各八等ニ分ルルヲ以テ、都合六十四等アルノ理ナリ。加之巴里市ハ例外ナリ、故ニ之ヲ加フルトキハ七十二等ニ分タルナリ、稅率ハ二「ふらん」ヨリ三百「ふらん」ニ上ル比例率ハ營業地ノ賃賃價格ニ遵シ、大要營業家屋ノ賃賃價格ノ十五分ノ一、二十分ノ一、四十分ノ一ニ充ル第二種ノ營業ハ又五種ニ分タル、營業地ノ人口ニ由リテ確定率ハ五等ニ分レ比例率ハ賃賃價格ノ十五分ノ一トス、第三種ノ營業ハ五類ニ分チ更ニ勞働者ノ數株式資本額器械ノ數ニ由リテ確定率ヲ増減シ比例率ハ賃賃價格ノ十五分ノ一乃至五十分ノ一トス、第四種ノ營業ハ毫モ確定率ヲ課セス唯家屋ノ賃賃價格ニ依テ比例率ヲ課スルノミ。

二、普魯西 普魯西ノ營業稅ハ政府事業及自治團體ノ營業ハ營業稅ヲ免除セラルルノミナラス、農業信用組合、公共的保險機關、組合、協會等苟クモ其營業ヲ組合員ニ限局スルモノハ營業稅ヲ課セス、加之資本金三千「まい」ク、年益千五

百「まい」ク以下ノ營業モ亦然リ納稅者ハ年益ノ額ニ由リテ四等ニ分タレ、第一等ノ營業ハ年益五萬「まい」ク又ハ資本金額一百萬麻以上、第二等ハ年益五萬「まい」ク以下二萬麻以上又ハ資本金額一百萬麻以下十五萬麻以上、第三等ハ年益二萬麻以下四萬麻以上又ハ資本金額十五萬麻以下三萬麻以上、第四等ハ年益四萬麻以下千五百麻以上又ハ資本金額三萬麻以下三千麻以上トス、稅率ハ大要左ノ如シ、第一等ノ營業ニアリテハ大要五〇〇〇—五四八〇〇ノ年益ニ對シ五百四十八麻ヲ納付スヘキヤウ規定セラレ以上四千八百「まい」ク、收益ヲ増ス毎ニ四十八麻ヲ増スコトトス、第二等以下ノ平均率ハ各三百麻八十麻十六麻トシ其最高及最低率ハ又左ノ如シ、第二等ハ百五十六麻乃至四百八十八麻、第三等ハ三十一麻乃至百九十二麻、第四等ハ四麻乃至三十六麻即チ是レナリ、其賦課方法タル大體平均稅率ニ據リ、一括シテ政府先ツ之ヲ納稅者ニ課シ、而シテ後營業者ヲシテ各自ノ間ニ於ケル協議ニ依リテ其負擔額ヲ確定セシム。大體平均率ニ依ルト云フハ營業ノ資本金額又ハ收益等ニ依リテ營業者ノ

等級ヲ定メテ以テ課税スルヲ云フ、通常之ヲ四等ニ分ツ、第一等ノ營業者ハ特ニ資本金額又ハ收益高ノ幾分トシテ課税セラルルモ、第二等以下ノ營業者ニ至リテハ每一人ニ付キ平均税額ヲ定メ置キ、營業者ノ數ニ應シテ一定ノ地域ニ於ケル或ル等級全部ノ負擔額ヲ算出ス、而シテ政府ハ以上ノ手續ヲナスニ止マリ同一等級ニ屬スル營業者ハ其賦課セラレタル總負擔額ニ付キ協議ノ上各自ノ分擔額ヲ定ムルモノトス、其意蓋シ營業者ハ互ヒニ資産狀態及營業ノ狀況ヲ知悉セルカ故ニ政府ニ於テ直接ニ彼等ノ負擔額ヲ定ムルヨリハ寧ロ彼等自身ヲシテ之ヲ定メシムルヲ以テ公平ナル結果ヲ得ヘシト云フニ在リ、故ニ第二等以下ハ云ハハ配付税ト云フヲ得ヘシ、元來政府ノ爲ス所ハ往々形式ニナカレ過クル虞レアルノミナラス、收税官吏カ營業ノ内幕ニ立入り納税者ノ財産ヲ調査スルカ如キハ營業者ノ最モ嫌フ所ナリ、此弊ヲ避ケ實際ノ負擔力ニ適應セシメントスルハ實ニ普魯西ノ營業税ノ特色ナリ。

大正四年度ノ營業税ノ收入ハ一千八百六十四萬四千六百二圓ニシテ、之ヲ

前年度ニ比スルニ六百四十一萬四千五百八十八圓ノ減少ヲ見ル、其詳ナルハ左ニ掲ク、人若シ細カニ之ヲ研究センカ之ニ據リテ以テ我國ニ於テ商工業分  
化ノ大體ヲ推諒スルニ足ランカ。

大正四年度營業税收入豫算

物品販賣業	六二七〇二九九
銀行業	三四三七三五九
保險業	一七二七五六
金錢貸付業	一八八三五〇二
物品貸付業	一八九六八
製造業	三九八五四四八
運送業	五七七〇四三
倉庫業	一〇四七五二
運河業	二一一五

棧橋業	三七四
船舶碇繋場業	一〇一〇九
貨物陸揚場業	五一六
鐵道業	二二七五〇八
請負業	四一二八一七
印刷業	六九八八八
出版業	一六七七七
寫真業	八一五九
席貸業	七一二一二
旅人宿業	一六一四八〇
料理店業	三三八四四三
周旋業	一〇〇三五六
代理業	六四四六七

仲立業	一六一九八三
問屋業	五四五七四二
信託業	二五二九
計	一八六四四六〇二
前年度ニ比シ減	六四一四五八八
其他歐洲諸國ノ營業稅ノ收入ハ大要左ノ如シ、	
佛(1910年)	一六七四五四八七ニフラン
伊(1911年)	(1)一三四〇〇〇〇〇リラ
奧(1908年)	七八一〇〇〇〇〇クローネン
露(1910年)	一三三五八二五〇〇留
普(1905年)	三四九〇〇〇〇〇マーク

(1) 註 伊太利ニ於テハ純然タル營業稅ハ之ナシ上ニ掲ケタルハ諸種ノ免許稅ナリ而シテ營業稅ノ大部分ハ所得稅ノ一態タル動産收入稅中ニ含マル

## 第二十二章 所得稅

### 第一節 所得稅ノ要旨

所得稅ハ收益稅ト相俟テ始テ其效用ヲ發揮スルコトヲ得ヘシ、是レヲ以テ收益稅ノ制度ノ如何ハ自ラ所得稅制ノ上ニ影響スルモノナリ、凡ソ收益稅制度ヲ組成セルモノハ大要一、地租、二、家屋稅、三、營業稅、四、資本利子稅、五、勞銀稅等ニシテ所得稅ハ此等ノ租稅ノ配合ニヨリテ自ラ伸縮増減セサルコトヲ得サルヘシ、是レヲ以テ所得稅ニ關シテハ自ラ左ノ問題ヲ生ス、即チ

所得稅ハ收益稅ノ補助タルヘキモノナリヤ、將タ收益稅ニ關係セスシテ一個獨立ノ租稅タルヘキヤ是レナリ。

故ろ一れんつ、ふおん、したいん、ハ所得稅ヲ以テ他ノ租稅ノ足ラサル所ヲ裨補スル租稅ト看做シ之ヲ稱シテ補完稅ト言ヘリシコトアリ蓋シ所得稅ニ在リテハ稅率ノ増減ハ納稅者ニ取リテ他ノ租稅ノ如ク重大ノ影響ヲ生セサル

ヲ以テ年々財政ノ緩急ニ應シテ其稅率ニ手加減ヲ加フルコトヲ得ヘシ是レ氏カ補完稅ト名ケタル所以ナリ、實ニ所得稅ノ稅源ハ他稅ニ較ヘテ豊富ナルカ故ニ一定ノ限度内ニ於ケル稅率ノ高低ハ他稅ニ於ケルカ如ク納稅者又ハ擔稅者ノ經濟ニ影響スルコト大ナラス、去レハ英國ニ於テハ年々財政ノ緩急ニ應シテ其稅率ヲ加減ス、我國ノ所得稅稅率ハ法律ヲ以テ之ヲ規定セルニ反シ英國ノ所得稅ハ年々豫算ニ由リテ以テ稅率ヲ變更セラルルナリ。

### 第二節 所得ノ種類ト所得稅(三九三頁以下參照)

所得ト等シク收入ナルモ所得ノ性質ヲ備ヘサルヲ以テ所得稅ヲ課セラレサルモノアリ、例ヘハ相續財產ノ如シ而シテ所得稅ノ範圍ハ所得ノ種類ニ依リテ自ラ定マル、今學理上之ヲ分チテ大要左ノ三種トナスコトヲ得。

- 一、純然タル財產ノ所得ニシテ、之ヲ稱シテ財產所得ト云フ。
- 二、純然タル勞力及勞心ノ所得ニシテ、勤勞所得即チ是レナリ。

三、營業上ノ所得即チ營業所得此種ノ所得ハ以上ノ二者ノ混合體ニシテ云ハハ財産ト勤勞トノ協力ニ由ル所得ナリ。斯ノ如ク所得ノ性質ハ其種類ニ從テ異ナルヲ以テ課稅上自ラ特殊ノ問題ヲ生スヘシ。

何トナレハ所得ノ異ルニ從ヒ其擔稅力ヲ同ウセサルヲ以テナリ。凡ソ財産殊ニ土地山林ノ如キ有體財産ヲ以テ其財源トナス所得カ最モ擔稅力ニ富ムハ言フヲ俟タス、其所有者ハ殆ト自ラ勞スルコトナキモ猶一定ノ收入ヲ得ヘク苟クモ天變地異ノ之ヲ潰滅スルニアラサルヨリハ長ヘニ其福ヲ享クルヲ得ン。之ニ反シ、純然タル勤勞所得ハ全然其人々ニ存シ、所謂其人存スレハ即チ之アルモ、其人無クンハ直チニ絶ユ、否設令其人ニシテ存スルモ若シモ勞作スルコト能ハサランカ亦直チニ消絶スヘシ。從テ斯ル所得者ハ常ニ如上ノ場合ヲ想像シテ以テマサカノ時ノ用意ヲ爲シ置クノ必要アルカ故ニ擔稅力ハ自ラ乏シ、營業所得ハ恰モ以上二者ノ中間ニ介マリテ、擔稅力ハ前者ノ如ク裕カ

ナラスト雖モ亦後者ノ如ク乏シカラサルナリ。是レヲ以テ以上三種ノ所得ニ就キ稅率ヲ斟酌鹽梅セントスルノ說アリ、嘗テ我帝國政府ノ第二十六議會ニ提出セシ所得稅改正案ハ此點ニ付特ニ考慮スル所アリキ、又現行所得稅ハ勤勞所得ニ對シ一割ノ控除ヲ容ルスナリ。是レ必スシモ必要ナルニアラス又必スシモ不必要ナルニモアラス、要ハ唯各種ノ稅源ヨリ生スル收入又ハ所得カ其擔稅力ニ應シテ以テ課稅セラレ居ルヤ否ヤニ存ス。予輩ハ後章ニ於テ特ニ之ヲ論究スルノ機アラン。

### 第三節 所得稅稅率

現行所得稅法ハ明治三十二年二月法律第十七號ヲ以テ發布セラレ其後數次ノ改正ヲ經タリト雖モ其根柢ニ於テハ殆ト變更スル所ナシ、唯日露戰役ノ結果、同三十七年四月、法律第四號非常特別稅法ニ由リテ大ニ其稅率ヲ變更増加セラレタルアリ、後大正二年ノ改正ニ由リ兩法律ヲ合シテ一トシ稅率ノ如

キ多少輕減セラレタル點ナキニアラス、而シテ所得税法ノ根本トモ謂フヘキハ其第三條ノ規定ニシテ凡ソ所得ハ三種ニ分タル、即チ普ネク世人ノ了知スルカ如ク、第一種ハ法人ノ所得ニシテ、第二種ハ公債社債ノ利子トス、第三種ハ以上二種ノ所得ニ屬セサル所得ニシテ、予輩ハ便宜ノ爲假リニ之ヲ個人所得ト名ケントス、サレハ第一種ハ各種營利會社ノ收入ニシテ、此場合ニ於ケル所得ハ、財産ノ收益ト勞力又ハ勤勞ノ結果ニ成ルモノトヲ包含スヘク、之ニ反シテ第二種ノ所得ハ公債社債ノ利子タルヲ以テ純然タル財産所得ニシテ、毫モ勤勞ニ因由セサルモノナリ、第三種ノ所得ニ至リテハ、第一種ノ其レノ如ク勤勞財産ノ二者ニ根柢スト雖モ、而モ第一種ニ比シテ、ヨリ多ク個人ノ才智、藝能、熟練、經驗ニ待ツコト多キノミナラス、尙更ニ僥倖的投機的性質ヲ具フルモノナリ、若シ夫レ各種所得ノ内容ト運命トニ就テ之ヲ論スル時ハ第一種及第二種ノ所得ハ、未タ其落付クヘキ所ニ落付カスシテ遅カレ早カレ一轉シテ個人ノ所得トナルヘキ運命ヲ有スト云フモ、左マテ不可ナルコトナシ、而シテ其所

得者ヨリ見ルトキハ二者共ニ勤勞スルノ必要ナク晏然拱手坐ナカラニシテ所得シ得ルモノナリ、其難易第三種ノ所得ト同日ノ談ニアラサルナリ、サレハ之ヲ第三種ノ所得中ニ含マシメス、否之ヲ引キ離シテ先ツ別々ニ之ヲ課税スルハ所得トシテ課税スト云フヨリハ、吾人ハ寧ロ特種財産ノ收益トシテ課税スト云フノ適當ナルヲ認メントス、試ミニ見ヨ第二種ノ所得ハ公債社債ノ利子ニアラスヤ、而シテ第一種法人ノ所得ハ主トシテ社債等ト殆ト其效用ヲ同ウスル株券ノ配當ニアラスヤ、果シテ然リトセハ、未タ學理上謂フ所ノ所得ト成リ了ラサルコト、荒川ノ隅田川ト言ヒ能ハサルニサモ似タリ、  
隨ツテ同一ニ之ヲ課税スヘカラスト云フモ一應ノ理アルカ如ク、亦現行法ハ、此理ヲ認メテ以テ其税率ヲ異ニセリ、予輩ハ先ツ各種ノ所得ニ適用スル税率ヲ觀ントス、

第一種ノ所得ハカノ非常特別税法ノ結果甲乙ノ二種ニ分タレ、其甲ニ對シテハ所得ヲ五千圓以下二十萬圓以上十級ニ分チ最低千分ノ四十ヨリ最高千

分ノ百三十ヲ課スルコト左ノ如シ。

所得金額	現行稅率
五千圓未滿	千分ノ四十
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ五十
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六十
一萬五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ七十
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ八十
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ九十
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百十
十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百二十
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百三十

又乙ハ甲ニ合マレサル其他ノ法人ニシテ、確定率千分ノ六十二、五ヲ課シ毫

モ變更スルトコロナシ。

是レニ由テ之ヲ觀レハ、第一種中甲ノ所得ニ課スル最重稅率ハ、一割三分弱ニシテ最モ輕キハ四分ナリ、而シテ第二種ノ所得ニ就テハ、依然千分ノ二十ヲ課スルノミナラス、戰時中軍事公債ノ價格ヲ維持スルノ一方策トシテ軍事公債ノ利子ヲ免稅シタルニ初マリ、戰後公債整理ノ一手段トシテ、一切ノ國債利子ノ所得稅ヲ免除スルコトトナレリ。

第三種ノ所得ハ、千圓未滿ノ最低級トシ、以上十萬圓ヲ超ユル所得ニ至リテ之ヲ十三階級ニ分ツ其定率及增徴率ハ左ノ如シ。

所得金額	現行稅率
千圓以下	千分ノ二十五
千圓以上	千分ノ三十五
二千圓同	千分ノ四十五
三千圓同	千分ノ五十五

所得稅 所得稅稅率

五千圓同	千分ノ七十
七千圓同	千分ノ八十五
一萬圓同	千分ノ百
一萬五千圓同	千分ノ百二十
二萬圓同	千分ノ百四十
三萬圓同	千分ノ百六十
五萬圓同	千分ノ百八十
七萬圓同	千分ノ二百
十萬圓同	千分ノ二百二十

即チ最低ハ千分ノ二十五ニシテ、最高ハスツト飛ンテ千分ノ二百二十タルヲ知ルヘキナリ。

#### 第四節 所得稅制度ノ大要

千八百九十一年ノ普魯西ノ所得稅法第七條ハ四種ノ所得ヲ認メ、而モ之ニ課稅スルニ方リテハ一括シテ以テ課稅ノ目的物ニ供セリ、是レヲ以テ普魯西ノ所得稅ハ一般所得稅ノ名アリ、蓋シ所得ノ種類ヲ問ハスシテ、尋常一樣ニ且一般ニ之ヲ稅スルヲ以テナリ、我國ニ於テハ所得稅法(明治三十二年二月法律第十七號)第三條ニ依リ、所得ヲ三種ニ分チテ各々特別ノ稅率ヲ課セリ、後多少ノ改訂ヲ經タリト雖モ、根本ニ於テハ依然トシテ今尙之ヲ存續セリ、即チ第一種ノ所得ハ法人ノ所得ニシテ更ニ之ヲ甲乙ニ別チ、甲ハ合名會社合資會社ノ所得ニシテ、之ヲ九等級ニ分チ千分ノ四十ヨリ同百三十ヲ稅シ、乙ハ株式會社株式合資會社及其他ノ法人ノ所得ニシテ、多少ニ關セス千分ノ六十二、五ヲ稅スルモノトス、第二種ハ所得稅法施行地ニ於テ支拂ヲナス、公債社債ノ利子ニシテ千分ノ二十ヲ課ス、但國債ヲ除ク第三種ノ所得ハ前二種ニ屬セサル所得ニシテ、云ハハ個人ノ所得ト名ツクヘク四百圓ヨリ十萬圓以上ニ渡リ之ヲ十三等ニ分チ、最低千分ノ二十五、最高千分ノ二百二十ヲ課ス、而モ是レ超過累進



率ナルヲ以テ千分ノ二百二十ト云フモ猶百八十強ニ止マルヘシ、是レニ由テ觀ルトキハ第二種ノ所得ニ課スル所得稅ハ資本利子稅ニシテ、第一種ハ商事會社等ニ課スル特別ノ營業稅乃至所得稅ト云フモ不可ナルナシ。故ニ我國ノ所得稅ハ三種ノ租稅ヨリ成立スト云フモ可ナリ。中ニ就キテ眞ニ所得稅ノ性質及目的ヲ具フルモノハ第三種ノ所得ニ課スルモノノミ。今實際上第一種ト第三種ノ所得トノ負擔ノ同シカラス云ハハ不公平ナル所以ヲ述ヘンニ、若シ夫レ社員又ハ株主二十一人以上ノ合名會社合資會社若クハ株式會社ヲ組織スル者ノ所得ハ、第一種ノ所得トシテ最高其千分ノ百三十ヲ課セラルルニ過キス、然ルニ百萬圓ノ財產ヲ所有スル者ニシテ自ラ之ヲ運動利用スル結果、假ニ一割ノ利益トセハ十萬圓ノ所得ヲ收ムルヲ以テ彼ハ第三種ノ所得者トシテ最高率千分ノ二百二十弱ヲ課セラルルナリ。是レソ個人事業ハ漸ク名義上會社組織ニ變更セラルル所以ナル。

佛蘭士ニ於テハ今ニ至ル迄尙完全ナル所得稅ナシ、然レトモ Impôt personnel

et mobilier ナル租稅アリ動產收入稅トモ言フヘクシテ、所得稅ノ一部ヲ形成スルモノナリ。

所得稅ノ最モ久シク行ハレシハ英國ニシテ、大陸戰爭ノ際國債及歲入ヲ整理スル目的ヲ以テ初テ小びびトノ採用スル所トナレリ、後久シク廢絶セシコトアリシモ千八百四十二年財政整理ノ必要ニ基キ復ヒ採用セラレテ現今ニ及フ、其人心ニ浸潤スルコト久シキト、國富ノ充實セルトニ因リ、英國所得稅ノ收入ハ他國ニ比シテ殊ニ著シキモノアリ、唯夫レ其制度ニ至テハ必スシモ完全ナリト云フヲ得ス、英國ノ所得稅ハ元來所得稅臭味ヲ加味セル收益稅制度ナリト云フヲ得ヘシ、而シテ五種ノ所得ヲ認ム、即チ第一種ノ所得ハ土地及家屋ノ所得ニシテ、年々ノ賃貸料ヲ以テ之ニ充ツ、第二種ノ所得ハ小作人ノ所得ニシテ、其調定ノ方法タル英國ニ於テハ第一種ノ所得ノ下ニ於テ定メタル地主ノ所得ノ二分ノ一、蘇蘭愛蘭ニ於テハ三分ノ一ニ充ルモノト認ム、第三種ノ所得ハ國庫又ハ公共的金庫ヨリ支拂フ總テノ利子年金等ヲ含ム第四種ノ所得

ハ他ノ四種ニ合容セサル總テノ所得ヲ含ミ更ニ之ヲ分テ六種トナス故ニ殆ト總テノ商工業ノ所得ヲ含蓄ス第五種ハ官吏及商工業使用人ノ俸給給料等トス今左ニ各國所得稅ノ收入ヲ掲ケンカナ。

日本(大正四年度)	第一種	一二七・一三	一九六圓
	第二種	二九四	九五四圓
	第三種	二二	二五七
	合計	三五	二六六
英國(千九百十三年)	四八	一二二	七〇八磅
普魯西(千九百十二年)	三五三	七一	〇〇〇
巴々里亞(千九百十三年度豫算)	五一	三五〇	〇〇〇
佛國(千九百十三年度)	(1)	一一二	四一九
伊太利(千九百十三年度)		三一三	〇〇〇

奧地利(千九百八年) 五一 八〇〇 〇〇〇 クローネン  
 匈牙利(千九百十三年度) 五四 四九四 九三四 クローネン

(1) 佛國及伊太利ニ於テハ未ダ完全ナル所得稅ナク其變體タル動産稅アルノミナルヲ以テ姑ラク之ヲ掲上シ置クト云フ。

今獨逸諸連邦ノ歲入ト所得稅ノ關係ヲ述ヘ次ニ國民一人ノ負擔額ヲ示サ  
 ン、庶幾クハ以テ參考トスルニ足ランカ。

國名	租稅收入ニ對スル割合	國民一人宛テ(麻)
普魯西	七〇・二二	六・四四
ザクゼン	七三・三一	一一・四四
瓦堡	四三・五六	七八二
バーデン	三五・九〇	七七六
ヘッセン	五四・三七	八九八

所得稅 所得稅制度ノ大要

種別	人員	所得金額	税額	備考
ザクゼンワーイマー		八〇・九六	八〇〇	
オルデンブルヒ		四五〇〇	五九九	
ブラウンシワイヒ		五九〇八	六六三	
ザクゼンマイニンゲン		六五四四	四九五	
ザクゼンアルテンブルク		六一七八	六一九	
ザクゼンコーブルグゴータ		七一三〇	六七九	
アンハルト		六三・九三	七三六	
シワルツブルブーゾ		七〇・五九	五九三	
シワルツブルゲン		六二・五二	四七六	
シワルツブルグール		六一・六二	四二七	
ワルデック		八四・一一	七六一	
ロイス		七二・六二	五二二	
シヤウンブルグーリツペ		六〇・一四	四九五	
リツペ				四〇四

大正元年度ニ於ケル我國ニ於ケル所得ノ分配及成形ヲ察スルニ大ニ有益ナルモノアリ之ヲ以テ獨逸ノソレト比較スルニ相去ルコト天淵管ナラサルナリ爲政治家之ニ依リテ以テ財政及經濟政策ヲ策スルアランニハ唯ニ國ノ幸ノミニアラサルヘシ。

種別	人員	所得金額	税額	備考
第一種				
甲	三・五九〇	六・五七	一・五七〇・九・五九	九八・九・二・八一
乙				
十萬圓以上	二	五七九・四九六	七四・三六	
五萬圓以上	二〇	一・三五・一・五九	一・三五・一・五六	

三萬圓以上	三	一四六〇・九〇一	一三〇・五五四
二萬圓以上	四	一〇八五六・五六六	七三・六一一
一萬五千圓以上	七	一三〇二・四八一	七二・五七六
一萬圓以上	一三	一七〇三・二八〇	八五・二五八
五千圓以上	四六	三二七八・九二六	一五五・七四五
五千圓未滿	八七	七四四五・九二九	三三五・四〇七
計	六〇三五	二三四三・七三〇	一七〇一・七四五
合計	九六五	一八〇・五四六・六八九	一一五二・〇二六

前年ニ比シ實際人員八六〇人(九分八厘)所得金三一五八三千餘圓(二割一分)稅額一八〇七千餘圓(一割八分)ヲ増加セリ  
 實際人員一人當所得金額一八七五八圓稅額一七六四圓餘圓稅額八八圓ヲ増加セリ(所得金額千圓當稅額六三圓八一前年ニ比シ一圓三九減)  
 同上所得金額二二三三三餘圓(一割九分)稅額四六四餘圓(一割九分)ヲ増加セリ(所得金額千圓當稅額一九圓六二前年ニ比シ二錢増)

社債利子	—	一〇四三六・二七六	二〇三・五九七
合計	—	一四一九・五五五	二七六・五四七
第三種			
十萬圓以上	內	三二八・二二九	三九・七三二八
五萬圓以上	內	一・九五二・四三三	七六・〇七二八
三萬圓以上	內	二六九・三九〇	一〇〇・八五三
二萬圓以上	內	四・九二二・四七五	一〇五・二四九三
一萬五千圓以上	內	七・三九六・〇〇〇	九三・一四九三
一萬圓以上	內	五〇四・二六七	一〇五・二四九三
五千圓以上	內	九〇七・三二七	一三九・五二八三
三千圓以上	內	六五六・二四九	一三九・五二八三
二千圓以上	內	九八五・九四八	二七〇・四〇三四
千圓以上	內	一四八・一六四	二二八・八三〇九
合計	內	一八〇・三〇四	四六四・六二九三

所得稅 所得稅制度ノ大要

五百圓以上	内	一六、八七、三三〇	五、〇七、三三二
三百圓以上	内	一〇、〇三、三六八	四、二四、七七七
	内	一三、九六、三三六	
	内	二〇、七四、二〇〇	
合計		五八、二四、七三三	二七、五二、四六五
總計		八六、二四、七三三	三九、三三、〇三八

前年ニ比シ人員六六三三五三人(五分二厘)所得金額五七三二三千圓(八分)稅額二四七三千餘圓(九分八厘)ヲ増加セリ但シ家族ノ分ハ人員一七二五八人所得金額五五〇千餘圓ノ増加ナリ一人當所得金額五七〇圓餘稅額一五〇圓五二九ニシテ前年ニ比シ所得金額千圓當稅額三七五圓前年ニ比シ五八錢増シ)

總計前年ニ比スル人員六七一三七人(五分二厘)所得金額九一、二四〇千餘圓(一割)稅額四三、二六千餘圓(一割二分)ヲ増加セリ

### 第二十三章 交通稅

交通稅ノ名稱ハ獨逸ニ於テ夙ニ是レアルモ佛蘭士ニ於テハ未タ此レニ相當スル文字ナキカ如シ英吉利ニ於テモ亦然リ近時或ハ運輸交通稅ノ名稱ヲ用フル者アレトモ未タ遍ク行ハルルニ至ラス茲ニ交通稅ト稱スルハ獨逸語ノ「ふるけるすし」といふニシテ我國ノ電車、汽車、船舶ノ料金ニ課スル通行稅ト同シカラス否、通行稅ハ寧ロ其一種ニ過キス交通稅ハ運輸及取引稅(取引所稅ニアラス)ノ謂ニシテ賣買讓與取引其他或種類ノ法律行為ヲ以テ課稅ノ目的物トス。

抑茲ニ交通ト云フハ財物價格及諸般ノ經濟關係ノ移動ヲ意味ス故ニ廣義ノ交通稅ハ財物、價格及諸般ノ經濟關係ノ移動アルニ際シ其移動セル財物、價格及關係ヲ稅スル租稅ト定義スルヲ得ヘシ而シテ財物、價格及經濟關係等ノ移動トハ不動産、動産、勤勞、價格、身分等ノ變動ヲ謂フ此等ノ現象ヲ惹起スル原

因ハ主トシテ個人ノ缺乏ヲ充足セントスル行動ト出產死亡トノ二者ニ外ナラス、中ニ就キ死亡出產ニ基ク財物及其價格ノ移動ニ關シテ租稅ヲ課スヘキヤ否ヤノ問題ハ最早既決ノ問題ニシテ、當ニ其實例ノ存スルコト久シキノミナラス、學理上亦殆ト一定セリト雖モ、經濟上且ハ社會上個人ノ缺乏ヲ充足セシカ爲ニ發生スル財物及價格等ノ移動ニ關スル課稅問題ハ未タ一定ノ歸着スル所ナシ。然レトモ亦絕對的ニ其不可ヲ唱フル者モ亦之ナシ、念フニ經濟上ノ進歩ハ個人ノ欲望ヲ充タス手段、材料ヲシテ日ニ益々繁多ナラシメ、而シテ其欲望ノ充足ハ即チ擔稅力ノ存在ヲ前提トス、是レニ於テカ交通稅ノ正當ナル所以ノ義モ自ラ明カナリ。

往時ニアリテハ死亡出產ノ原因セル財物及價格ノ移動ヲ目的トスル租稅例ヘハ相續稅ノ如キハ殆ト唯一ノ交通稅ナリキ、然ルニ近頃ニ及收入多ク且將來ニ於テ發達ノ餘地アルモノハ寧ロ經濟上ノ欲望ヲ充足センカ爲ニ生スル價格及財物等ノ移動ニ課スル租稅トス。人若シ交通稅ノ性質ヲ明カニセン

トセハ、須ラク之ヲ收益稅ト比較スルヲ便トス、即チ收益稅ハ靜體ノ財産ヲ稅シ交通稅ハ之ニ反シテ動體ノ財産及權利、身分、資格等ヲ稅スルヲ以テ其目的トス。

交通稅中將來益發達ノ餘地アルモノ多シト雖モ就中其重ナルモノハ印紙稅登錄稅、相續稅等トス、其他英語ノ *Bettermenttax* 或ハ獨逸語ノ *Verhzuwaclassesener* モ又其一種ニ屬ス、此種ノ租稅ハ大凡不時ノ利得ヲ稅スルヲ以テ其目的トナシ、時勢ノ進歩變遷ノ結果勞スル所ナクシテ財産價格等ノ増加シタル時ヲ利シ、以テ課稅ノ機會ヲ求ムルモノヲ云フナリ。

以下節ヲ追ヒ交通稅ノ重ナルモノヲ説明セントス。

### 第一節 印紙稅

印紙稅ハ交通ニ關スル出來事、殊ニ財産ノ授受若クハ契約ノ締結ニ關スル個々ノ行爲ヲ稅スル租稅ナリ。故ニ其實體及性質上ヨリ觀レハ往々手數料ニ

類スルモノアルノミナラス、其客體即チ課税ノ目的物ハ千種萬様ナリ。凡ソ手  
 數料ト租税トノ間ニ相接着シ居ル點アルハ夙ニ世人ノ認ムル所ナレトモ、其  
 最モ甚タシキハ印紙税及登録税ノ場合ナリトス何トナレハ課税ノ目的物ノ  
 相共通セルノミナラス、印紙ヲ貼用スルコト及其徵收方法等モ相同シキヲ以  
 テナリ。現ニ我邦ニ於テモ日清戰役後ノ登録税ハ其前ニ於ケル登記料ノ發達  
 シタルモノニ外ナラス、又佛蘭士等ニ於テハ未タ全ク此兩者ノ區別ヲ認メサ  
 ルナリ。

印紙税ノ名稱ハ其徵收上印紙ヲ使用スルニ因ル、國ニ依テハ單リ印紙ノミ  
 ナラス證券ヲモ用フルコトアリ、此場合ニ於テハ寧ロ證券印紙税ト名ツクル  
 ニ若カス。我國ノ印紙税法ハ明治三十二年三月法律第五十四號ヲ以テ制定セ  
 ラレ後次テ數回ノ改正ヲ經タリ、其第一條ニ曰ク財産權ノ創設、移轉、變更若ク  
 ハ消滅ヲ證明スヘキ證書帳簿及財産權ニ關スル追認若クハ承認ヲ證明スヘ  
 キ證書ヲ作成スル者ハ此法律ニ依リ印紙税ヲ納ムヘシト。是レニ由テ觀レハ

我國ノ印紙税ハ證書若クハ帳簿ト云ヘル文字ニ依テ其範圍ヲ限定セリ、是レ  
 他國ノ印紙税ニ比シテ其範圍狹隘ナル所以ナリ。又第五條ニ規定セル印紙税  
 免除ノ場合ト雖モ他國ニ於テハ却テ之ヲ税スル例尠カラス、抑印紙税ノ最モ  
 發達セルハ佛蘭士ニシテ、同國ノ印紙税ハ所謂法律行爲ノ外加留多類ノ製造、  
 販賣、船舶及車輛ヲ以テスル人間ノ運送業其他鐵道ノ切符殊ニ廣告等ニ至ル  
 迄悉ク印紙税ヲ課ス。然ルニ我國ニ於テハ印紙税法第一條ニ證書及帳簿ノ作  
 成ナル文字ヲ以テ其範圍ヲ定ムルカ故、縱令他國ニ於テハ印紙税トシテ重要  
 ナルモノト雖モ尙印紙税トシテ之ヲ認ムルコト能ハサルモノナキニアラス。  
 是レ印紙税ノ外ニ骨牌税ヲ設ケ又通行税トシテ鐵道、船舶其他ノ運搬業ニ課  
 スル所以ナリ。斯ノ如ク相次テ特種ノ租税ヲ新設セシト雖モ其範圍ハ尙擴張  
 スルノ餘地アリ。廣告ノ如キハ其重ナルモノナリ。  
 我國ニ於ケル印紙ノ收入ハ左ノ如シ。

一、收入印紙 登録税

一六 六四三 六〇六

砂糖消費税	六七一	一九一
賣薬印紙税	二二三	七九九
印紙税	三九四	三二二
狩獵免許税	四三五	八八三
訴訟用印紙料	一二八	三七一
關稅法第四十三條ニ依ル關稅	五六一	一五一
鑛業及砂鑛業ニ關スル手数料	三四一	八九一
其他	三九一	九五八
計	三〇〇	一七二
二、骨牌印紙	一〇七	九八八
三、現金收入	一二二	八四五
計	三〇	二六五
三〇	二六五	〇〇五

尙重ナル諸國ノ統計ヲ掲ケテ參考ニ供セン。

英(千九百十三年度決算)	三五	九二二	八二五
佛(千九百十三年度豫算)	二四四	〇六〇	五〇一
獨逸帝國(同上)	二四七	七四四	五〇〇
伊	八五	〇〇〇	〇〇〇
露(千九百十二年度決算)	一〇七	四五五	五六〇
埃	六	七七二	〇〇〇

第二節 登録税

登録税モ又印紙税ト等シク最モ手数料ト混シ易シ、何トナレハ之ヲ徴收スル場合殆ト相同シケレハナリ例ヘハ公證人及登記官吏ノ如キ皆手数料ヲ徴收シ、而シテ登録税ハ手数料ノ如ク報償ヲ要スル司法行政事務ニ伴フヲ以テ二者ノ相遠カラサル所以ノ義モ自ラ明カナルヘシ。登録税ノ最モ發達セルハ佛蘭士ナリ、同國ノ登録税法ニ據ルニ登録トハ民事、刑事、非訟事件ニ關スル書



類又ハ財産權ノ移動ヲ公簿ニ謄寫若クハ摘録スル形式ニシテ、其登録スル事項ヲ以テ課税ノ目的物ト爲ス租税ヲ登録税トナス。蓋シ佛國ノ登録税ノ由來ハ甚タ久シキモノニシテ彼ノ大革命ノ際一旦廢止セラレタリシカ、後千七百九十八年ノ法律ニ依リテ復活セラレ、政府政體ノ變更アルニ當リ屢々改正セラレシニ拘ハラヌ、今尙依然トシテ之ヲ存シ佛國財政上ノ一好財源タリ。

抑佛國ノ登録税ハ二種ヨリ成ル、一ハ即チ純然タル登録ニ關スル租税ニシテ、一ハ即チ或種類ノ事實ノ證明ニ關スル租税ナリ、其他佛國ニ於テハ一般登録税ノ外ニ尙特別ノ登録税アレトモ左迄重キヲナスニ至ラス、我國ノ登録税法ハ明治二十九年三月法律第二十七號ヲ以テ制定セラレ、後三十二年法律第六十號及第八十三號ヲ以テ重ナル改正ヲ經タリ、此改正ハ民法及商法ノ改正ニ伴ヒタルモノナリ、例セハ其第二條ハ不動産ノ登記、第三條ハ船舶等ノ登記、第四條ハ船籍ノ登録、第五條ハ土地臺帳ニ或種類ノ事項ヲ登録スル場合、第六條ハ商事會社其他營利ヲ目的トスル法人ノ登記ヲ受クル場合ヲ規定セリ、其

他以下第十四條ニ至ルマテ登記ヲ要スルト同時ニ課税スル場合ヲ規定セリ。

我國ノ登録税ノ收入ハ未タ多大ナルニ至ラス、大正四年度ノ豫算ニ依ルニ漸ク一千六百六十四萬三千六百六圓ニ達ス、之ヲ歐洲諸國ニ比スルニ殆ト云フニ足ラサル程ナリ、例ヘハ佛國ハ二億四千四百六萬五百一法、伊太利ハ九千六百五十萬リトラノ收入ヲ算スルカ如シ。

### 第三節 相續税

顧フニ相續税ハ其初財産ノ相續ニ伴フ手数料ナリキ、更ニ其昔ヲ釋スル時ハ封建諸侯若クハ武門武士カ君主ヨリ相續ヲ抑付ケラレシニ當リ謁見ノ際貢進スル献上物ニ外ナラサリシナリ、然ルニ封建制度ノ廢ルルト共ニ相續事項ハ轉シテ司法裁判所ノ管轄ニ歸シ、同時ニ手数料ヲ徵收スルニ至レリ、爾後ノ變遷ハ此種ノ手数料ヲシテ登録税トナラシメ、更ニ全然一個獨立ノ租税ト

ナラシメ畢ンヌ。

故ニ現今ノ相續稅ハ云ハハ致富稅ノ性質ヲ備フルニ至リ、相續ノ爲新ニ擔稅力ヲ増加スル所アリト云ヘル理由ヲ以テ課稅ノ根柢トス。茲ニ於テカ往時一般ニ間接稅ト認メラレシ相續稅モ今ヤ漸ク學理上實際上兩ナカラ直接稅ト認メラレントス、英國及獨逸ニ於テハ依然相續稅ヲ以テ間接稅中ニ容ルルト雖モ、瑞士蘭ニ於テハ立法上既ニ之ヲ直接稅ト看做セリ、以テ如何ニ世運ノ推移シツツアルカラ知ルニ足ル。

之ヲ要スルニ納稅ハ一般臣民ノ義務ニシテ、而シテ其義務ヲ盡スヤ其之ヲ負擔シ得ヘキ力ニ應スルヲ以テ極致トス。苟クモ之ヲ負擔シ得ルカニシテ存在シ、且其機會ニシテ之アリトセハ、亦如何ナル時ト場合タルトヲ問ハサルナリ。相續ハ實ニ此機會ヲ提供シ又人民ノ擔稅力ヲ表彰スル好個ノ一手段ナリト云フモ不可ナカラシ。諺ニ曰ヘルカ如ク、凡ソ親ノ物ハ兒ノ物ナリト云フト雖モ、而モ其兒ニシテ相續スル時ハ一朝ニシテ地位分限ヲ變更スヘシ、殊ニ巨

額ノ財產又ハ父祖ノ社會的地位ヲ相續スル者ニトリテ然リトス。是レニ由リテ觀レハ相續ハ彼ノ相續者ニ與フルニ其嘗テアリシコトナク、又將ニナカラントスル擔稅ノ機會ヲ以テスト云フモ大ナル不都合ナカラシ。西人曰ク、相續ハ相續者ヲシテ不時ノ富ヲナサシムト。予輩ハ彼ト相續及親屬ノ制度習慣ヲ同ウセサル我ニ在テ等シク之ヲ認ムルノ不可ナルヲ信スト雖モ、亦相續カ相續者ノ地位竝ニ資力ヲ増進セシメ以テ部屋住ノ彼ニ比シテ奉公ノ義務ヲ盡スニ容易ナラシムルヲ疑ハス、特ニ相續其時ニ於テ。

相續稅ハ相續ヲ開始シタル時相續財產ヲ以テ課稅ノ目的物トナス。而シテ我相續稅法ハ明治三十八年一月一日法律第十號ヲ以テ制定セラレ、其相續財產ハ同法施行地ニ在ルヲ要スルカ故ニ、人稅タル相續稅トシテハ如何カト思ハル、何トナレハ相續者其人ヲ中心トセス財產ヲ溯索スルカ故ニ、若シ帝國臣民ニシテ相續稅法施行地以外ニ於テ巨額ノ財產ヲ授受スルコトアルモ、吾人ハ之ヲ捕捉シテ以テ課稅スルコト能ハサルヘケレハナリ英國ノ相續法ハ此

種ノ相續財産ヲ稅センカ爲特別稅ヲ設ケタリ、以テ用意ノ周到ナルヲ見ルニ足ル。

然リ而シテ本邦相續稅法第二條ハ被相續者カ該法施行地ニ住所ヲ有スルト、有セサルトニ依リテ所謂相續財産ニ關スル規定ヲ別ニス即チ其之ヲ有スル場合ノ相續財産ハ左ノ如シ。

- 一、相續稅法施行地ニ在ル動産及不動産。
- 二、同法施行地ニ在ル不動産ノ上ニ存スル權利。
- 三、前掲以外ノ財産權。

之ニ反シ、被相續人カ同法施行地ニ住所ヲ有セサルトキハ以上ノ第一及第二ノ財産ヲ以テ相續財産トナスノミ。

相續稅率ハ家督相續及遺産相續ニ由リ同シカラス、大要前者ニ輕クシテ後者ニ重シ、是レ家督相續ハ當然ノ相續タルノミナラス、相續者カ一家眷族且ハ其祖先ニ對シ相續ノ爲負フ所ノ義務少カラサルヲ以テナリ尤モ歐米諸國ニ

於テハ必スシモ家督相續ノ制度ナキニアラスト雖モ普通人民ニトリテハ稀有ナルヲ以テ殆ト家督相續ト遺産相續トヲ區別スルノ必要ナク、唯血縁ノ親疎ニ由リテ稅率ヲ異ニスルノミ、加之、家族制度ノ潰廢ハ嘗ニ血族間ニ止マラス、無縁者間ニ於ケル贈與又ハ遺産相續ヲシテ有リ勝チナラシムルヲ以テ、血統ノ親疎ニ由リ稅率ヲ高低スルノ必要甚タ多シ、之ニ反シ、我國ニ於テハ血縁ノ親疎ヨリハ寧ロ先ツ家督相續ト遺産相續トノ別ヲ重視スルヲ以テ稅率ノ高低ハ主トシテ先ツ茲ニ根柢シ、血縁ノ親疎ハ之ニ次テ第二ノ條件タルノ觀アリ(相續稅法第八條參照)而シテ家督及遺産相續兩ナカラ血縁ノ遠近ニ依リ、之ヲ第一種、第二種及第三種ニ分チ、以テ其稅率ヲ異ニス。大要被相續者ノ直系卑屬者ニ輕ク、直系尊屬者之ニ次キ、其他ノ相續人ニ最モ重シ。家督相續ノ場合ニ於ケル最低率ハ千分ノ十、遺産相續ノ場合ニ於ケル最低率ハ千分ノ十五ニシテ、以上皆超過累進率ニ依リテ増進ス、相續稅法第八條ニ相續稅ハ課稅價格ヲ左ノ各級ニ區分シ、其各區分ニ對シ相續人ノ種類ニ從ヒ追次ニ各稅率ヲ適

用シテ之ヲ課ストハ、即チ此謂ナリ、其詳細ハ左ノ如シ。

家督相續

税

率

課税價格

五千圓以下ノ金額	千分ノ十	千分ノ十二	千分ノ十五
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ十二	千分ノ十四	千分ノ二十
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十四	千分ノ十七	千分ノ二十五
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十七	千分ノ二十	千分ノ三十
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ三十五
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ四十
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ三十五	千分ノ四十五
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十五	千分ノ四十	千分ノ五十

相續人が被相續人ノ家族タル直系卑族ナルトキ

相續人が被相續人ノ指定シタル者民法第九百八十二條ニ依リ選定セラレタル者、被相續人ノ直系尊屬又ハ入夫ナルトキ

相續人が民法第九百八十五條ニ依リ選定セラレタル者ナルトキ

十萬圓ヲ超ユル金額カ其五萬圓毎ニ(百萬圓ニ至リテ止ム)

遺産相續

税

率

千圓以下ノ金額	千分ノ十五	千分ノ十七	千分ノ二十五
千圓ヲ超ユル金額	千分ノ十七	千分ノ二十	千分ノ三十
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ四十
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ四十五
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ三十五	千分ノ五十
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十五	千分ノ四十	千分ノ六十
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四十	千分ノ四十五	
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四十五	千分ノ五十	

相續人カ直系卑屬ナルトキ

相續人カ配偶者又ハ直系尊屬ナルトキ

相續人カ其他ノ者ナルトキ

交通税 相續税

七萬圓ヲ超ユル金額

千分ノ五十

千分ノ五十五

千分ノ六十五

十萬圓ヲ超ユル金額ハ其五萬圓毎ニハ百萬圓ニ至リテ止ム

千分ノ五ヲ加フ

千分ノ五ヲ加フ

千分ノ五ヲ加フ

相續稅ヲ課セラレタル後三年以内ニ於テ更ニ相續開始シタルトキハ前ノ相續額ニ對スル相續稅ニ相當スル相續稅ヲ免除シ、而シテ又五年以内ニ於テ更ニ相續開始シタルトキハ前ノ相續額ニ對スル相續稅ノ半額ニ相當スル相續稅ヲ免除スルハ、同稅法第十條ノ規定スル處ナリ、此規定ハ頻繁ナル相續ニ基ク相續稅ノ負擔ヲシテ過重ナラサラシメントスルノ旨趣ニ出テシモノニシテ、寔ニ尤ナル事共ナリ。尙同稅法第十七條ハ納稅ノ便宜ヲ謀ランカ爲稅金額百圓以上ナルトキハ相續稅ニ相當スル擔保ヲ提供シタル者ヲシテ三年以内ノ年賦延納ノ途ヲ開ケリ、是レ又左モアルヘキ事ナリトス。

帝國政府カ明治三十八年度ニ於テ初テ相續稅ヲ起スヤ四百三十萬九千五百九十六圓ノ收入ヲ豫期セシノミナラス、追テハ年々一千萬圓ノ收入ヲ豫想セシ程ナリキ、爾來其結果ノ見ルニ足ラサルハ夙ニ世人ノ知ル處ニシテ、畢竟

スルニ同稅ノ世態民情ニ適ハサルノ致ス所ナリ、然ルニ人情ハ世ト推シ移ル、他日定メテ發展スルノ日アラシ、北亞米利加合衆國ノ如キ其之ヲ行フ未タ久シカラス、且ヤ普ネカラサルニ拘ラス、猶五年毎ニ其收入ヲ倍加セリ、佛國ノ如キハ千九百年後ニ相續稅ヨリ二億「ふらん」ノ收入アリテ、優ニ全歲入ノ九分ヲ占メ、英國ハ千八百四十萬九千二百三十九磅ニシテ租稅收入ノ一割九分全歲入ノ八分ヲ占メタリ、斯ル形勢ナルヲ以テ、合衆國ニ於テハ其資產稅ヲ移シテ以テ地方ノ財源ニ宛テ、之ニ代フルニ相續稅ヲ發達セシメテ以テ「すてーつ」ノ財源トナサンコトヲ主張スル者アルニ至レリ、以テ將來ニ於ケル相續稅ノ趨向ヲ察スヘシ、千九百十三年ニ各國相續稅ノ收入ハ左ノ如シ。

日本(大正四年度)

二二九九 一八六

英國

二五 七二六 二七七磅

伊太利

四八 五〇〇 〇〇〇リーラ

獨逸帝國

四七 〇〇〇 〇〇〇麻

交通稅 價格増差稅

### 第四節 價格増差稅

近年新タニ一個獨立ノ租稅トシテ遽ニ學者政治家ノ注意ヲ喚起セシノミナラス、國稅トシテ迄モ實施セラルルニ至リシハ、價格増差稅ナリトス。抑價格増差稅トハ其名稱ノ示スカ如ク或ル財產ノ價格ノ騰貴スルニ當リ、一定ノ時期ニ於ケル從前ノ價格ト課稅當時ノ價格トノ差額ヲ以テ課稅ノ目的物ニ宛ツル租稅ナリ。尤モ唯リ差額ノミナラス、課稅當時ノ全價格ヲ稅スル立法例ナキニシモアラス、此場合ニ於ケル價格増差稅ハ單ニ增價稅ナリト雖モ(獨逸)ニ於テハ「るせんきるへん市元」則トシテハ須ラク新タニ增加セル價格又ハ財富ヲ稅スヘシ、稅源ノ如キハ全ク茲ニ存ス。予輩ハ既ニ或ル財產ノ價格ト謂ヘリ、然リ一定ノ財產ニ限ラルヘクシテ主トシテ土地ノ價格ノ增加及騰貴ヲ捕打セントハスルナレ。尤モ間々土地ト家屋トヲ分離シテ家屋ヲモ其中ニ數ウルコトナ

キニアラスト雖モ大抵土地ニ附屬セシムルヲ常トス、而シテ土地ニ宅地及農業用地、山林、原野等アリ、宅地ニ郡村及市街宅地、商工業用ノ敷地アリト雖モ、價格増差稅ハ元ト主トシテ市街宅地及市街類似ノ土地ノ增價ヲ稅スルヲ以テ目的トス。是レ近時市街ノ繁昌ハ著シク其土地ノ價格ヲ騰貴セシムルヲ以テナリ。

蓋シ經濟及政治ノ進步スル邦國又ハ地方ニ於テハ土地ノ賣買價格ハ漸ヲ追ウテ騰貴スルヲ常トス、此騰貴タルヤ所有者其人ノ努力、勤勉若クハ資本、勞力ヲ投入スル結果タル場合少カラスト雖モ、亦却テ社會一般ノ進步發展ニ起因スル例多シ。彼ノ市街ノ膨脹、鐵道及電車ノ敷設ノ爲土地ノ價格ノ騰貴スルハ世人ノ耳目ニ舊キ事實ニシテ今更云ハスモカナ、殊ニ我國ノ如キ維新以來政治經濟上ノ進步顯著急劇ナル場合ニ於テ然リトス。之ヲ田尻子ニ聞ク、子ニ老知人アリ、其人タルヤ所謂維新ノ功臣ニシテ元老ノ班ニ列ス、其居ニ名ケテ四秀二艶樓ト云フ子嘗テ怪ンテ之ヲ問フ、其人答ヘテ曰ク、是レ小子輩ノ知ル

處ニアラス、此居タル維新ノ初予ノ購求セシ所ニシテ大枚四十二圓ヲ投セリ之ヲ紀念センカ爲名クルニ四秀二艶ヲ以テセシノミ、豈黃絹幼婦ナラスヤト、而シテ其現價ヲ問ヘハ裕ニ十五萬圓以上ナリト云フ、以テ一班ヲ察スルニ足ラン。

如上ノ騰貴ハ放下セル資本ノ利子ニ比シテ遙ニ高シ況ンヤ期年ナラスシテ二倍三倍ノ増加ヲ見ル場合少カラサルニ於テヤ、果シテ然ラハ其等ノ土地所有者ノ租稅力ノ増進スルハ云フヲ俟タサルヘシ亦社會一般ノ進歩ニ基キ増加セル財產ノ一部ヲ割テ以テ奉公セシムルハ豈當然ノ事理ナラザランヤ。加之、是等ノ原因ニ基ク財產ノ増加ハ假令地租、所得稅、營業稅、交通稅等ヲ以テスルモ適當ニ捕打スルコト能ハサルモノナリ、是レニ於テカ増差稅ノ正當ナル所以ヲ見ル。

然リ而シテ市街宅地ノ價格ノ騰貴ハ地方團體ノ經營施設ニ待ツコト多キヲ以テ、土地增價稅ハ元ト市町村稅タルヲ常トシタリキ、然ルニ近來之ヲ擴張

シテ以テ、國稅ヲ起シタルハ英國及獨逸帝國トス。英國ニ於テハ寔ニ千九百十年四月二十九日カノ財政法律(Finance Act)中ニ於テ(Land value Duty)ヲ制定シ、又獨逸ニ於テハ帝國財政改革否寧口整理ノ一端トシテ増差稅ヲ採用セリ、前者ハ實ニ土地價格ノ増加稅ニ止マラスシテ明キ地其他ヲ稅スルヲ以テ含蓄極メテ廣シ、後者ハ之ニ反シ土地ノ賣買アル場合ノミヲ稅シ、而モ建築物アル土地ハ二萬、まゝく空地ハ五千、まゝく以上ヲ値スルニアラサレハ課稅セサルナリ、是レ狹小ノ土地ヲ稅スルハ其本來ノ目的ニアラスシテ、必スシモ特別ノ擔稅力ノ存在ヲ認ムルコト能ハサルヲ以テナリ、故ニ獨逸ノ諸都市ニ於テハ一定ノ限度ヲ超エテ騰貴スルニアラサレハ、之ヲ課稅セサルノ例ナキニアラス、例ヘハふらんくふると、あむ、まいん市ニ於テハ三割、えっせん及げるせんきるへん市ニ於テハ二割、けるん、ごるとむん、ごわいせんせー及ぐるーす、りひたーふると市等ニ於テハ一割迄ノ増加ヲ免除スルカ如シ、而シテ稅率ハ土地ノ價格ノ騰貴ノ多少ニ由リテ自ラ高低スル所アリ、けるん及ぐるーす、りひたーふ

る。市ニ於テハ一割ヨリ二割五分ノ間ヲ出入シ前者ノ最高率ハ十六割以上騰貴セル土地ニノミ、之ヲ課スルト云フ。

價格増差税ハ雷ニ財政上ノミナラス、方今屢々市街地ニ行ハルル土地ノ投機的賣買ヲ防キ、且ヤ市街ニ於ケル住居問題ヲ解決スルヲ以テ其目的トスルカ故ニ土地賣買ノ頻繁ナル場合ニ於テ適切ナルヲ見ル。加之素封家ノ有ニ歸シ長ク同一所有者又ハ同一家族ノ手ニ止マル土地ニ對シテハ從來ノ租税ヲ以テシテハ地租ノ外殆ト課税ノ手段ナカリシニ反シ賣買贈與頻繁ナル土地ノ所有者ハ登録税其他ノ課税ヲ蒙ルノ不公平ヲ避クルヲ得ヘシ而シテ相續税及價格増差税ハ相俟テ其效用ヲ發揮スルヲ得ヘシ。但慎ムヘキハ收税吏ノ嚴刻ナル誅求手段ナリ一昨年予之ヲ獨逸（ドイツ）ニ見ル。市ノ一財政官吏ニ聞ケルコトアリ。一市民アリ、或土地ノ見込買ヲ行ヒ家屋ヲ建築セシニ收税吏ハ直チニ過當ノ價格増差税ヲ課シ連年訴訟ノ結果同人ハ終ニ破産ノ窮境ニ頻セリト、以テ常識ヲ缺ク收税吏ノ納税者ニ弊如何ニ甚シキカヲ察スルニ足

ラン。わくなく一嘗テ收税官吏ノ權限ニ關シ他ノ行政官吏ニ比シ更ニ大ナル採量ノ權限ヲ與ヘサルヘカラサルヲ說キシハ偶然ナラサルナリ。各國共之ヲ行フコト未タ年所ヲ經サルカ故ニ其收入未タ多キニ至ラス。最近ノ報告ニ徵スルニ獨逸帝國ハ五百萬麻英國ハ四十三萬七千七百七十磅ニシテ、而モ英國ノ計數ハ之ヲ以テ全然増差税ノ收入ト看做スコト能ハサルナリ。

### 第五節 兌換銀行券發行稅論

兌換券ノ發行ハ國家ノ特權ニ屬シ其行使ハ雷ニ一國ノ金融ヲ調節シ、財界ノ隆替衰榮ニ影響スル所甚大ナルノミナラス其行使者ハ之カ爲多大ノ利益ヲ收ムルハ云フヲ俟タス是レヲ以テ露士亞帝國ノ如ク中央銀行ヲ以テ帝國ノ國立トナシ緩急事アル毎ニ國家ノ難ニ赴カシムルハ勿論平時ニ於テモ同銀行ノ益金ヲ擧ケテ以テ國家ノ歳入ニ繰入ルル國ハ兎モ角私立中央銀行ノ制度ヲ採用スル國ニ於テモ國庫金ノ取扱義務ヲ負ハシムル外、兌換銀行券ノ



發行ニ對シテハ物質的義務ヲ課スルヲ例トス、我國ノ如キハ其發行額ニ對シ明治初年以來兌換銀行券發行稅ヲ課シツツアリ其收入大正四年度ニハ百十萬七千三百二十二圓ニ上ル是レ少額ナルカ如シト雖モ其關スル所決シテ尠少ニアラサルナリ、由來日本銀行ノ制限外發行額ニ對シテハ課稅スルヲ例トスレトモ是レト彼レトハ決シテ同日ニシテ語ルヘカラサルナリ、若シ夫レ制限外發行額ニ對スル課稅ハ其目的日本銀行ノ利益ニ對スル國家ノ分ケ前ノ請求ニアラスシテ固ト其發行ヲ禁止スルニアリ之ニ反シテ通例ノ發行高ニ對スル課稅ハ發行ノ禁止ヲ目的トセサルノミナラス、否寧ロ其發行ヲ歡迎獎勵スルヲ以テ目的トスヘキナリ故ニ均シク租稅ナリト雖モ納鑿相容レス黨舊器ヲ同フスルコト能ハサルモノナリ實ニヤ一租稅ニシテ兩様ノ作用ヲ滿タスコト能ハサルハ瞭ニシテ若シ制限外兌換券發行稅ニシテ兌換券ノ發行ヲ妨碍スルモノトセハ通常ノ場合ニ於ケル發行稅モ亦之ヲ妨碍スルハ云フヲ俟タスシテ唯其程度ニ多少緩急ノ差別アルニ止マルヘシ、果シテ然リトセ

ハ通常ノ場合ニ於ケル兌換券發行稅ハ其目的ヲ達スルコト能ハサルノミナラス却テ有害無益ニ終ラン耳、何トナレハ銀行券ノ發行ヲ喚起シテ金融ノ圓滑ヲ謀ルハ愚カ寧ロ之ヲ收縮シテ金融ノ切迫ヲ惹起スヘケレハナリ、是レヲ以テ普通ノ場合ニ於ケル兌換發行稅ハ設令市場ノ要求ニ應スルトスルモ尙夫レ丈ケ金利ヲ騰貴セスンハ止マサルヘシ金利ノ騰貴ハ財界ヲシテ不尋常タラシメ商工業ノ沈滯ヲ結果スルハ自然ノ勢ヒナリ、故ニ予輩ハ發行稅ニ代フルニ中央銀行ノ利益分納金ノ制度ヲ以テセンコトヲ提言セントス、若シ此制度ヲ採用センカ銀行當局者ハ其利益ヲ増加センコトヲ勗ムルノ結果愈々益々銀行ノ活動ヲ敏活ニシ一國金融ノ便ヲ圖リ、商工業ニ資スルニ至ルヘシ、且ヤ兌換券發行稅ハ銀行利益ノ有無ニ關ハラス單ニ發行額ニ準據シテ其負擔ヲ定ムルヲ以テ動モスレハ銀行當局者ヲシテ小心怯懦ナラシメ發行ヲ制限セシムル恐レアラシモノ之ニ反シテ利益ノ分納ハ既ニ利益アリシ後ノ事ナルヲ以テ毫モ銀行ノ活動ヲ掣肘スル憂ヒナシ、否益々銀行ヲシテ銳意邁往セ

シムルニ至ラン。予輩ハ現下ノ我帝國ニ於テ兌換券發行稅ヲ廢止シテ利益分納金ヲ採用スルノ必要ヲ認ム是レ唯リ金融ノ調節ヲ謀ル上ニ於テ必要ナルノミナラス又兼ネテ金利ノ低落ヲ謀ル最要政策ノ一ナリ人或ハ國產獎勵實業ノ發達ヲ説ク者アルモ現今ノ如ク金融逼迫金利騰貴シ日本銀行ハ常ニ吾所關焉ノ態度ヲ以テ之ニ臨ムニ如何ソ内國產業ノ隆興ヲ望ムヲ得ンヤ。

獨逸帝國銀行、英蘭銀行等ハ多少ノ差異アルニ拘ハラズ皆利益分納金ノ制度ヲ採用ス殊ニ前者ニ至テハ織巧ヲ極ムルモノアリ其方法タル帝國銀行設立以來都合五回ノ改正ヲ經最後ニ千九百九年六月一日ノ法律ヲ以テ千九百十一年一月一日ヨリ左ノ方法ニヨリ帝國銀行ノ利益金ヲ分配スルコトトセリ。即チ先ツ總益金ノ三分五厘ハ株主ノ所得ニ充テ殘高ノ四分ノ一ハ株主ノ第二配當ニ宛テ四分ノ三ハ政府ノ有ニ歸スルモノトス。尤モ第一配當以下ノ殘高ノ一割ハ準備金トシテ之ヲ積ミ立テ株主及政府各其半額ヲ負擔スヘシ、之カ爲年々増加スル帝國銀行ノ準備金ハ大凡百八十萬麻ニ達スト云フ又千

八百七十六年ヨリ千九百九年ニ至ル間ニ政府及株主ノ帝國銀行ヨリ取得セシ金額ハ左ノ如シ。

	帝國へ	株主へ
一八七六一一八九〇	三七七八四九九一	一一三八四六〇〇〇
一八九一一一九〇〇	九八五六五九一八	九四七六四〇〇〇
一九〇一一一九〇九	一五九一九八九九〇	一〇五五六六三三〇
若シ夫レ元資本ニ對スル平均利率ヲ以テスルトキハ		
一八七六一一八九〇	一九三三	六三二二五
一八九一一一九〇〇	八二一七	七八九七
一九〇一一一九〇九	九八二七	六五一六
又純益ノ平均歩率ヲ以テスルトキハ		
一八七六一一八九〇	一九五〇	七〇〇〇
一八九一一一九〇〇	四六・八〇	五二・五六

一九〇一—一九〇九

六〇・一三

三〇・八七

以テ中央銀行利益金問題ノ忽ニスヘカラサルヲ知ルニ足ラン。

### 第六節 結論

之ヲ要スルニ交通税ハ個人性ノ發展ト、分業及資本的社會組織ノ發達トニ由リテ漸ク増展スヘシ世ノ平和安穩ナルヤ、所謂自然増收ヲ見サルコトナカラン、然ルニ不景氣恐慌又ハ戰亂等ニ際會スルヤ、其收入ノ減少スルコト殊ニ著シク消費税ニ比シテ更ニ一層甚シキアリ、現ニ獨佛戰爭ニ際シ佛國ノ交通税ノ成績ハ之ヲ證シテ餘リアリ。

我國ノ現行交通税ハ相續税、通行税、兌換銀行券發行税、取引所税、印紙税、登録税、骨牌印紙税、賣藥印紙税等ニシテ、其收入狀態ハ左ノ如シ。

税目 (大正四年度)	金額
相續税	二二九九一八六圓
通行税	四、七八九三二六圓

税目	金額
兌換銀行券發行税	一一〇七三三二圓
取引所税	二九八九九〇七圓
登録税	一六六四三六〇六圓
賣藥印紙税	二二三七七九九圓
印紙税	三九四五三二二圓
骨牌印紙税	一〇七九八八圓

予輩ハ比較ニ便センカ爲左ニ更ニ歐洲主要諸國ノ交通税ノ概要ヲ述ヘン。

國名	年度	税目	金額(各國固有貨幣)
獨帝國	千九百十三年度	カルタ印紙税	一九〇〇〇〇〇マク
		手形印紙税	一九一二二五〇〇マク
		帝國印紙税	二二六七二二〇〇〇マク
		相續税	四七〇〇〇〇〇マク
		増差税	五〇〇〇〇〇〇マク
		相續税	三四〇〇〇〇〇フラン
佛國	千九百十三年度	登録税	七七八三九九六六七フラン
		印紙税	二四四〇六〇五〇一フラン
		交通税	四三七
		結論	四三七

英國 千九百十三年度決算	取引所稅	一七四六四五〇フラン
英國 千九百十三年度	印紙稅	三五九二二八二五磅
伊國 千九百十三年度	相續稅	四八五〇〇〇〇リラ
	登錄稅	九六五〇〇〇〇リラ
	印紙稅	八五五〇〇〇〇リラ
	登錄稅及印紙稅附加稅	二八三〇〇〇〇リラ
	鐵道收入稅	四〇三五〇〇〇リラ
	不動產賣入稅	一一三〇〇〇〇リラ
奧國 千九百十三年度	印紙稅	六二七二〇〇〇グロネン
	法律行為稅	一六二〇九二五〇グロネン
	通行稅	二六〇〇〇三〇〇グロネン
露國 千九百十二年度決算	印紙稅	一〇七四五一五六〇留
	財產移轉稅	四四七四〇〇〇留
	鐵道料金稅	二九九〇〇〇〇留

## 第二十四章 消費稅

### 第一節 消費稅ノ由來

消費稅ハ交通稅ト共ニ所謂從率稅ヲ構成スルノミナラス又等シク間接稅ト看做サルル多クノ租稅ヲ含蓄ス、然レトモ其性質上相異ナル所アルハ言フヲ俟タス。其初ニ方リテヤ、消費稅ハ殆ト内國消費稅ニ限ラレタリ、惟フニ消費ナル文字ハ經濟現象ノ一大部分ヲ含蓄スト、雖モ、英獨語ノ所謂内國消費稅ハ是レニ反シテ元ト分割若クハ割讓ノ意ヲ有セリ、其意蓋シ人民ノ消費スル物品ノ一部ヲ割キテ以テ君主ノ供御ニ供フルニ在リテ我國ニ於ケル往時ノ物成ト其基因ヲ同フスヘシ。然レトモ現今ノ消費稅ハ當ニ内國ニ於テ生産セラシル消費物ニ止マラス、外國ヨリ輸入スル消費及使用品ヲモ稅スルヲ以テ其目的トス。

消費稅ニハ直接間接ノ二種アリ、例ハ、間接消費稅ハ酒稅、砂糖稅、烟草稅等

消費稅 消費ノ由來

ニシテ直接消費税ハ之ニ反シ獵犬税、自用馬車人力車税、自轉車税、自動車税、びりやーど税、玉突臺税、其他貴金屬ヲ以テ製作サレタル器具ニ課スル租税等トス、尤モ所有者ノ自家用ニ限ラレタル場合ニ限ル。

消費税ハ國民ノ消費スル貨物ヲ以テ課税ノ目的トス、方今各國ノ財政々策ヲ通觀スルニ大要酒煙草砂糖ノ三主要消費品ヲ以テ三大財源トナシ、間々之ニ加フルニ茶珈琲等ノ飲料ヲ以テスルコトアリ、而シテ以上三種ノ物品ハ漸ク生活ノ必需品タラントスル傾向アリ、其消費高ハ日ニ月ニ増加スルハ現今經濟進歩ノ大勢ナリ、就中酒税殊ニ燒酎税ノ收入増加スルコト他ノ消費税ノ比ニアラサルハ注意ニ値スル所ナリ、而シテナカラ我國ノ如キ設令最早同一ノ趨勢ノ認めヘキ兆候ナキニシモアラスト雖モ、トテモ英佛獨露ノ諸國ニ比スヘクモアラス、國小ナルニアラス、人民多カラサルニアラス、唯國民生活ノ程度低キカ故ナリ。

今消費税ヲ大別シテ三種トス、而シテ其分類ノ標準ハ徵收方法及賦課徵收

ノ機會、場所等トス。

### 第二節 生産税

第一生産税 消費税ノ重ナルモノハ殆ト此中ニ含マル。ろーれんつふおん、したいんハ其著財政學ノ第五版ニ於テ「生産及工業税ナル名稱ヲ下セリ予輩カ之ヲ「生産税」ト言フ所以ハ他ナシ、生産中若クハ生産行為ノ完了スルト同時ニ之ヲ賦課スルヲ以テナリ。

元來消費税中ニ生産税アルハ一見矛盾セル如キモ消費セラルル物ハ元ト生産セラルル物ナレハ、其課税ノ前後遲速ヲ標準トシテ斯カル名稱ヲ下セルノミ、而シテ生産税ハ二種ニ分タル。  
第一種、生産物税、即チ生産サレタル貨物ヲ以テ租税ノ客體ニ充ツル租税ニシテ、消費税中最モ公平ナルモノト言フヲ得ヘシ、然レトモ一國ニ於ケル生産ノ組織又ハ關係ノ如何ニ由リテ其施行上難易ノ別アルヲ免レス、例ヘハ富及

資本ノ集積ノ結果大工業又ハ大生産行ハレ、從テ其之ヲ課スヘキ場合及場所  
 ノ多カラサルニ當リテヤ、所謂生産物稅ヲ行フコト容易ナリ。收稅官吏ハ奔走  
 ノ勞少ナクシテ監察ノ實績ヲ擧クルコトヲ得ヘシ。是レニ反シ本邦ノ如ク近  
 來ニ至ル迄小資本家多クシテ、小規模ノ生産ノミ行ハルルニ當リテヤ、之ヲ行  
 フコト甚タ難シ。何トナレハ收稅官吏ハ徵稅上、一々此等ノ小資本家ヲ歴訪調  
 査シ以テ監督モシ、課稅モセサルヘカラサルヲ以テ終ニハ奔命ニ疲レンノミ。  
 第二種原料及器械稅、是レヲ以テ其弊ヲ避ケンカ爲ニ通常生産物或ハ消費  
 物其物ニ據ラス、却ツテ生産ノ原料手段又ハ生産ニ缺クヘカラサル條件ニ準  
 據スルコトアリ、例ヘハ烟草稅ヲ徵收スルニ當リ、精製品タル葉卷又ハ紙卷煙  
 草ヲ以テ課稅ノ目的物ニ充テスシテ、其耕作、反別若クハ葉煙草ニ據ルカ如ク  
 或ハ酒稅若クハ燒酎稅ヲ徵收スルニ釀造高及蒸餾高若クハ酒ノ量又ハ品質  
 ノ良否ニ據ラスシテ生産上ノ出來事例ヘハ酒類ノ釀造桶、蒸餾器械又ハ其運  
 轉時間、酒母、麴ノ量等ニ據ルカ如シ。此種ノ租稅ハ其賦課徵收ノ簡易ナルカ爲

ニ今尙之ニ依ル場合尠ナカラス、然レトモ其客體トシテ直接ニ生産物ノ重量  
 又ハ品質ヲ採ラス、間接ニ之ヲ推定スルヲ以テ固ヨリ公平ヲ期シ難シ。特ニ此  
 種ノ消費稅ニ就キテ租稅行政上ノ一大缺點ト認ムヘキハ、課稅物品ヲ輸出ス  
 ルニ當リ曾テ原料品等ニ課シタル租稅ノ戻稅ヲ交付スルノ困難ナルニ在リ。  
 抑戻稅トハ一度徵收シタル租稅ヲ再ヒ戻スノ意ニシテ、財政上且ハ外國貿易  
 ノ保護獎勵上現今ノ一大問題タリ。其由テ來ル所ハ古クシテ、既ニ中世ノ末葉  
 以後國際貿易上ノ競走甚タシキニ方リテヤ、各國政府ハ海外貿易ノ發展政策  
 トシテ曾テ内國ノ生産品ニ課シタル租稅ヲ其輸出ニ際シテ拂戻スノ方法ヲ  
 採レリ。蓋シ斯ノ如クスルトキハ輸出業者ハツレタケ安ク外國ニ於テ販賣ス  
 ルコトヲ得ルカ故ニ自ラ外國貿易ヲ獎勵スルノ結果ヲ生ス。現今殆ト總テノ  
 邦國之ヲ行ヒ、殊ニ獨逸ノ如キ佛蘭士ノ如キ其重ナルモノナリ。英國ハ從來自  
 由貿易主義ヲ採用スルニ拘ラス、時トシテハ亦之ヲ行フコトアリ。然ルニ戻稅  
 ハ之ヲ公平ニ割戻スコト頗ル困難ナリ、例ヘハ砂糖稅ハ之ヲ課スルニ其原料

品ニ依ル場合多シ然ルニ生産ノ技術原料品ノ品質等ニ因リ縦令原料品ノ重量ハ同シトスルモ生産ノ結果タル精製品ノ量ニ至リテハ常ニ一樣ナルヲ得ス而シテ戻税ハ粗製品ノ精製品トナリシ後之ニ對シテ後割戻スモノナルカ故ニ其原料品カ果シテ幾許ナリシカ之ヲ知ルヘキ適當ノ標準ヲ見出スコト難シ是レヲ以テ機械工業ノ盛ナル今日ニ於テハ常ニ技術ノ完全ナル大製造業者カ割合ニ利益ヲ受クルコトトナルヘシ戻税ヲ交付スルノ困難ナル所以ノ理茲ニ於テカ明カナリ。

### 第三節 運送税

第二、運送税 此種ニ屬スル消費税ハ其之ヲ賦課スルニ方リ、生産税ノ如ク直接生産ノ事實ニ據ラスシテ、其生産ノ完了シタル後生産品カ生産サレタル場所ヲ去リテ將ニ消費ノ途ニ就カントスルニ方リ賦課徴收セラルルモノナリ運送税ノ重ナル種類ハ倉出税及倉入税トス例ハ獨逸聯邦ノ一タル瓦堡王

國ノ葡萄酒税ノ如キハ其醸造所ヲ去テ他ニ發送セラレントスル場合ニ徴收サルルニ反シ、麥酒税ノ如キハ一度發送セラレテ購買者又ハ消費者ノ手中ニ入ルニ際シテ徴收セラルルカ如シ是レニ由テ觀ルトキハ生産税ト云ヒ運送税ト云フモ等シク貨物ノ生産中又ハ生産サレタル後其消費サルヘキ物ニ課スル租税ニシテ、唯課税ノ前後遲速アルカ爲ニ以上ノ如キ區別及名稱ヲ分ツニ過キサルナリ、然レトモ收税ノ技術上ヨリ觀察スルトキハ其異ナルハ言フヲ俟タス、又其納税者ニ及ホス影響モ決シテ一樣ナラサルナリ、嘗テ東京市カ市區改正ノ一財源ニ充ツル爲東京市ニ輸入サレシ酒類ニ對シテ輸入酒税ヲ課シタルカ如キハ其一例ナリ、但輸入酒税ハ今尙佛國伊太利等ニ行ハルル入市税ノ一例ニ外ナラスシテ、生産品カ其生産セラレタル場所ヲ去ルニ方リ賦課セラレス、將ニ消費セラルヘキ場所ニ達スルニ際シテ徴收セラルルナリ、關稅ノ如キ亦運送税ノ一種ニ屬ス。

### 第四節 營業稅

第三、營業稅(此レハ前述セル營業稅其モノニアラス、消費稅トシテノ營業稅ナリ)一般營業稅ヲ行フ國ニ於テハ特ニ此種ノ租稅ヲ設クル必要ナキモノノ如シ。然レトモ、其是レナキ國ニ於テハ、特種ノ消費物ヲ稅スル爲ニ、其販賣者又ハ營業者ニ對シテ之ヲ賦課スルハ更ニ不都合ナキノミナラス、却ツテ必要ナリ。何トナレハ消費物品中衛生ニ害アルカ國民道德ヲ紊スカ如キ物ハ、其消費ヲ監督制限スル爲ニ、特ニ之ヲ稅スル必要アレハナリ。加之阿片、酒、煙草ノ如キ消費物品ニ對シテハ、縱令一般營業稅ノ存スルニ拘ハラズ、其販賣者ニ對シテハ特別ノ營業稅ヲ課スルモ不可ナルコトナシ

### 第五節 關稅論

#### 第一目 關稅ノ山來

抑關稅ハ中世封建ノ世ニ元ト所在ノ王公侯伯カ歲入ヲ得ルト同時ニ、內國ノ商工業ヲ保護スル目的ヲ以テ賦課徵收セルモノナリ。即チ貨物ノ運送中ノカ一定ノ場所ヲ經過スルニ當リテ徵收セララルル租稅ナリ。例ヘハ道路、橋梁、城門、港灣及國境等ノ如シ。

關稅ハ一ニ之ヲ海關稅ト唱ヘ、其國境ヲ越ヘテ輸出又ハ通過スル粗製品、半粗製品及精品ニ課スル租稅ナリ。往時ハ輸出稅及通過稅ヲ行ヒシ例少カラサリキ。例ヘハ明治維新ノ際ニ於ケル米穀ノ如シ。現今ト雖モ尙之ヲ行フ例ナキニシモアラズ。一ハ戰爭ノ際ニ於ケル英國ノ石炭輸出稅又ぶらじル共和國ノ珈琲輸出稅ノ如キハ平時ト雖モ猶之ヲ課シ同國政府ノ財政ハ主トシテ珈琲輸出稅ノ收入ヲ以テ支フル程ナリト雖モ固ト是レ特別ノ事情アル場合又ハ國柄ニ限リ今ヤ普通ノ場合ニ於テハ輸出稅通過稅兩ナカラ廢止セラレテ獨リ輸入稅ヲ存スル而已。經濟ノ進步發展ノ速カナル場合ニ於テハ、當ニ財政上一大好財源タルノミナラス、政治經濟上ノ一大問題タリ。殊ニ現今ノ如ク世



界各國間ノ經濟的競走ノ劇甚ヲ極ムルニ當リテヤ、之カ爲注意ヲ要スルコト決シテ昔日ノ比ニアラス。嘗テ千八百四十六、七年ノ頃英吉利カ銳意自由貿易主義ヲ採ルヤ、關稅トシテハ唯內國ニ於テ生産スルコト能ハサル輸入物品殊ニ殖民地物品ヲ稅スルヲ主トセリ。然ルニ近時英國スラ尙關稅政策ヲ改ムル機運ニ向ハントスルニ似タリ蓋シ嘗テ英國ハ殆ト世界ニ於ケル工業並ニ商業ノ先覺者トシテ、他國中殆ト之ト競走スルモノナク縱令競走セントスルモノアルモ兎テモ企テ及フコト能ハサリキ。近頃ニ及亞米利加ト云ヒ獨逸ト云ヒ將タ佛蘭士ト云ヒ漸次追隨角逐シテ、英國ト難モ亦昔ノ狀態及境遇ニ安ンスルコト能ハス、其競爭ニ對シテハ自ラ自衛ノ方策ヲ講セサルヘカラサルニ至レリ。是レソ其政策ヲ變更スル必要ヲ生シ來レル所以ナル。

## 第二目 關稅政策

然ラハ關稅政策トシテ古來各國ノ採リ來レル政策ハ如何ト云フニ、大要二種ト爲スコトヲ得ヘシ。其一ハ財政關稅政策ト名クヘク、其文字ノ著ハス如ク、

財政ノ點ニ重キヲ置キ、國庫ノ收入ヲ得ルヲ以テ主要目的トナス。サレハ其課稅スヘキ物品モ生活ノ必需品タルト否ラサルトヲ問ハス唯收入ノ多カラシコトヲ期スルモノナリ。若シ收入ノ多キヲ欲セハ國民ノ最モ多ク消費スル物品ヲ捕捉セサルヘカラス。然ルトキハ稅率低キモ尙多大ノ收入ヲ得ヘシ。是レニ反シテ他ノ一ハ保護關稅政策ト名ク、抑保護關稅政策トハ主トシテ內國ノ商工業ヲ保護助長スルノ意ニ出テタルモノニシテ、云ハハ從來英國政府ノ採リ來リタル關稅政策ハ財政關稅政策ナリ。彼ノ珈琲、茶、煙草、葡萄酒ノ如キハ英國內ニ於テ生産セラレス、而モ國民ノ大多數ハ之ヲ需用スルカ故ニ、此等ノ輸入物品換言スレハ殖民地品ヲ擇ンテ課稅セルナリ。從テ其收入モ自ラ多シ。保護關稅政策ハ從來亞米利加、佛蘭士、獨逸等ノ採用シ來リタル政策ニシテ而モ其保護ノ程度ニ依リテ更ニ分別セラルル所アリ。露士亞ノ如ク自國ノ産業及其發達ニ妨害ト爲ル貨物ノ輸入ニ對シテハ非常ナル重稅ヲ課スルトキハ、之ヲ稱シテ禁止關稅ト云フ。是レニ反シテ獨逸ノ如キハ互惠ノ主義ヲ採リ、

自國ノ製品ニ好意的ノ取扱ヲ爲ス國ニ對シテハ亦之ニ應スル關稅ヲ課スルモ、若シ不利ナル取扱ヲ爲ス邦國ニ對シテハ亦之ニ相當スル關稅ヲ課ス。念フニ此主義タル將來治ネク行ハルヘキモノニシテ、之ヲ名ケテ報復關稅又ハ報復關稅主義ト謂フ、現今本邦ニ於テモ亦互惠主義ノ報復關稅ヲ行ハントス、新通商條約ハ此主義ニ據レリ、尤モ何レノ國ニ於テモ自由勝手ニ又無制限ニ關稅率ヲ増減スルコトヲ得ルト云フニ非ス、當ニ通商上ノ利害ノミナラス國交上ノ關係ニ由リテ左右セララルルハ云フヲ俟タス。我國ノ關稅率ニハ協定稅率ト國定稅率トノ二種アリ、國定稅率トハ帝國政府ノ意思ヲ以テ隨意ニ定メタル稅率ヲ云ヒ、是レニ反シテ、協定稅率トハ通商條約ニ依テ各國政府ト協定シタル稅率ヲ謂フ、故ニ其稅率ハ、條約ニ依テ制限セララル。而シテ其重ナル輸入品ノ多クハ、協定稅率ヲ課セリ、蓋シ各國政府ハ自國ノ生産物ヲ保護スル爲ニ容易ニ重率ヲ課スルコトヲ容ササルヲ以テナリ、世上或ハ協定稅率ヲ廢シテ、國定稅率ノミヲ採ルヘシトノ論者アリ、然レトモ、是レ畢竟正論ニアラス、現ニ世界ノ

強大國タル獨逸ニ於テモ、協定稅率ヲ採用セル例尠カラス、或ハ國際ノ交リハ王道ヲ標榜シテ霸道ヲ行フモノナリト云フモノアレトモ、而モ自己ノ意思ノミヲ重ンシテ他ヲ顧慮セサルカ如キハ不可ナリ、故ニタトヒ國定稅率ヲ採ルトスルモ、尙國交ヲ疎ニスルコト能ハス。一方ニ國定稅率ヲ採ルモ、亦自ラ協定稅率ヲ捨ツヘカラス、是レヲ以テ我國ニ於テモ、要ハ唯通商條約ノ期限盡クルニ方リ、自國ノ利害ヲ基トシテ之ヲ改正スルノ實力有リヤ否ヤノ問題ニ歸着スルモノナリ。

## 第六節 現行消費稅

本邦ノ消費稅ハ大抵皆明治維新以後ノ創起ニ關ハリ、而モ西南日清日露三大役ノ跡始末ニ伴フモノ多シ、其實施ノ時日比較的ニ新シキヲ以テ或ハ歐洲諸國ニ於ケルカ如ク人心ニ浸潤スルコト深カラス、從テ重カラサルヲ例トスト雖モ、其二三十年ノ間ノ歴史トシテハ寧ロ長足ノ進歩即チ増加ト云ハサル

ヲ得ス。近時生産業ノ進歩遅々タルノミナラス、物價ノ騰貴著シキハ豈課税ノ影響ナシト云フヲ得ンヤ。是レヲ以テ他日税制ノ改革ヲ企ツル者アラシニハ宜シク物價ノ成形及國民ノ消費ノ關係上ニ及ホス關係ヲモ考察スヘキナリ。我國ノ消費税制度ハ先ツ酒税ヲ主トシ醬油税、砂糖消費税、織物消費税、石油消費税、關稅、噸税等ヨリ成リ、賣藥營業税ノ如キ又之ニ屬スヘシ。然リ而シテ名ハ消費税ニアラス純乎タル政府企業ノ益金ナリト雖モ、其實消費税ト殆ト異ルナキハ專賣ノ收入ナリ。

## 第二十五章 政府專賣事業

### 第一節 政府專賣ノ根柢

現今煙草、鹽、樟腦ノ三專賣アリ、明治四十四年度ノ益金ハ六千三百三十四萬六千四百二圓ニシテ、就中煙草及鹽ハ戰時財政ノ計畫ノ結果ニシテ、兩ナカラ純ラ財政上ノ目的ヲ以テ設置經營セラル。

他邦亦類例ナキニアラス、佛國ノ煙草、<sup>マツチ</sup>燐寸、火藥ノ如キ、露國ノ火酒販賣ノ如キ、埃國ノ鹽及煙草、土耳其ノ煙草、鹽及火藥等其著シキモノナリ。

政府專賣業ノ起因發達ヲ考フニ大抵其源ヲ消費税ニ發ス、本邦ノ煙草、露國ノ火酒、專賣ノ如キ亦然リ。然ラハ何故ニ消費税ヲ變シテ專賣ニ移スヤ、其理由ハ一ニシテ足ラスト雖モ大要左ノ如シ。

一、財政上ノ理由、即チ主トシテ歳入ノ増加ヲ謀ランカ爲ナリ。

二、收税上ノ理由、消費税ハ其税率ノ加重スルニ從ヒ漸ク脱税ヲ謀ル者多

ク當局者ハ其煩ニ堪ヘサルノミナラス、不公平ニ陥ル弊ヲ生ス。凡ソ消費稅率ニシテ左迄重カラサランカ、課稅物品ノ價格及品質ヲ問ハス、千品一率ナルモ不可ナカラシ、然ルニ漸ク稅率ノ加重スルニ從ヒ品質ノ精粗價格ノ高低ニ應シ、負擔ノ輕重ヲ別ツ必要ヲ生スヘシ、此時ニ當リ政府ニシテ自ラ課稅品ヲ製造シ自ラ其價格ヲ定メテ以テ之ヲ販賣センカ、國民ノ消費狀態ヲ察シ、購買力ヲ考ヘ以テ思ノ儘ニ公平ヲ期スルコトヲ得ン。

三、政治上ノ理由、露國ノ如キ其火酒專賣ヲ營ムハ亦政治上ノ理由ナクンハアラス、全國ニ亘リテ殆ト國民ノ必要消費品タル火酒ヲ販賣スルハ警察權ヲ助長スルニ足り、云ハハ政府權力ノ擴張ニ資スルコトヲ得ヘシ。昨年以來殊ニグいつてノ反對アリ、歐洲大戰爭開始スルヤ露國皇帝一大英斷ヲ下シテ一舉ニ燒酎ノ專賣ヲ停止セリ之カ爲雷ニ勞働者ノ效程ヲ増進セシノミナラス國民ノ貯蓄ヲ増加セシコト尠ナラスト云フ。

四、生産上ノ理由、火酒ノ如キ其品質ヲ改良シ、國民ニ供スルニ健全ナル飲料ヲ以テスルノ必要アリ、本邦ノ鹽專賣ノ如キ亦鹽ノ品質改良ニ貢獻セシ所アルカ如シ。

五、道德及衛生上ノ理由、前項ノ理由ニ依リ或ハ課稅物品ノ品質ノ改良ヲ促シ、以テ國民ノ衛生狀態ヲ向進セシメ或ハ其消費又ハ需要ヲ指導制限スルヲ要スルコトアルヘシ、火酒ノ如キ其一例ナリ。

## 第二節 煙草專賣

### 第一目 煙草專賣ノ變遷

日清戰役後政府ハ歲入ヲ増加スル必要ニ迫ラレ明治三十一年一月葉煙草專賣制度ヲ創始シ葉煙草專賣法ヲ施行セリ、次テ三十七年七月煙草製造專賣ヲ實施シ卷煙草製造ヲ開始セリ、三十八年四月刻煙草ノ製造ヲ開始シ、降テ四十年十二月二十八日煙草ノ值上ヲ實施シ四十一年度ヨリ鹽、樟腦ノ專賣ヲ併合セリ、之ヲ煙草專賣制度ノ歴史ノ大要トス。

葉煙草專賣創始以來今日ニ至ル迄煙草專賣事業發展ノ大勢ハ左表ニ依リテ其梗概ヲ窺フコトヲ得ヘシ。

煙草專賣純益累年比較表

年度別	純 豫 算	決 算
三十年度	八五九・六九八	二九二・二四一
三十一年度	七三三・四九七	五・一四四・九九九
三十二年度	九四六・九四七	七・五二九・五三三
三十三年度	八・九二六・三〇九	七・二四四・一五九
三十四年度	九・六一〇・〇一一	一〇・八六六・六九九
三十五年度	一一・七二八・五二六	一一・三六七・五六九
三十六年度	一一・七二八・五二六	一四・八九八・二九一
三十七年度	二〇・一九四・八一	二七・四六二・〇〇七
三十八年度	三二・〇一一・〇七二	三三・六〇二・〇五七
三十九年度	三〇・二八九・〇八九	三二・五七四・四八三
四十年度	三〇・六九九・九六五	三五・六〇七・九〇二
四十一年度	四一・二二六・〇〇二	四九・三〇四・五六三

四十二年度

大正二年度(豫算)

大正三年度(豫算)

大正四年度(豫算)

四二・六〇〇・七八六

五三・七二八・四六八

五五・五六五・九八〇

五八・八八九・五四九

四七・二六七・五七一

前表ニ示スカ如ク葉煙草專賣法施行後純益ノ決算年々其豫算ニ及ハサリシモ三十四年度以降決算ハ常ニ豫算ニ超過スルノミナラス四十二年度ノ實績ヲ以テ之ヲ葉煙草專賣實施ノ初年タル三十一年度ニ比スレハ十倍弱之ヲ製造專賣全部ノ開始年度タル三十八年度ニ比スルモ實ニ一倍半弱ニ當ルノ增收ヲ示セリ是レ固ヨリ怪ムニ足ラスシテ元來專買ト云ヘハ葉煙草ニシテ止ムヘカラス兼テ製造迄ニ及ハサルヘカラサルハ既ニ諸國ノ實驗ニ徴シテ明カナリ凡ソ煙草ノ如ク其消費カ國民生活ノ根柢ニ浸潤セシ嗜好品ニ在リテハ其消費高及消費ノ種類ハ經濟界ノ變遷如何ニ拘ハラズ甚シキ影響ヲ受クルコトナク國民生活ノ程度ノ向上ニ伴フテ増加スル趨向ヲ有スルモノナリ。四十年以來一般ノ經濟界ハ戰後狂奔ノ反動ヲ受ケテ著シク萎靡不振ノ

狀況ヲ呈シ、近年ニ至リテ特ニ著シキモノアリ、恰モ普佛戰爭後ノ獨逸ニ宛モ似タリ、然ルニモ拘ラス一度煙草等級別ノ消費量ヲ見ルトキハ國民ノ嗜好ノ上進ハ世間一般ノ不景氣ニ拘ラス駭々トシテ其底止スル處ヲ知ラサルノミナラス、近來中等社會ノ一部カ次第ニ其生計ヲ高ムル風潮歷々トシテ掩フヘカラス、四十年以降口付煙草中ノ上級品タル敷島以上ノ賣渡數量ノ口付煙草全體ニ對スル百分比例ヲ見ルニ四十年ハ百分ノ三十七、四十一年ハ百分ノ六十七ニシテ四十二年ハ實ニ百分ノ七十九ニ達シ大和朝日カメリヤ等ノ中級以下ノ賣渡數量ハ其反對ニ四十年ノ六十三ヨリ四十一年ノ三十三、四十二年ノ二十一ニ急轉直下遞減セルヲ見ルヘシ兩切煙草ノ消費關係ハ大ナル變動ナク上級品タル「オリエント」以上ハ四十年ニアリテハ百分ノ六、四十一年ハ百分ノ四、四十二年ハ百分ノ六ニシテ別ニ形勢ノ變化ヲ認ムヘカラス、刻煙草ニアリテハ上級品タル白梅以上ノ賣行數量ハ四十年ノ百分ノ四、四十一年ノ同シク百分ノ四ヨリ四十二年ノ百分ノ五トナレリ、今口付兩切兩種ヲ通シテ卷

煙草全體ニシテ上級品賣行ノ歩合ヲ見ルニ四十年ハ卷煙草賣行總數ノ百分ノ三十、四十一年ハ百分ノ五十六、四十二年ハ更ニ百分ノ六十四トナレリ、更ニ製造煙草全體即チ卷煙草刻煙草ヲ通シテ上級品賣行ノ歩合ヲ求ムルトキハ四十年ハ百分ノ七、四十一年ハ百分ノ八、四十二年ハ一躍シテ百分ノ十トナリ卷煙草「スター」若クハ敷島以上刻煙草白梅以上ノ賣渡數量實ニ總額ノ一割ニ當レリ、更ニ最上級煙草タル輸入煙草ノ賣行狀勢ヲ見ルニ紙卷煙草主ニ埃及煙草ハ四十年ニ八百萬本ナリシモノ四十二年ニ九百萬本、四十二年ハ一千萬本トナリ葉卷ハ四十年ニ百二十五萬本ナリシモノ四十二年ニ百四十八萬本、四十二年ニ百五十七萬本トナリ年々遞増ノ趨勢ヲ呈セリ國民嗜好ノ向上豈驚カサルヲ得ンヤ。

## 第二目 煙草消費ノ趨勢

煙草販賣ノ統計ハ斯ノ如ク一方ニ於テ上等品需用ノ増加ヲ證明スルト同時ニ一方ニ於テ劣等品ノ需用ヲ減少セルコトヲ表示セリ、煙草ヲ上中下ノ三

級ニ分チ、中等煙草ノ賣行ヲ求ムルニ四十年ハ百分ノ三十一ナリシモノ四十一年ハ百分ノ二十四ニ減シ、四十二年ニハ更ニ減シテ百分ノ二十二トナレリ、之ニ反シテ下級品ニアリテハ四十年ニ百分ノ六十四ナリシモノ四十一年四十二年共ニ百分ノ六十八トナレリ。若シ煙草消費ノ状態カ國民消費ノ全態ヲ代表スルモノトセハ國民ノ中等社會ノ一部分ハ向上シテ上等社會ヲ模倣シ一部分ハ沈淪シテ下等社會ノ伍伴ニ列スルニ至リタルモノニシテ國民元氣ノ中心タル中等社會ハ漸ヲ以テ其數ヲ減スルモノト觀察スルヲ得ヘシ。

近時ニ於ケル經濟界ノ大勢ヲ論スルモノノ言ヲ聞クニ四十二年ハ四十一年ヨリ不景氣ニ、四十三年ハ更ニ四十二年ヨリモ不景氣ナルモノノ如シト雖モ煙草販賣ノ實況ヲ見ルニ昨年ノ實績ハ一昨年ニ比シテ寧口順當ノ増加ヲ示セルモノノ如シ。即チ四十二年一月ヨリ十一月迄ノ販賣實績ヲ以テ前年一月ヨリ十一月迄ノ實績ニ比較スルニ口付煙草ニ在テハ四十二年ノ賣渡代金千五百十萬六千圓ニ對シテ四十三年ハ千五百一萬九千圓トナリテ八萬七千

餘圓ヲ減シ(此減歩合千分ノ六)兩切煙草ニ在テハ四十二年ノ二百八十一萬千圓ニ對シテ四十三年ハ三百七十三萬圓トナリテ九十一萬九千圓ヲ増シ(此増歩合三割二分七厘)刻煙草ニ在テハ四十二年ノ四千五百四十七萬圓ニ對シテ四十三年ハ四千五百五十三萬三千圓トナリテ六萬三千餘圓ヲ増シ(此増歩合千分ノ一強)内地製葉卷ニ在リテハ四十二年ノ一萬五千圓ニ對シテ四十三年ハ三萬九千圓トナリテ二萬四千餘圓ヲ増シ(此増歩合十六割二分五厘)輸入煙草ニ在リテハ四十二年ノ三十八萬圓ニ對シテ四十三年ハ三十九萬八千圓トナリテ一萬七千餘圓ヲ増シ(此増歩合四分六厘)合計金額ニ於テ四十二年ノ六千三百七十八萬三千餘圓ニ對シテ四十三年ハ六千四百七十二萬千圓トナリテ九十三萬七千餘圓即チ一分五厘ノ増加ニ當レリ。是レ煙草ノ消費ハ殆ト習慣的必要品タルカ爲ニ然ルカ將タ四十三年ノ景氣ハ其實世人ノ唱道セルトコロニ異ナリ事實ニ於テ四十二年ニ對シテ既ニ回復ノ曙光ノ認ムヘキモノアルヲ證スルモノカ兎モ角モ四十三年ニ於ケル煙草販賣ノ狀況ハ確カニ四十

二年ニ比シテ堅實ナル進歩ヲ現ハセルモノナリ。

論者或ハ曰ク、一年間ニ百分ノ一半ト云フカ如キ僅少ナル増加ハ決シテ増加ヲ以テ目スヘキモノニアラス狀勢若シ斯ノ如クシテ止マラハ專賣益金ノ將來深ク頼ムニ足ラスト、蓋シ煙草ノ如キ其消費ノ習慣カ既ニ全國津々浦々ニ迄遍ネキ物品ニ在テハ將來ノ増加歩合ハ人口ノ増加歩合ト略步調ヲ一ニスルモノト觀測スルヲ至當トスヘシ、之ヲ歐洲ノ老專賣國ノ實例ニ觀ルニ其歲入年々ノ増加歩合ハ年ニ依テ多少ノ消長ナキニアラスト雖モ少ナキハ百分ノ一多キモ百分ノ三ヲ出テス、平均年々ノ増加率ハ凡ソ百分ノ一半ノ程度ニ在リ、是レ大體ニ於テ人口増加ノ率ト平行スルモノニアラスヤ、蓋シ歐洲ノ諸老專賣國ニ於テハ專賣制ヲ實施スルコト頗ル古ク其基礎既ニ定マレルノミナラス國民生活ノ程度竝ニ衛生思想ノ如キモ格別急激ナル變化ヲ見ルコトナキヲ以テ其消費ノ程度モ人口増加ノ程度ト略一致ヘキハ理ノ當然ナルカ如シ、然レテ我國ヲ見ルニ一方ニ於テハ今ヤ國民經濟ノ程度ハ急激ナル變遷

ヲ遂ケツツアルノミナラス、他方ニ在テハ學校教育普及ノ結果トシテ國民一般ノ衛生思想大ニ進歩シツツアルヲ以テ事情頗ル歐洲ノ諸老專賣國ト同シカラス衛生思想ノ普及ハ國民ヲシテ消費ノ總量ヲ減シテ比較的上級品ノ消費ヲ促進セシムルノ結果ヲ惹起スヘク生活程度ノ上進ハ更ニ益々上級品ノ消費ヲ大ナラシム、是レヲ以テ我專賣事業將來ノ趨勢ヲ測ルニ人口増加率ノ頗ル大ナルモノアルニ拘ラス當分ノ内煙草消費ノ總量ハ必スシモ人口増加ノ割合ニ増加セサルヘク、而モ上級煙草消費ノ割合ハ益々増加スヘク、結局ニ於テ專賣益金ハ差引相當ノ割合ヲ以テ遞次増進スヘキヲ疑ハス、帝國愈々老成シテ國民生活ノ程度及衛生思想共ニ其基礎固定シテ格別ノ變化ヲ見サルコト歐洲先進國ノ如クナルノ日ハ專賣收入増加ノ歩合ト人口増加ト略正比例ヲ爲スニ至ルヘシ、要スルニ我カ煙草專賣收入ノ將來ニ付テハ之ニ非常急激ナル増加ヲ望ムハ誤マレリ穩健着實ナル増加ヲ見ルヲ以テ満足スヘキノミ、其歩合ハ年ニ依テ一進一退アルヲ免カレサルモ凡ソ百分ノ一乃至百分ノ



三ノ間ニアランカ。若シ夫レ前掲累年比較表ノ數字ノ如キハ創業日尙淺ク或ハ持越民製品ノ消長ニ依リ或ハ値上ノ實施其他特殊ノ事情ノ爲ニ自然ノ發達ノ秩序ヲ破リタルノ結果ニシテ、將來ノ規矩準繩トナスヘカラサルナリ。以上ノ理由ハ以テ政府專賣ノ根據トスルニ足ルト雖モ、而モ尙一事ノ看過スヘカラサルアリ、他ナシ、其事業ノ性質專賣業トシテ適當ナルコト即チ是レナリ。彼ノ煙草專賣ノ如キ其一適例ニシテ、嘗テ小資本ヲ擁シテ以テ製造販賣セル煙草製造業者ハ煙草稅又ハ葉煙草ノ價格ノ高マルニ從ヒ次第ニ滅却シテ明治三十六七年ノ交僅ニ數四ノ煙草製造業者ヲ餘ス耳ナリキ、サレハ政府ノ專賣ハナクトモ事實ハ專賣業ト化シツツアリシナリ。但鹽專賣ノ如キハ未タ如上ノ事實ナカリキ。

### 第三節 鹽專賣ノ狀況

#### 第一目 鹽專賣ノ歴史

内地ニ於ケル鹽專賣ハ日露戰爭當時戰時財政ノ第二期計劃ヲ爲スニ當リ政府ニ於テ財源ノ一端トシテ此制度ヲ立案シ、議會ノ協賛ヲ經テ明治三十八年六月ヨリ施行スルニ至リシモノナリ。然リト雖モ本制度ノ成立施行ヲ見ルニ至リタルハ其因由スル所決シテ一朝一夕ニ非ス。實ニ種々曲折ヲ經タル結果ナリトス。而シテ本制度施行後ニ於テモ鹽價ノ制限、販賣制度ノ統一等數次ノ改正ヲ經テ今日ニ及ヘリ、今其梗概ヲ記述スレハ左ノ如シ。

イ 日清戰爭後燃料勞銀ノ騰貴著シク隨テ鹽生產費昂上シ鹽價ノ騰貴ヲ來セリ。

ロ 然ルニ内地鹽ニ比シ品質良好ナル外國鹽ハ比較的低廉ナル價格ヲ以テ頻リニ輸入セラレ、漸次内地鹽業ヲ壓迫シ之ヲシテ非常ナル悲境ニ陥ラシムヘキ傾向ヲ呈スルニ至レリ。

ハ 斯ル形勢ナリシヲ以テ内地重要産業ノ一タル鹽業ヲ救濟シ維持發達セシムルハ、國家經濟上必要ナルノミナラス鹽需給ノ獨立ヲ圖ルハ國ノ

生存上又緊要ノコトナリトシ、鹽業關係者又ハ帝國議會等ヨリ之カ救濟

ニ關シ政府ニ陳情若クハ建議ヲ爲スモノ頻出セリ。

ニ 政府ニ於テモ外鹽ニ對スル内鹽ノ現状ハ管ニ個人事業ノ問題ニ非スシテ國家經濟上ニ影響スヘキ重要ナル問題ナリトシ、之ニ對スル世論ノ歸趨ヲ明カニシ、以テ斯業發展ノ方針ヲ確立スルノ必要ヲ認メ、明治三十一年八月鹽業調查會規則ヲ制定シ會長、委員等ハ官吏又ハ學識アルモノ若クハ鹽業ニ從事シ經驗アル者ノ内ヨリ選定シ鹽業ニ關スル調査若クハ鹽業ニ關スル重要ノ事項ニ付諮詢シ又ハ意見ヲ開陳セシメタリ。

ホ 右調査會ニ於テモ内地鹽業ノ改善ヲ遂ケ、鹽業ノ獨立ヲ圖ルヲ必要トシ、政府ニ於テモ内地鹽業ノ保護ヲ是認シ、製鹽試驗場ヲ設ケ製鹽上ノ指導ヲ爲スヲ可ナリトシ、明治三十二年三月鹽業調查會規則ヲ廢止シ、同時ニ鹽業調査所官制ヲ發布シ同年四月一日ヨリ鹽業ニ關スル調査及試驗ニ從事セシメタリ。

然ルニ明治三十六年十月ニ至リ、行政整理決行ノ爲同官制ノ廢止セラ  
ルアリ、製鹽試驗ハ未タ充分ナル成果ヲ收ムルニ及ハスシテ中止セラ  
レタリ。

ヘ 又此間外國鹽ノ輸入防止ニ關シ輸入稅增課說起リシモ容易ニ其議ハ  
熟スルニ至ラス。斯クテ内地鹽業政策ニ付テハ世論漸ク昂リ、政府ニ於テ  
モ鹽ヲ專賣ト爲スハ内地鹽業ノ保護ニ於テ適切ナル一案ナリトシ專賣  
制度設置ニ關シ鹽消費稅案ト共ニ調査研究ノ歩ヲ進メツツアリタリ。  
ト 斯ル間ニ明治三十七年日露交戰ヲ見ルニ至リ政府ハ戰時費支辨ノ一  
財源トシテ非常特別稅ヲ起スニ當リ、鹽ニ對シテハ消費稅ヲ賦課スルノ  
案ヲ議會ニ提出セリ、本案ニ對シテハ鹽業者ハ自ラ其課稅ヲ負擔セサル  
ヘカラスシテ鹽業ハ一層ノ衰退ヲ來スヘシト爲シ、鹽商又之ヲ不可トシ  
何レモ本案ニ反對スルニ至レリ。

衆議院ニ於ケル委員會亦戰時ニ於テ特ニ細民ニ苦痛ヲ及ホスヘキ負

擔ヲ爲サシメムトスルヲ不可ナリト爲スアリ、或ハ鹽ハ政府ノ專賣ト爲スヲ適切ナリト爲スアリ、遂ニ鹽ノ消費稅ハ非常特別稅法中ヨリ削除スルニ決シ本會議ニ於テモ亦之ヲ是認セリ。

チ 政府モ元來鹽ハ專賣制度ト爲スヲ可ナリトスル所ナリシモ、戰時財政ノ急ニ應スヘク、急遽本制度ニ關シ提案スルノ隙ナカリシヲ以テ鹽消費稅案ヲ立テ其急ニ應セムトスルモノナリシカ故ニ他ニ財源ヲ得ルニ於テハ強テ消費稅案ヲ維持スルノ要ナク衆議院ノ決議ニ同意シ貴族院亦衆議院ノ決議ヲ是認セリ。

リ 政府ハ戰時財政ノ第二次計劃ニ際シ更ニ鹽ニ對シ歲入ヲ需ムルノ必要ヲ生シ專賣制度ニ依ルヘク閣議ヲ決シ、三十七年十一月三十日之ヲ衆議院ニ提案シタリ。

ス 衆議院ニ於テハ鹽ノ專賣制度ヲ布クトキハ貧富ノ差別ナク一様ニ課稅スル結果トナリ、多數細民ノ生活ヲ壓迫シ且各種工業水產業等ノ發達

ヲ沮害シ經濟上ノ不利益尠少ナラス、殊ニ斯ル重大ナル法案ヲ戰時ニ際シ輕々ニ決議スルノ不可ナルヲ論シタルモノアリシモ本案ハ一二ノ修正ヲ加ヘラレタルノミニテ明治三十七年十二月十七日同院ヲ通過シ同月二十六日貴族院ニ於テモ衆議院ノ修正通り可決シ、即日裁可奏請ノ手續ヲ爲シタリ。

ル 斯クテ鹽ノ專賣法ハ明治三十七年十二月三十一日裁可ヲ經法律トシテ翌三十八年一月一日公布シ、同年六月一日ヨリ施行セラレ茲ニ内地ニ於ケル鹽業制度ノ確立ヲ見、隨テ内地鹽業ハ外國鹽ノ壓迫ヨリ脱シ安全ニ維持セララルルニ到リ又一方國家財政上確實安固ナル一財源トシテ重要ノ位置ヲ占ムルニ到レリ。

ヲ 以上ノ如クシテ鹽ノ專賣ハ成立シ施行ニ着手スルニ至リシカ該法施行上ノ必要ニ依リ明治三十九年法律第十五號ヲ以テ改正ヲ加ヘ同年四月一日ヨリ施行セラレタリ其重要ナル事項ハ左ノ如シ。

(一) 鹹水ヲ鹽ニ代用シ若クハ智利硝石等ノ含鹽礦物ヲ鹽ニ代用スルノ虞レアリシヲ以テ鹹水モ鹽ト同シク政府ノ命令ヲ受ケ若クハ許可ヲ受ケタルモノニアラサレハ輸移入若クハ製造スルヲ得サルコト。  
 智利硝石等ノ含鹽礦物ニシテ含有鹽化曹達量百分ノ四十以上ノモノハ命令ノ定ムル所ニヨリ變性ヲ施スニアラサレハ輸移入ヲ爲シ得サルコト。

(二) 鹹水ハ之ヲ消費シ又ハ質入シ鹽製造人以外ノモノニ讓渡スルヲ得サルコト。

(三) 鹽販賣業者カ不當ニ利益ヲ貪ルノ弊ヲ認メ之ヲ防遏スル爲政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ販賣業者ノ販賣スル鹽ノ價格ヲ制限スルヲ得ルコトトナセリ。

(四) 尙右ノ外二三ノ改正ヲ見タリ。  
 一 鹽專賣法施行以來新ニ製鹽ヲ爲サムトスルモノ續出シ産額大ニ

増加セムトスル虞レアリシヲ以テ産額制限ノ一手段トシテ明治三十九年以降新規製鹽ヲ許可セサル方針ヲ採レリ。但機械製鹽ニシテ相當ノ産額ヲ低廉ナル生産費ニテ生産スルモノハ此制限ヨリ除外セリ。

一 鹽販賣制度ノ統一ヲ必要トシ明治四十一年四月法律第五十九號ヲ以テ改正ヲ加ヘ同年七月一日ヨリ施行セラレタル主要ナル事項左ノ如シ  
 (一) 鹽ハ政府又ハ政府ノ指定シタル元賣捌人又ハ小賣捌人ニアラサレハ之ヲ販賣スルヲ得サルコト。

(二) 鹽賣捌人又ハ鹽ノ販賣ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコト。  
 (三) 鹽賣渡數量ニ關スル制限ノ廢止。

(四) 右ノ外特別定價賣渡ノ範圍ニ改正ヲ加ヘラレタリ。  
 一 元來内地ニ於ケル鹽ノ生産地ハ殆ト全國各地ニ涉レルモ主要産地タル十州地方ト其以外トニ分チテ比較スルトキハ製造場數人員トモ後者ハ總數ノ六割ヲ占ムルニ不拘鹽田面積ハ總面積ノ三割鹽産額ハ總

量ノ漸ク一割強ヲ占ムルニ過キスシテ其規模小ナルノミナラス生産費ヲ要スルコト多大ニシテ鹽ノ產地トシテ不適當ナルモノ多カリシカ故ニ此等ノ小生産地ヲ整理シ専ラ主要產地タル十州地方ノ鹽業ヲ維持セシメ其整理ニ依ル減收額ハ臺灣鹽、關東州鹽ヲ以テ補充シ依テ生スル收入ノ差益及經費節約ヨリ生スル益金ヲ以テ鹽ノ回送費ヲ負擔シ漸次鹽價ノ低減ヲ圖リ斯クシテ鹽專賣ノ基礎ヲ鞏固ナラシメトシ明治四十四年法律ヲ以テ製鹽地整理ヲ發表シ同年ヨリ同四十四年ニ亘リ全國ニ於ケル小生産地ノ製鹽ヲ禁止シ其ノ整理ヲ實行シタリ。

カ 鹽專賣ノ成立及施行後ノ狀態ハ大要左ノ如クシテ今日ニ及タルモノナリ。尤モ其間人類衛生上ノ必需品ニシテ而モ各人ノ消費量畧一定セルモノニ對シ課税スルハ人頭税ヲ課スルニ等シク惡税ノ甚シキモノナリトシ、若クハ少數ノ鹽業者ヲ保護スルカ爲多數ノ消費者ヲ苦シメ且諸工業ニ壓迫ヲ加フルハ不當ナリトシ屢々專賣廢止ノ議ヲ唱説スルモノナ

キニアラサリシモ政府ハ本制度施行以來鹽品質ノ改善、鹽價ノ統一引下等專ラ本制度ノ改良、發達ニ努メ漸次内地ノ鹽業ヲシテ其面目ヲ一新セシムルニ到レリ。

## 第二目 鹽專賣ノ利益

一 鹽專賣ニ依ル收入ハ國庫ノ好財源タリ。

鹽ハ人生必需ノ食品ニシテ之ニ對シ課税スルノ可否ニ就テハ常ニ論議セララル所ナリト雖モ之ヲ諸外國ノ例ニ徵スルニ奧伊其他ノ數邦國ハ徵稅的專賣制度ヲ施行シ獨佛、和等ノ諸邦ハ消費稅制度ヲ布ケル等政費支辨ノ財源ト爲スモノ其例ニ乏シカラス。是レ畢竟鹽ハ人類生活上ノ必需品ナリト雖モ各個人ノ消費スル量ハ些少ノモノナルノミナラス、一時ニ需要スルモノニアラサルカ故ニ課税ノ負擔ニ關シ國民ハ苦痛ヲ感スルコトナク且鹽ハ其需要畧一定シ急劇ナル増減ナク常ニ人文ノ發達人口ノ増加ニ因リ漸次増加スヘキ傾向ヲ有セルカ故課税ノ目的物トシテ實ニ恰好ノモ

ノタルカ故ニ外ナラス。

而シテ我專賣制度ノ如キ主トシテ收入ヲ目的トスルモノナリト雖モ我國ノ状態ニ於テハ鹽需給ノ獨立ヲ圖ル上ニ於テ外國鹽トノ關係上内地鹽業ヲ保護シ之ヲ維持發達セシムル必要アリ。此等ノ目的ヲ達シ且豫定ノ收入ヲ擧クルカ爲ニハ消費稅制度ニ據ルヲ得シテ現專賣制度ヲ布カレタルモノニシテ現狀ニ於テハ如上ノ目的ヲ達シ且其收入ハ國庫ノ財源トシテ重要ナル位置ヲ占ムルニ到レリ。

二 鹽ノ專賣ハ鹽需給ノ調節ヲ保チ内地鹽業ヲ維持シ國ノ經濟ヲ利シ且業態ノ改善ヲ遂ケシム。

我專賣制度ノ下ニ於テハ鹽ハ政府ノ許可ニ依リ製造セシメ又政府ハ必要ニ應シ其指定シタルモノヲシテ必要量ノ輸移入ヲ爲サシムルカ故ニ常ニ鹽需給ノ調和ヲ保ツヲ得從テ内地鹽業ノ地位ヲ安全ナラシメ外國鹽ノ壓迫ニ依ル其衰退ヲ挽回シ殆ント歐米鹽ノ輸入ヲ杜絶シ以テ正貨ノ流失

ヲ防クヲ得タリ又其事業ノ安全トナリタルカ故ニ各地ノ製鹽状態ニ組織的統一アラシメ其信用ヲ増加シ全ク往時ニ比シ其ノ面目ヲ一新セシメタリ。

三 專賣制度施行ノ結果鹽ノ品位ヲ良好ナラシメタリ。  
政府ハ純鹽分ノ含量一定度ニ達セサル鹽ハ之ヲ收納セス又其一定量ニ達シタル鹽ハ其含量ノ多少ニ隨ヒ之ヲ數等級ニ分チ此等級ニ應シ賠償金ニ等差ヲ附シタルカ故ニ專賣制度施行前ノ如ク品質粗惡ノモノハ其跡ヲ絶チ一般ニ内地鹽ノ品質上進シ消費者ハ無價値ナル水分若クハ各種不純物ヲ多量ニ含有スル粗惡鹽ヲ購入スルノ損失ヲ免レ且其結果トシテ運賃包装材料等ニ對スル負擔モ自ラ輕減セラレタル等間接ノ利益ヲ伴フニ到レリ。

四 專賣制度ハ鹽ノ原價ヲ低廉ナラシム。  
鹽業者カ鹽ヲ製造スルニ隨テ政府ニ納付シ一定ノ價格ニテ賠償金ノ交

付ヲ受クルヲ得ルカ故ニ資金ノ運轉迅速ニシテ多額ノ資本ヲ要セス(地方ニ依リテハ物資需給ニ關スル組織ヲ有シ殆ト無資本ニテ小作鹽業ヲ營ミ得ルモノ在リ是レ事業安全ニシテ一定ノ賠償金ヲ政府ヨリ受ケ此ヲ得ルニ隨テ一定ノ率ヲ以テ物資ノ供給者ニ支拂ヲ爲ス等大ニ信用取引ノ發達ヲ遂ケタル結果ニ外ナラス)又鹽ノ生産期ト其需要期トハ常ニ一致セス且年ニ依リ作柄ニ豐凶アリ、隨テ季節ニ依リ年ニ依リ鹽價ノ騰落劇甚ナルヲ免レサリシヲ以テ其間ニ鹽商人ノ奸計ヲ逞フスルアリ鹽業者ハ大ニ其商畧ニ苦メラルルヲ常トセリ、然ルニ專賣制度ノ下ニ於テハ價格ハ一定セラレ又永ク多量ノ製品ヲ擁シテ鹽船ノ入津ヲ待ツ等ノ要ナク隨時政府ニ收納セラルルモノナルカ故ニ事業ノ安全ト收益ノ確實ナルコト昔日ノ比ニアラス、自然薄キ利益ヲ以テモ尙且事業ヲ經營スルヲ得ル等其原價ヲ安ラカナラシムル傾向ヲ有ス。

五 消費者ハ常ニ一定ノ價格ヲ以テ何時ニテモ必要ノ鹽ヲ購入スルヲ得。

殊ニ工業的消費者ハ購入上ノ簡便ト價格變動ノ危險ナキトニ依リ極メテ安全ニ其事業ヲ經營スルヲ得ルニ至レリ。

政府ハ鹽賣捌ノ制度ヲ確立シ、不生產地ニ對スル鹽ノ回送費ヲ全部負擔シ、全國ニ於ケル賣下價格ヲ統一シ、賣捌人ノ販賣價格ニ一定ノ制限ヲ附シタルカ故ニ各地方ニ於ケル專賣官署ヨリ元賣捌人ノ營業所及元賣捌人ノ營業所ヨリ小賣捌人ノ營業所迄ノ運賃ノ多少ニ因ル價格ノ高低ハ免レサルモ鹽其モノノ價格及賣捌人ノ利益歩合ハ之ヲ一定セラレ居ル譯ナルヲ以テ鹽ノ販賣價格ハ著シキ變動ナク鹽ノ消費者ハ必要ニ應シ隨時ニ畧一定セル價格ニテ購入スルヲ得ヘク又鹽ノ品質ハ其表示スル等級ニ依リテ一定セルカ故ニ其必要トスル品質ノモノヲ指定シテ購入シ得ヘク隨テ從前ノ如ク工業的消費者殊ニ醬油釀造業者等カ一時ニ多量ノ買溜ヲ爲シ自己ノ貯藏物ニテ古積トシ苦汁水分ヲ滴下セシムルニアラサレハ使用シ得サリシカ如キ煩ナク自然資金ノ固定ヲ避ケ貯藏物ノ設備ヲ縮少シ得ル等

其事業ノ經營上直接間接ノ利益ヲ享受シ自ラ其生産品ノ原價ヲ低廉ナラシムヘキ傾向アリ。

殊ニ作柄ノ豊凶ニ際シテハ政府ハ輸移入額ノ伸縮ニ依リ需給ノ調節ヲ自由ナラシムルカ故ニ需要期ノ切迫等ニ基ク價格ノ劇變ナカラシムルヲ以テ工業的消費者ハ其一般定價鹽ヲ使用スルモノト原價ニテ供給ヲ受クルモノトニ論ナク極メテ安全ニ事業ヲ經營スルヲ得ヘシ。

第三目 鹽ニ就テノ政府收入負擔額比較表

國別	制度	人口一人當 鹽消費額	人口一人當 負擔額	備考	參照 鹽百斤當 負擔額
日本	專買制	二一 <sup>斤</sup>	二八〇 <sup>厘</sup>	自明治四十三年度 至大正二年度	一・三〇〇 <sup>厘</sup>
伊太利	同	一一	八八九	自千九百九年 至千九百九年	八・一八〇
奧地利	同	二六	五四四	自千八百九十八年 至千九百七年	二・一〇〇
匈牙利	同	一八	六三三	同	三・五〇〇

獨逸	消費稅制	三四	四四二	自千九百九年 至千九百九年	一・三〇〇
佛蘭士	同	?	三三六	自千九百七年 至千九百八年	?

第四目 鹽專賣ノ爲鹽價ノ高クナリシ率

政府ハ鹽製造人ノ製造シタル鹽ニ對シ其生産費ニ相當ノ企業益金ヲ加算シタルモノヲ賠償價格トシ之ニ依リ其品質數量ニ應シ賠償金ヲ交付シテ收納シ更ニ一定ノ價格ヲ定メテ賣下クルモノナルカ故ニ大體ニ於テ其賣下ケ定價ト賠償價格トノ差額即チ政府ノ專賣收入金ニ相當スル額丈ケハ專賣ニ依リ鹽價騰貴シタルモノト云フヲ得ヘシ。今法施行當初ヨリ今日ニ至ル迄ノ專賣收入金額ヲ調査スレハ左ノ如シ。

イ 政府專賣收入率ハ鹽專賣法第十八條二項ニ其最大限度ヲ規定セラルル所ニシテ政府ハ法施行ノ當初ヨリ明治四十一年六月迄ハ左ノ如ク最大限度ノ收入率ヲ附加シテ賣下ケタリ。

鹽百斤當金壹圓四十八錢

政府專賣事業 鹽專賣ノ狀況



明治四十一年七月ヨリ鹽百斤當賠償價格ニ收入率壹圓四十八錢ヲ加ヘタルモノヨリ其百分ノ五ヲ控除シタル額ヲ以テ鹽元賣捌人ニ賣渡シ元賣捌人ヲシテ其買受價格ニ右控除額ニ相當スル金額及專賣官署ヨリ其營業所迄ノ引取費ヲ加ヘタルモノヲ超ヘテ販賣スルヲ得サラシメタリ。要スルニ賠償價格ト收入率ノ和ノ百分ノ五ハ量減損失ノ補填及元賣捌人ノ利益ニ充當スルモノニシテ從來ハ消費者ノ負擔ニ歸シタルモノナルモ此時ヨリ政府ニ於テ負擔スルト同時ニ其限度ヲ定メタルモノニシテ結局鹽價ノ低減ヲ意味スルモノナリ。

今其當時ノ賠償價格ヲ基礎トシ計算セハ政府ノ收入ハ左ノ如クナリシ譯ナリ。

五等鹽百斤當賠償價格	一圓
收入率	一圓四十八錢
計	二圓四十八錢

元賣捌人へ賣下價格 二圓三十五錢六厘(右計ノ百分ノ五ヲ控除シタルモノ)

故ニ政府ノ收入金ハ左ノ如シ

金一圓三十五錢六厘 同年六月以前ニ比シ十二錢四厘減少

尤モ右控除金ノ計算上鹽ノ等級又ハ包裝種類ノ異ナル毎ニ少額ノ差違アリタリ。

ハ 從來鹽百斤當收入率一圓四十八錢ト一定シ取扱ヒ來リシモ明治四十五年七月一日ヨリ鹽ノ賠償價格ヲ引上ケタルニ拘ハラズ賣下定價ハ之ヲ据置カレタル爲十州地方ノ產鹽即チ鹽ノ大部分ニ對スル收入率ハ從來ノ一圓四十八錢ヲ一圓四十三錢ニ改メラレ從テ政府ノ收入ハ一圓三十錢四厘トナリタリ(但十州播磨、備前、備後、安藝、周防、長門、伊豫、讚岐、阿波ノ十箇國以外ハ收入率ヲ異ニスルニ至リシモ茲ニハ之ヲ省ク)

ニ 大正二年十月十五日ヨリ全國ニ於ケル政府賣下定價ヲ統一スルト同時ニ專賣收入率一圓四十三錢ヲ一圓二十五錢ニ改定セリ(但十州以外ノ

小産地ハ賠償價格ヲ異ニスルヲ以テ收入率ニ多少ノ相違アルモ茲ニ之ヲ畧ス)

右ノ場合ニ於ケル政府ノ收入金ヲ計算スレハ左ノ如シ

五等鹽四十斤以入百斤當賠償價格 一圓九錢

收入率 一圓二十五錢

計 二圓三十四錢

二圓二十二錢三厘(右計ノ百分ノ五ヲ控除シタルモノ)

此元賣人へ賣下價格

故ニ政府ノ收入金ハ左ノ如シ

金一圓十三錢三厘 (從前ニ比シ十四錢一厘ヲ減シ法施行當初ニ比シ十四錢七厘ヲ低減セリ)

右金額ハ鹽ノ等級包裝ノ種類ニ依リ多少ノ差違ヲ免レス。

ホ 以上收入金トシテ記述シタルモノハ即チ專賣ニ依ル鹽價騰貴ノ直接原因ヲ爲スモノナリ。

然リト雖モ現今ニ於テハ政府ハ鹽ノ販賣制度ヲ統一シ生産地ヨリ不生

産地方へノ回送資ハ全部政府ノ負擔ト爲スニ至リシヲ以テ鹽ノ不生産地方ニ於テハ從來消費者ノ負擔ニ歸シタリシ回送費ノ負擔ヲ免レ夫レ丈ケ鹽價ハ低減セラレタル結果トナルヘク隨テ此等ノ地方ニ於テハ專賣ニ因ル鹽價騰貴率ハ前記政府收入金ヨリ更ニ數錢乃至數十錢ヲ低減シタルモノナルヘキ理ナリ。

へ 右政府收入金ノ變動ハ其主ナルモノノミヲ掲ケタルモノニシテ賠償金ノ高低ニ依リ少額ノ差違ヲ生シタルモノノ如キハ之ヲ省畧セリ。

### 第四節 消費稅ノ收入

消費稅及專賣收入ノ大要ヲ述ヘン。

科 目		大正四年度豫算額
清 酒	濁 酒	八〇〇九一二五六
		三三〇三六二

政府專賣事業 消費稅ノ收入



專賣局益金	噸 稅	關 稅		實業營業稅	石油消費稅
		合 計	(2) 移 入 稅 計		
			內 臺	內 臺	外 國
			地 灣	地 灣	產
計		計	計	計	計
樟 鹽 煙					
腦 草					
		五五三四七四	一 二〇一 七二一 二〇三	三七一 九五 一一六 一 五九〇 九二一	八四四 九三〇 一 四三三 四九二
		五八八 八九 五四九 八六四 三四三一 三〇 二四六	三九 九八七 九六一 一 二〇一 九二四	三八七 八六 〇三七	
		六七 五六三 二二六		二六四 七〇五	

四八六

然リ而シテ歐洲諸國ノ專賣及消費稅ノ收入金額ハ大要左ノ如シ

總計 二四三七〇八五六七

佛 國	英 國	國 名	年 度	科 目	金 額
千九百十三年度 決算	千九百十三年度 決算			關稅	三六二〇七七九三磅
				關稅	四〇一五四五七四磅
				酒稅(飲料稅)	六二四五八九五〇〇フラン
				鹽稅	四七七一九五九〇〇フラン
				免許稅	一一二八〇〇〇〇フラン
				砂糖稅	三六七一七〇〇〇フラン
				雜種稅	一八六五一九五〇〇フラン
				專賣益金	六九六九七一六七フラン
					九六八六五五三七三フラン

政府專賣事業 消費稅ノ收入

四八七

	伊國	獨逸帝國
	豫算	豫算
	千九百十三年度	千九百十三年度
關稅	關稅	鹽稅
消費稅	消費稅	火酒稅
飲料販賣業特別稅	飲料販賣業特別稅	シヤンパン酒稅
鹽專賣	鹽專賣	醉稅
煙草專賣	煙草專賣	燈火料稅
關稅	關稅	燐寸稅
煙草稅	煙草稅	酒母稅
紙卷草稅	紙卷草稅	間接稅
砂糖稅	砂糖稅	關稅
		消費稅
		燒酎販賣上り高
	二六六七〇〇〇リイラ	
	一二二〇九二九九〇リイラ	
	二一〇二〇〇〇〇リイラ	
	三二七〇三〇〇〇リイラ	
	八九〇〇〇〇〇リイラ	
	二七〇〇〇〇〇リイラ	
	一八七六七〇〇〇クローネン	
	四〇二六〇〇七〇〇クローネン	
	二二一八〇〇〇クローネン	
	四九六〇二八三〇クローネン	
	三三一六四五五〇〇クローネン	
	二〇八六五六九八九四マーク	
	一〇八二五〇〇〇マーク	
	三六四六九〇〇〇マーク	
	一五七六〇〇〇〇マーク	

露士亞	普魯西	獨逸帝國
豫算	豫算	豫算
千九百十二年度	千九百十三年度	千九百十三年度
關稅	關稅	鹽稅
消費稅	消費稅	火酒稅
燒酎販賣上り高	燒酎販賣上り高	シヤンパン酒稅
		醉稅
		燈火料稅
		燐寸稅
		酒母稅
		間接稅
		關稅
		消費稅
		燒酎販賣上り高
	一二九三七九〇〇〇マーク	
	三三四五八五〇〇〇留	
	三三六八〇四二〇〇留	
	八三七六六〇〇〇〇留	
		五九六六〇〇〇〇マーク
		一九五四五五〇〇〇マーク
		一〇六八五〇〇〇マーク
		八二五〇〇〇マーク
		一五八四六〇〇〇マーク
		二〇一二一〇〇〇マーク
		一一四七八〇〇〇マーク

## 第二十六章 新ニ兵役稅ヲ起シ軍人特別扶助基金ヲ設クルノ議

我國人ノ義勇奉公ニ勇ムハ即チ其萬國ニ冠絶スル所以ノ一大原因タラス  
 シハアラス。而シテ日清日露ノ二大戦役ノ戦勝ハ云ハスモカナ由來我軍隊ノ  
 精銳ニシテ戰ニ臨ンテ勇ナル所以ハ斯心ヲ基トシテ一死以テ國恩ニ報セン  
 トスルノ決心アルニ由ル然ルニ今ヤ此決心ト美質トハ年ト共ニ漸ヤク薄ラ  
 キ數千年來祖宗ノ養成薰陶シ來リタル建國ノ精華ハ日ニ月ニ消失シ去ラン  
 トスルハ誠ニ長大嘆息ノ至リナラスヤ吾人ハ適當ナル手段ヲ採リ以テ此精  
 華ヲ維持スル所以ノ方法ヲ講セスンハ將來ノ國難ニ際シテ復既往ノ勇將強  
 卒ノ出ルヲ望ムヘカラス嘗テ千八百七十年ノ普佛戰役後伯林巴里等ニ於ケ  
 ル軍人ノ遺族等其父夫ノ名譽體面ヲ傷クル者アリ殊ニ其妻娘ニ著シキヲ聞  
 キ撫然トシテ其腐敗ヲ笑ヒ我軍人軍族ノ高志潔行ヲ誇リトセンカ今ヤ必ス

シモ獨リ自ラ誇ル能ハサルカ如シ予輩ハ妄リニ流言ヲ信スル者ニアラスト  
 雖モ軍人ノ名譽ト志行トハ國家ニトリテ最モ大切ナリ。

元來軍隊ノ強銳ナルハ死ヲ恐レサルニ由ル人生既ニ死ヲ恐レス何ヲカ恐  
 ルル所アラシヤ亦何ヲカ爲ササランヤ我祖宗茲ニ見ル處アリ封建時代戰亂  
 ノ世ニ於テ具サニ死ヲ惧レス一死君恩ニ報スル所以ノ精神ト道トヲ陶冶セ  
 リ人若シ封建時代ノ所謂軍記ナルモノヲ播カンカ一見直チニ其然ル所以ヲ  
 了解スルニ足ラン當時ノ戰鬪ナルモノハ千篇一律敵モ味方モ皆殆ト謂フ所  
 ノ一番鎗ニ由リテ開始セラレサルハナシ而シテ武士ハ所謂一番鎗ヲ入ルル  
 ヲ以テ無上ノ名譽トナシ笑テ死地ニ就クハ數百千年以來常ニ史上ニ新ナル  
 事實ナリ死ヲ決スル者ハ却テ生クルハ戰鬪ノ一大元則ニシテ設令如何ナル  
 惡戰苦鬪ニセヨ進ンテ戰フ軍勢ハ敗乏軍ニ比シテ死亡者少キハ實際ノ證ス  
 ル事實ニシテ爰ニ於テカ勇敢ナル者ハ益勇敢ニ怯懦ナル者ハ益怯懦ナラサ  
 ルヲ得サルハ我數百千年ノ封建史之ヲ證シテ餘蘊ナシ我國民ノ剛勇ナル所

以ハ元トヨリ天ノ性ニ出ツルナルヘシト雖モ而モ之ヲ勤勉推獎スル道ナク  
ンハ焉ソ斯ノ如クナルヲ得ンヤ。

人情誰レカ死ヲ怖レサラン之ヲ怖レサル所以ハ道義之ヲ推獎シ情恩之ヲ  
勤勉シ軍人ヲシテ敖然トシテ自ラ頼ミ自ラ期スル所アラシムルニ由ル願ミ  
ルニ我祖宗死者ヲ待ツ所以ノ上ニ於テ至レリ盡セル所アリ夫ノ一番鎗ノ功  
名者ハ設令之カ戰死スト雖モ其效ハ竹帛ニ録セラレ死セル功名者ハ生ケル  
子孫ヲシテ扶録ノ加恩ヲ享ケシメ以テ子孫ノ安穩ト榮養トヲ缺カサラシム  
是レ武士ノ死ニ勇ミ名譽ニ安ンシタル所以ナリ。今ヤ政治及社會ノ組織一變  
シタルヲ以テ亦昔日ノ制度ヲ望ムヘカラスト雖モ昔人ノ所謂道ハ一ニシテ  
二ナキハ今モ猶古ノ如シ況ンヤ人情日々功利ニ流レテ花ヨリ團子ノ謔ハ現  
今將來ノ人心ヲ發揮スルニ於テヤ故ニ將來我國人ヲシテ其祖先ノ如ク名  
譽ヲ重ンシ戰ニ勇ナラシメントセハ須ラク死者ヲ俟ツノ道ヲ講シ遺族者ト  
困苦ノ家族ヲ扶助スル方法ヲ設ケ以テ死者又ハ從軍者ノ名譽ト體面トヲ傷

ケサラシメ後者ヲシテ安ンシテ國家ノ急ニ赴クノ道ヲ立テサルヘカラスト或  
ハ曰ク名譽ト利益トハ兩立シ難シト然リ從來我國ノ國民道德ト信條トハ誠  
ニ斯ノ如クナリシナリ又往時ノ國會社會ニアリテハ此心ヲ以テ立タサルヘ  
カラサリシナリ然ルニ近世的ノ國家社會ノ風教ハ之ニ異ナリ名譽ノ存スル  
所ハ利益ノ存スル所ニシテ利益ノ存スル所ハ亦名譽ノ存スル所ナリ政治ハ  
宜シク之ヲ以テ國民ヲ率ヒルヲ念トセサルヘカラスト試ミニ之ヲ説カン方今  
戰ニ臨ムノ將卒ニシテ復往古ノ武士ノ如ク死後ノ功名又ハ名譽ノ戰死ヲ樂  
ンテ死ニ赴ク者果シテ幾人カアル之ニ反シテ死後父母ノ窮厄妻子ノ悲惨汚  
行ニ思ヒ及ハハ懼然トシテ其勇猛心ヲ鈍ラシ所謂名譽ト戰死トヲ棄テテ耻  
ツヘカラサルノ安ニ就ク者必スヤ多カラン我軍人ハ必スヤ甚少ク否少キノ  
ミナラス絶無ヲ信スト雖モ現今ヲ以テ將來ヲ律スヘカラサルナリ予輩史ヲ  
讀ミ常ニ優勝國ノ軍ハ生者ニ薄ク死者ニ厚ク戰敗國ノ軍ハ之ニ反シテ生者  
ニ厚ク死者ニ薄キヲ見懼然トシテ嘆シ慄然トシテ戰カスンハアラス今ヤ朝

廷軍人ヲ俟ツノ禮備ハレリト謂フヘシ而モ完キカ上ニ完キヲ望ムハ人事ノ常ナリ此點ニ於テ予輩ハ軍人遺族又ハ從軍者ノ家族困窮者ヲ扶助スルノ道ヲ講スルノ必要ヲ認ム況ンヤ軍事上ノ觀察ハ姑ラク之ヲ措クモ政治上經濟上之ヲ要スル所以ノ理アルニ於テヲヤ。

凡ソ帝國ノ臣民タル者ハ二大義務ヲ負フコトハ三尺ノ童子ト雖モ尙之ヲ知ル而モ朝廷一タヒ國民皆兵ノ主義ヲ採用セラレシ以來國民ハ果シテ悉ク其負フ所ノ義務ヲ現實ニセンカ實ニヤ國民ハ皆兵役ノ義務ヲ負フト雖モソハ唯名ノミニシテ實際之ニ服スル者ハ其半ハニ過キス一半ハ免役ヲ僥倖シツツアリト云フモ不可ナカラシ然リ而シテ現今兵役ノ義務ハ雷ニ兵役ノ義務ニ止マラスシテ經濟上ノ負擔義務ノ隨伴スルハ掩フヘカラサルノ事實ナリ念フニ兵役ノ義務ハ堅實ノ精神ト強健ナル體質トタニアランニハ能ク之ニ服シ得ヘキモ經濟上ノ義務ニ至リテ其一人一己ニシテ止ムヘカラス其累ヲ父母親屬ニ及ホサスンハヤマス其直接ノ負擔ハ左迄ニアラサルモ間接ノ

負擔ニ至リテハ更ニ多シ毎年十二月一二月ノ交新兵ノ入隊アルヤ貧困ナル父母又ハ一家ハ所謂稼人ヲ採ラレタルカ爲飢餓ニ頻シ或ハ一家離散ノ報ヲ見聞スルコト稀ナラス見聞セサル事實モ蓋シ多カラシ甚シキニ至リテ其父母ヲ給養スルカ爲法ヲ犯シテ脱營ノ弊ニ出ル者アルニ至ル是レ名譽ノ義務ヲ以テ名譽アル兵士ヲシテ罪ニ陷ラシムルモノニシテ民ヲ網ミスルニアラスシテ何ソヤ斯ノ如キ事例アルニ關ラス一方ニ於テハ教育アリ財產アル國民ニシテ平然トシテ兵役ヲ免レ安然トシテ家居迭樂スル者少カラス是レ果シテ公平ナル負擔ト言フヲ得ヘキカ一ハ血ニ泣テ血稅ヲ拂ヒ一ハ笑テ之ヲ脱ス念フニ國民トシテ共同生活ノ大元則ハ國民ハ公平ナル犠牲ヲ拂ヒ又ハ負擔ヲ負フノ點ニ存ス然ルニ國民ヲシテ皆兵役ノ義務ヲ負ハシムルニ反シ實際ハ尤モ其之ニ堪ユル者ヲシテ免レシムルニ至リテハ何タル法律ノ矛盾ソヤ故ニ曰ク國民皆兵役ノ義務ヲ負フ以上ハ國民ヲシテ皆義務ヲ盡サシメサルヘカラスト其之ヲ負ハシメサルハ事實上不可能ナレハナリ決シテ之ヲ



免除スルニアラサルナリト抗論スルハ非ナリ若シ事實上不可ナリトセハ可能ノ方法ヲ以テ之ヲ負擔セシムヘシ設令兵役ノ義務方法ニ於テ二途アリトスルモ豈其義務ニアランヤ故ニ吾人ハ兵役ヲ起シ徵兵合格者ニシテ抽籤ニ由リ兵役ヲ免ル者或ハ體力健全ニテ兵役ニ服スルニ足ルモ特別ノ理由ニ依リ免役セラレタル者ニ對シ兵役ヲ課シ以テ國民タルノ義務ヲ盡サシムヘキヲ唱道セントスル者ナリ。

兵役税ハ國民ノ義務ヲ盡サシムル一手段ナリ兵役ノ義務ヲ以テ租税ニ代フルニアラサルナリ決シテ兵役ノ義務ヲ購フニ金錢ヲ以テスルニアラサルナリ否寧ロ兵役ノ義務ヲ補フニ過キササルナリ云ハハ國民ノ義務又ハ犠牲ヲ平準ナラシムルノミ。

人或ハ佛國奈波翁三世ノ兵役税ニ鑑ミ漫ニ之ヲ非難シテ曰ク兵役ノ義務ニ代フルニ金錢ノ義務ヲ以テスルハ卑野ニシテ國民又ハ軍隊ノ心意ヲ墮落セシムト又曰ク兵役税ヲ起ストキハ教育アリ資力アル青年ハ皆兵役税ヲ納

メテ之ヲ免レ終ニハ軍隊ハ教育ナク資産ナキ下等社會ヨリ成リ其品質ヲシテ劣等ナラシムト嗚呼是レ何ノ言ソヤ予輩ノ所謂兵役税ハ兵役税ニ代フルニ兵役ノ義務ヲ以テスル租税ニアラサルナリ適當ナル方法手段ニ依リテ國民ノ義務ヲ盡スコト能ハサルカ故ニ國民ノ一大義務タル租税ヲ以テ之ヲ盡サシムルニ過キス之ヲ交換スルニアラサルハ若シ一旦事アリテ服役ヲ要スルニ當リテヤ兵役税ヲ免シ直チニ兵役ニ就カシムルニ徴シテ明カナリ人若シ兵役税ヲ以テ軍事ヲ汚スモノナリト言フ者アラシムルニハ國民ノ義務タル納税ノ義務ヲ果ス者ハ金錢ヲ以テ國事ヲ汚スモノナリヤ否ヤヲ反問セントス其無稽ノ言タルハ言フヲ俟タス況ンヤ軍事功勞者ノ賞與ト雖モ金錢公債ヲ以テスルニ於テヤ。

兵役税ノ義務ハ現役相當年限間之ヲ課シ其税率ハ年二圓以上五十圓以下トシ財産状態又ハ地位ニ依リテ多少ノ附加率ヲ課スルモ可ナリ尤モ附加率ニ重キヲ置キ本率ハ確定率ノ制ヲ採リ一人一箇年金貳圓ト定メ之ニ加フル

ニ家族ノ地位財産状態ニ依リテ貳百五十圓迄附加率ヲ課スル方寧ロ適當ナ  
ランモ知ルヘカラス。

然リ而シテ兵役税ノ收入ヲ以テ國庫ノ收入ニ歸シ國費支辨ノ財源ニ供ス  
ル程重要ノ資源ニアラサルハ各國ノ實例ニ徴シテ明カナルノミナラス之ヲ  
我國ニ期スルノ不可ナルハ予輩ト雖モ亦之ヲ信スル者ナリ同税ノ收入ヲ以  
テ須ラク軍人特別扶助基金ヲ設置シ左ノ用途ニ充ツ可シ一、軍人殊ニ下士卒  
恩給及扶助料ノ補充、二、軍人遺族殊ニ戰死者遺族ノ扶助及教育費ノ支給、三、現  
役者又ハ從軍者ノ家族ニシテ貧困自ラ支フルコト能ハサル者ノ扶養費ノ支  
給等是レナリ予輩ハ此基金ヲ以テ軍人ノ志氣ヲ振作スルト共ニ死後又ハ服  
役後家族ノ生活又ハ體面ヲ確保スル上ニ於テ至大ノ效果アルヲ信スル者ナ  
リ軍人ヲシテ死ヲ見ルコト歸スルカ如クナラシムルハ獨リ之ヲ軍人ノミニ  
望ムヘカラス國民亦其責ヲ願ツヘキナリ是レ獨リ國運ノ發展上大切ナルノ  
ミナラス國民ノ精神道德ヲ健全ナラシムル上ニ於テ缺クヘカラサルナリ。

## 第二十七章 現行税法ニ依ル各種所得

### ノ負擔

#### 第一節 租税ト負擔

租税ノ負擔ハ國民又ハ個人ノ所得ノ幾許ニ止ムヘキヤ、若クハ達セシムル  
モ尙可ナルヘキヤノ問題ニ至リテハ古來幾多ノ學者ノ論辯セシ所ナリト雖  
モ、未タ一定ノ歸着スル所ナシ、將來亦決定ノ期遠キノミナラス、恐ラクハ決定  
スルノ期ナカラシカ、何トナレハ經濟財政上ノ事ハ、徒ラニ形式ノミヲ以テ律  
スヘカラスシテ、實際上ノ關係ニ由リ伸縮擒縱ノ餘地ヲ存スルコト少カラサ  
ルヲ以テナリ。實ニヤ往古封建ノ世人民ノ職業ハ殆ト農業ニ限ラレシニ當リ  
テヤ、土地ノ負擔ハ八公二民ノ稱スラ之アリキ。八公二民トハ其收穫ヲ十二シ  
テ、八ヲ租トシ残り二ヲ以テ農民ノ得分トシタルノ謂ヒナリ。今ヨリ之ヲ觀レ

ハ、如何ニシテ彼等ハ斯ノ如キ負擔ニ堪ヘ、タリシヤヲ怪マサルヲ得ス然レトモ其處ニハ理由モアリ又裏モアリタルコトニテ、今日尋常一樣ノ吾人ノ考ヲ以テシテハ了解シ難キ所ナリト雖モ、唯國民ノ擔稅力ハ、幾分カ海綿ノ如ク伸縮スルモノタルハ心得置クヘキコトナリトス。之ニ反シ泰西諸國ニアリテハ、由來國民ノ租稅ニ對スル反感ノ聲ハ隨分喧シク、夫ノ普佛戰爭後、獨逸國民カ租稅ノ負擔ヲ訴フルヤ、所得ノ一割五分ニ達スルヲ以テ已ニ非常ノ事トナシ、長嘆スル者スラ之アルノ有様ナリキ。今ヤ各國ノ追隨角逐ハ往時ニ比シテ更ニ甚シク現ニ千九百十四年——十五年ノ戰爭ニ際シテハ歐洲ノ交戰國民ハ其所得ノ半以上ヲ舉ケテ以テ軍時費ニ供スルモ尙泰然厭ハサルノ有様ナリ

(The cost of the war, according to the best estimates, will equal or exceeds half of the total income of the inhabitants of the warring nations. Irving Fisher; Why is the Dollar shrinking?) 固ニ彼ト我トハ經濟及政事上ノ關係ヲ異ニスルノミナラス、租稅制度ヲ同シウセサルヲ以テ一樣ニ論スヘカラス、殊ニ根柢ヲ異ニスル統計上ノ數

字ニ依リテ以テ、論斷スルハ極メテ危險ナリト雖モ、唯方今吾人ノ須ラク考慮スヘクシテ、誠ニ止ムヲ得サルモノアルヲ如何ニセン。何ソヤ他ナシ、租稅ノ負擔ト産業ノ興廢トノ關係即チ是レナリ。

由來、租稅ノ負擔カ、産業上ニ及ホス影響ヲ論スル學者少カラス、殊ニ英國ノ如ク二百有餘年以來商工業ノ發展ニ苦心セシ國柄ニアリテハ、常ニ租稅ト商工業トノ關係ニ着眼シ、勗メテ其發達ヲ阻碍セサルヤウ租稅制度ノ制定ニ腐心セルノ事跡ハ其財政史上ニ歷々タリ。現ニあだむすみすノ如キモ此主意ニ據リテ以テ所謂租稅ノ四大元則ヲ唱道セシ程ナリ。念フニ獨リ租稅ノ産業上ニ及ホス影響ノミヲ見テ、租稅制度ヲ設クルノ不可ナルハ云フヲ俟タスト雖モ、而モ之ヲ顧ミサルモ亦善キコトニハアラス。サレハ租稅ヲ以テ國民ノ貯蓄心ヲ獎勵スルノ手段ニ供スルト同時ニ亦國民ノ消費ヲ抑制スルノ具ニ充ツヘシト云ヘル説ノ如キ、學理上ノ根本論トシテハ兎モ角、政策上ヨリ觀ルトキハ馬鹿ニナラサル議論ナリトス。殊ニ現今世界ノ形勢ヲ察スルニ所謂平和ノ

戰爭ハ常ニ熄マヌシテ姑ラクモ寧日ナシ、此時ニ當リ經濟上ノ競爭場裡ニ角逐シテ勝利ヲ占メント欲セハ、必スヤ産業ノ發展ヲ企圖セサルヘカラス。國富ミ資本充實スルモノハ、戰ハスシテ既ニ優勝ノ地位ニ立ツヲ得ヘシ。故ニ予輩ハ他ノ總テノ主義目的ヲ犧牲ニシテ迄モ、之カ爲ニ租稅ノ制度ヲ定ムヘシト云フニアラサルモ、尙幾分カ茲ニ注意セサルヘカラサルヲ說カントスル者ナリ。從來我國ノ租稅制度ハ、此點ニ就テハ注意ヲ拂フ所少キカ如シ、唯リ少キノミナラス、時トシテハ殆ト無茶ナルコトナキニアラス。而モ租稅ノ負擔ニシテ左迄重カラサランカ、敢テ之ヲ論スルノ必要ナカルヘシト雖モ、其重キコト今日ノ如クナルニ於テハ、最早看過スルコト能ハサル時機ニ達シタリト云ヲ得ヘシ。

## 第二節 負擔ノ普遍

若シ夫レ租稅ニシテ單ニ國民ノ一部財產又ハ所得ノミヲ稅スルヤ、或ハ彼

レ此レノ間比較ノ標準ヲ缺キ、或ハ擔稅力ニ等差アルノ理由ニ因リ、間々輕重ヲ認ムルノミナラス、之ヲ忍フヲ以テ得策トスルコトナキニアラスト雖モ、所得稅ノ如キハ其性質上ヨリ見ルモ將タ目的上ヨリ見ルモ宜シク負擔ノ公平ヲ期スルト共ニ、其産業上惹ヒテハ國民ノ企業心ニ及ホス影響ヲモ察セサルヘカラス。然ラハ所得稅ノ性質及目的トハ何ソ他ナシ、個人ノ提供力ニ從ヒ漏ス所ナク一般人民ヲ稅スルコト即チ是レナリ。

茲ニ吾人ハ再言ス、所得稅ハ須ラク個人ノ提供力又ハ擔稅力ニ從フヘシト。而シテ個人ノ擔稅力ハ千種萬様ノ理由ニ由リテ左右セララルト雖モ其ノ重ナル者ハ大要左ノ如クナルヘシ。

- (1) 所得金額ノ多少又ハ大小。
- (2) 所得ノ由テ生スル財源ノ種類性質。
- (3) 納稅者ノ人的關係例ヘハ其資産及營業狀態社會上ノ地位、衛生及家族ノ狀況等ノ如シ。

以上三種ノ事情ハ個人ノ提供力ヲ左右スル上ニ於テ、何レ優リ劣リハナケレトモ、予輩ノ茲ニ論セントスルハ、主トシテ所得ノ大小ト財源ノ種類性質ニ因由スル負擔ノ輕重問題ナリ。是レ現行所得稅法ハ此等ノ點ニ於テ大ニ注意ヲ拂ヒ居ルニ拘ラス、其注意ヲ拂フノ結果ハ、却テ吾モ人モ豫想セナル處ニ出テテ最早打テ棄テ置ク能ハサル程ナレハナリ。

暫ク所得ノ財源ニ就テ之ヲ觀ルニ、大要三種ニ別チテ以テ其擔稅力ヲ察スルコトヲ得ヘシ。所得ノ三種トハ一ハ勤勞所得ニシテ、二ハ財產所得、三ハ營業所得ナリトス、(三九一頁以下參照先ツ是等ノ所得ノ性質ヲ觀ルニ其擔稅力ニ差異アルハ明カナリ蓋シ勤勞所得トハ勞働、智識、藝能、經驗等ニ賴リテ以テ得ル處ノ所得ニシテ、所得者ノ身體又ハ精神ヲ以テ基礎トス。故ニ其人存スレハ之アルモ、其人亡ケレハ即チ之ナキノミナラス、設令其人存スト雖モ疾病不幸其他老後ノ働ク能サル場合ヲ豫想シテ、計ヲ爲ササルヘカラサルカ故ニ比較的擔稅力ニ乏シ之ニ反シ財產所得ハ財產ニ伴フ所得ニシテ、云ハハ財產ノ附

物ナリ、故ニ其所有者ハ働カウカ働クマイカ、照ラウカ降ラウカ其様ナコトニ頓着ナシ、加之時トシテ坐カラニシテ財產ノ増加スルコトアリ。例ヘハ市街宅地價格騰貴スル場合ノ如シ從テ其擔稅力タルヤ割合ニ大ナリ。終リニ營業所得ハ財產及勤勞所得ノ中間ニアリテ、云ハハ混合性ノモノナリ、營業者ハ自ラ勞力又ハ勞心ヲナスト同時ニ又財產ヲ有スルヲ以テ其協同ノ働キニ由テ所得ヲ得ヘシ。故ニ其擔稅力モ、亦財產及勤勞所得ノ中間ニアリト云フモ不可ナカラン。

### 第三節 負擔ノ衡平

然リ而シテ如上ノ主旨ニ基キ三種所得ノ間ニ於ケル負擔ノ均衡ヲ謀ルノ方法ハ、一ニシテ足ラサルヘク各國ノ實例モ自ラ一樣ナラサルヲ見ル。先ツ學理上如何ニシテ三種所得ノ負擔ノ鈞合ヲ謀ルヘキカト云フニ、要スルニ左ノ三途ヲ出テサルヘシ。

第一 所得稅及收益稅ヲ配合スルコト  
 第二 所得稅收益稅及補完稅ノ三者ヲ併ヘ行フコト  
 第三 所得稅ニ於ケル所得ノ財源ニ依リ稅率ヲ高低スルコト  
 予輩ノ茲ニ收益稅ト稱スルハ、地租、家屋稅、營業稅及資本利子稅ノ總稱ニシテ是等ノ租稅タルヤ皆或ル種類ノ財源ニ根柢スル特種ノ財源ニ遡リテ以テ其稅源ヲ求ムルモノナリ。既ニ特種ノ財源ニ根柢スル稅源ヲ捕捉スル以上更ニ進ンテ總テノ稅源ヲ網羅スル個人ノ全所得ヲ一打セントスルハ是レソ所得稅ノ目的ナル、予輩カ所得稅ハ個人ノ提供力ニ從ヒ以テ課稅セント云ヒシハ此意ニ外ナラス。

次ニ所得稅、收益稅及補完稅ノ三者ヲ併セ行フノ方法ハ、租稅制度トシテハ兔モ角、實際上ヨリ見ルトキハ稍煩雜ナルヲ免レサラン、即チ所得稅モ行ヒ收益稅モ行フカ上ニ有體財產ハ殊ニ擔稅力ニ富ムト云ヘル理由ニ依リ、更ニ是等ノ財產ヲ一括シテ以テ、一種特別ノ財產稅ヲ行ハントスルナリ。サレハ土地

ニマレ家屋ニマレ有價證券ニマレ三通リニ課稅セラルルノ理ナリ。  
 終リニ所得稅ノ中ニ於テ所得ノ根源ニ遡リテ所得ヲ別チ、以テ其稅率ヲ別ニセントスルノ方法ハ所得稅トシテハ稍複雜ナルノ傾アリ。畢竟スルニ擔稅力ニ富メル財產所得ハ其稅率ヲ重クシ、之ニ反シテ其最モ乏シキ勤勞所得ハ最モ稅率ヲ輕クシ、兩者ノ中間ニ介マレル營業所得ニ對シテハ之ヲ折衷スルノ意ナリ。國ニ由リカカル制度ヲ採用セシ所ナキニアラス、我國ニ於テモ現ニ第二十六議會ニ政府ノ提出セシ所得稅改正案ハ此主旨ヲ採用シ、又明治四十年四月開設ノ稅法整理案審查會ニ政府ノ諮問セシ所得稅改正案中ニハ、所得ヲ勤勞營業及財產ノ三所得ニ分チ、稅率ハ無論一定ナルモ勤勞所得ハ八掛ケニ營業所得ハ九掛ケニシテ、以テ其課稅額ヲ定メントハシタルナレ。既ニ論述シタル如ク現行法ハ勤勞所得ト財產所得トヲ分チ前者ハ九掛ケニシテ以テ同一稅率ヲ課スルノ法ヲ採ル。

是レニ由テ之ヲ觀レハ、各種所得ノ間ニ於ケル負擔ノ均衡ヲ圖ラントスル

ハ決シテ容易ノ事ニアラス。要スルニ其國ニ於ケル政治上ノ歴史及關係ト、之ニ加フルニ其國民ノ經濟組織トヲ參量シテ以テ中正ヲ期スヘキノミ。必スシモ一方ノミニ偏スヘカラサルナリ。時トシテハ以上論述セシ三方法中ニ就キ其一ノミヲ遵用スル可ナリ。時トシテハ更ニ三者ヲ混シテ之ヲ折衷スル亦不可ナルコトナケン。

#### 第四節 各種財源ノ負擔ノ重複

顧ミテ我現行租稅制度ハ、此點ニ就テ如何ニト問ウニ、言必スシモ容易ナラサルナリ。先ツ收益稅トシテハ國稅ニ地租營業稅ノアルアリ、地方稅トシテ家屋稅及特別營業稅アリ、之ニ加フルニ國稅タル所得稅ヲ將テ、中央地方相通シテ以テ各種財源ニ根柢スル所得ノ負擔ノ釣合ヒヲ取ラントス。外觀ハ斯ク整然タルカ如クナルモ、細ニ之ヲ察スル時ハ隨分支離滅裂ナル所アルヲ知ルヘキナリ。地租ハ不動産ノ一種タル土地ヲ稅シ、營業稅ハ營業資本等ヲ稅スルヲ

目的トナスモ此外ニ有體財產タル者少カラサルナリ故ニ國稅制度ハ其稅源ヲ網羅スル上ニ於テ完備セリト云フヲ得サルヘシ。尤モ地方稅制度中ニ家屋稅アルヲ以テ吾人ハ家屋稅ナキヲ患ヘスト雖モ以上ノ三稅ノミヲ以テシテ悉ク有體財產ヲ捕打シ得タリト云フヘカラス。換言スレハ國稅地方稅制度上收益稅トシテ未タ課稅セラレサル財產アルヤ明カナリ、此點ハ更ニ後章ニ於テ論スルコトトシテ、更ニ以上三收益稅ノ負擔ヲ見ルニ、土地ハ國稅トシテノ地租ヲ負ヒタル後所得稅ヲ負ヒ更ニ又數種ノ附加稅ヲ擔ヒ、營業稅モ又然ルカ如シ。而シテ家屋稅ニ至テハ殆ト市街地ニ限ラレ、未タ全國ニ亘リテ一般ノ家屋ニ賦課スル迄ノ機運ニ達セサルナリ、之ヲ以テ三者ノ負擔ハ決シテ均衡ヲ得タリト云フヘカラス。是レ元ヨリ在來ノ歴史的關係ニ因由スルヤ多キヲ以テ、予輩ハ必スシモ之ヲ批難セサルヘシト雖モ、然モ斯ノ如クニシテ改メスンハ重キ者ハ益々重ク輕キモノハ愈々輕カラントスルハ必然ノ勢ヒナリ。予輩ハ左表ニ依リテ以テ國稅及地方稅ノ負擔ノ單復スル所以ノ大要ヲ示サン

トス。

土地ニ對スル課税

地租(國稅)

宅地

田畑

其他ノ土地

北海道ニ於ケル宅地以外ノ土地

田畑

其他ノ土地

地租附加税(地方税)

北海道府縣(沖繩縣ヲ除ク) 附加税ノミヲ課スルトキ

沖繩縣ノ區及町村

段別割ノミヲ課スルトキ

其他ノ公共團體

附加税ノミヲ課スルトキ

沖繩縣

市町村

稅率

地價百分ノ二個半

地價百分ノ四個七

地價百分ノ五個半

地價百分ノ三個四

百分ノ四個

田畑 地租百分ノ三十二  
宅地 地租百分ノ十三

一段歩ニ付キ毎地目平均金四十錢

宅地、地租百分ノ九

田畑、其他ノ土地地租百分ノ二十一

北海道ノ區、一級町村及二級町村  
其他

段別割ノミヲ課スルトキ

地租附加税及段別割併課ノ場合

營業稅(國稅)

十二類二十三種ノ營業ニ課ス

營業稅附加税

北海道府縣

其他ノ公共團體

所得稅(國稅)

第一種 甲

乙

第二種

第三種

一段歩ニ付キ毎地目平均金四十錢

ニ於テハ段別割ノ總額ハ其他ノ地目ノ地租額宅地ニ  
在リテハ百分ノ九、其他ノ土地ニアリテハ百分ノ二十  
一ト附加税額ノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

以上ノ營業稅ハ二乃至四ノ課稅標準ニ依リテ別々ノ  
稅率ヲ課セラル(明治四十三年四月六日法律第四十五  
號)

營業稅 百分ノ十一

營業稅 百分ノ十五

稅率

千分ノ四十ヨリ千分ノ百三十迄

千分ノ六十二、五

千分ノ二十

千分ノ二十五ヨリ千分ノ二百二十迄

現行稅法ニ依ル各種所得ノ負擔 各種財源ノ負擔ノ重複



所得稅附加稅(地方稅)

北海道府縣  
其他ノ公共團體

第二種ノ所得ニ對スル所得稅ヲ除キ  
所得稅 百分ノ四  
第二種ノ所得ニ對スル所得稅ヲ除キ  
所得稅 百分ノ十五

制限外ノ課稅

內務大藏兩大臣ノ  
許可ヲ要スル場合

- 一、特別ノ必要アル場合ハ許可ヲ受ケ前記ノ制限ヲ超過シ其百分ノ十二以内ニ於テ課稅スルコトヲ得。
- 二、左ニ掲グル場合ニ限り特ニ許可ヲ受ケ前項ノ制限ヲ超過シテ課稅スルコトヲ得。
  - (一) 內務大藏兩大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ。
  - (二) 非常ノ災害ニ因リ復舊工事ノ爲費用ヲ要スルトキ。
  - (三) 水利ノ爲費用ヲ要スルトキ。
  - (四) 傳染病豫防ノ爲費用ヲ要スルトキ。
- 三、前二項ニ依リ制限ヲ超過シテ課稅スルハ前記各稅目ニ對スル賦課力其制限ニ達シタルトキニ限ル但地租附加稅及段別割ヲ併課シタル場合ニ於テハ一地目ニ對スル賦課力制限ニ達シタルトキハ附加稅力期限ニ達シタルモノト看做ス其段別割ノミヲ賦課シタル場合ニ於テハ一地目ニ對スル賦課力制限ニ達シタルトキ亦同シ。

許可ヲ要セサル場合

- 一、府縣費ナ市ニ分賦シタル場合ニ於テハ市稅制限ノ外其分賦金以内ニ限リ府縣稅制限ニ達スル迄課稅スルコトヲ得。
- 二、府縣費ノ一部ヲ市町村ニ分賦シタル場合ニ於テハ市町村稅制限ノ外其分賦金額以内ニ限リ課稅スルコトヲ得但府縣稅ノ賦課額ト市町村ノ賦課額トノ全算額ハ府縣稅ノ制限ヲ超過スルコトヲ得ス。

以上ハ單ニ法文上ニ現ハレシ負擔ノミヲ予輩ハ尙此他ニ各種ノ名稱ヲ以テ賦課セラルル直接間接ノ負擔兩ナカラ、之アルヲ信スルニ躊躇セサルナリ。是レニ由テ觀レハ、明治三十二年六月十七日勅令第二百七十六號ノ結果、家屋所有者ノ負擔ハ割合ニ輕キコトトナルヘシ。何トナレハ其戶數割ヲ賦課スル地方ニハ家屋稅ヲ行フコトヲ得サレハナリ。尤モ予輩ト雖モ近時市街地ニ於ケル家屋稅ノ負擔、必スシモ輕キニアラサルヲ知ラサルニアラス。シカモ之ヲ以テ二重三重ノ負擔ヲ荷フノ稅源ニ比スルトキハ、決シテ日ヲ同ウシテ語ルヘカラサルヘシ。若シ夫レ之ニ加フルニ所得稅ヲ以テスルトキハ更ニ其顯著ナルモノアルヲ見ン。

現行稅法ニ依ル各種所得ノ負擔 各種財源ノ負擔ノ重複

更ニ進ンテ所得税ノ負擔ヲ觀ルニ第一種ノ所得ノ負擔ハ第三種ノソレニ比シテヨリ輕ク而シテ第二種ノソレハ第一種ノソレニ比シテ更ニ大ニ輕シ以上ノ三種ノ所得中最モ勤勞努力ヲ要スルハ第三種ノ所得タルハ勿論ニシテ之ニ次クハ第一種ノ所得ニシテ終リニ第二種ノ所得ニ至テハ毫モ勞心勞力ヲ要セサルナリ然ルニ何事ソ其尤モ努力ヲ要セサル所得ヲ最モ輕課シ之ニ反シテ其最モ之ヲ要スル所得ヲ最モ重課スルトハ嗚呼是レ立法上ノ最大矛盾ニアラサルナキカ。斯ノ如クニシテ止マスンハ國民ニ與フルニ働キ者損ノ感覺ヲ以テセスンハ止マサルヘシ其結果法律ヲ以テ國民ニ懶惰ヲ教ユルコトトナリ國民ノ銳氣ヲ挫折スヘシ豈恐ルヘカラサランヤ。

### 第五節 他國トノ比較

我所得税税率中、目下其最モ重キハ殆ト千分ノ二百二十ニ達シ、而シテ其最モ輕キハ千分ノ二十五ニシテ次ハ千分ノ三十五ナリトス、最輕率ノ適用ヲ受

クルハ、第二ノ所得及第三種ノ最低級ナリト雖モ、前者ハ地方税ノ附加ナク、後者ハ府縣稅及其他公共團體ノ附加稅ヲ課セラルルアルヲ以テ、負擔ノ點ヨリ見ル時ハ、彼レ此レ同日ニ論スヘカラス、但設令附加稅アリトスルモ、千分ノ二十ノ税率ハ左迄重シト云フヘカラス、之ニ反シテ千分ノ二百二十ニ至テハ、設令超過累進率ナリトスルモ決シテ輕シト云フヘカラス、否輕カラサルノミナラス、實ハ大ニ重シ之ニ加フルニ通常附加稅率ノ最高限度タル北海道府縣稅トシテ百分ノ四、其他公共團體稅トシテ百分ノ十五ヲ以テスルトキハ、千分ノ二百六十一、八トナル、其他若シ制限外及許可ヲ要スルト要セサル場合ノ三者ヲ加フルトキハ、其負擔決シテ容易ノ事ニアラサルナリ往昔ノ文字ヲ用ヒンカ、吾人ハ三公七民ノ稱ハ、必スシモ其不適當ナラサルヲ信セスンハアラス、凡ソ地租ノ如キ、一部ノ財產ニ課スル租稅ハ設令重シトスルモ、其他ノ財產ニシテ或ハ之ヲ免レ、或ハ輕キコト之アルヘキヲ以テ免モ角忍フヲ得ヘシト雖モ、所得稅ノ如キハ全ク之ニ反ス、其代リ殆ト總テノ稅源ヲ包括スルヲ以テ第一

要義トスヘシ、然ルニモ拘ラス、第一種ノ所得ハ人格ヲ有スル法人ノ所得トハ云ヒナカラ、其甲ノ最高税率ニ至リテハ千分ノ百三十二達ス、是レ業ニ輕カラストセス、更ニ各般ノ附加税ヲ加フルトキハ、優ニ千分ノ二百ニ庶幾カラシカナ、況ンヤ第三種ノ所得ノ最高率ニ於テヤ。

斯ノ如ク非常ニ重キノ傍大ニ輕キアリ、亦須ラク輕カルヘキニ重キモノアルハ尋常事ト視ルヘカラス、予輩ハ之ヲ論難批評スルニ先チ豫メ外國ニ於ケル一二ノ例ヲ示サントス、是レ必スシモ、範ヲ彼レニ採ラントスルニアラス、庶幾クハ以テ他山ノ石タルヲ希望スルノミ、例ヘハ嘗テ普魯西王國ノ所得税税率ハ大要左ノ如クナリキ近時ゑーへべるひハ其著財政學ノ第十二版ニ於テ論述スル所アルモ、予輩ヲ以テ之ヲ見レハ明瞭ヲ缺クノ憾ナキ能ハス。

所得金額	税額	税率
九百マーク以上千五百マーク未満	六 <sup>マ</sup>	千分六、二
千五百マーク以上千二百マーク未満	九	同七、五

千三百五十マーク以上千五百マーク未満	十六	同十一
千八百マーク以上二千百マーク未満	三十一	同十六
二千七百マーク以上三千マーク未満	五十二	同十九
四千五百マーク以上五千マーク未満	百十八	同二十四
九千五百マーク以上一萬五百マーク未満	三百	同三十
十萬マーク以上	四千	同四十

十萬<sup>マ</sup>以上ノ所得ニ對シテハ其増加スルニ從ヒ夫レ夫レ増加スル所アリト雖モ、我邦ニ於ケルカ如ク急激ノ増加ナシ。而シテ十萬<sup>マ</sup>以上ノ所得ニ對シテハ殆ト五萬圓ニ相當シ、其税率ハ千分ノ四十即チ四分ノミ、之ヲ我千分ノ百八十二比スルトキハ、必スシモ大差ナシトセサルナリ。

翻テ英國ノ所得税ヲ見ルニ、同國ニ於テハ年々歳計ノ狀況ニ應シテ其税率ヲ増減スルヲ以テ、無論茲ニ範疇ヲ求ムヘカラスト雖モ、猶參考ノ爲大要ヲ掲ケンニ、百六十磅以上ノ所得ニ就キ、所得一磅ニ付テ税率ヲ定ルコト左ノ如シ。

一八九六年—九九年	八片
一九〇〇年	一志
一九〇一年	一志二片
一九〇二年	一志三片
一九〇三年	一志一片
一九〇四年—〇六年	一志
一九〇七年—〇八年	一志(乙)九片
一九〇九年—一〇年	一志二片(乙)九片

右ノ表中(乙)トアルハ、千九百七年度ニ Finance Act 第十九條ニ依リ、二千磅以下ノ所得者ニシテ、其所得カ "earned income" ナルトキハ特ニ稅率ヲ低クスル規定ナリ又千九百九年 Finance Act 第六十六條ニ依リ、同年度ヨリ、五千磅以上ノ所得者ニハ、其三千磅ヲ増加スル毎ニ、一磅ニ付六片宛ノ附加稅ヲ課スルコトトナレリ。

是レニ由リテ之ヲ觀レハ、南亞戰爭中最重ノ時ト雖モ千分ノ六十二、五ヲ出テス最低ノ時ハ千分ノ三十三、三強ニ下リタリ、予輩ハ更ニ進テ我所得稅法ニ於ケル各種所得ノ負擔ノ權衡ニ就テ論スル所アラントス。

### 第六節 所得稅ノ收入又ハ負擔

姑ラク所得稅トシテ國民ノ負擔スル所ヲ見ルニ、大正二年度ニ於テハ總計金三千六百九萬五千八百十三圓ナリトス、中ニ就キ所得稅法第三條ノ規定ニ基ク第一種ノ所得稅額ハ、千三百二萬三千六百六十四圓ニシテ其所得全額二億三百十八萬四千九百九十九圓納稅人員一萬六千二百二十人ナリ、第二種ノ所得金額ハ千五百四十六萬六千八百八十三圓ニシテ稅額ハ三十萬二千九百五十八圓而シテ、第三種ノ所得金額ハ八億五千二百六萬六千八百五十八圓ニシテ、其稅額ハ二千二百七十六萬九千九百九十一圓納稅人員九十五萬六千三百四十六人ナリ之ヲ所得稅ノ負擔ノ内容ナリトス。

是レニ由リテ之ヲ觀レハ、各種所得ノ負擔ノ同シカラサルハ截然トシテ明カナリ、先ツ所得稅全體ニ就テ之ヲ見ルニ、其全所得金額ニ對スル稅率ノ平均割合ハ、大低千分ノ五十一、六即チ六分一厘餘ニ當ル是レ決シテ重シト云フヘカラサルナリ之ヲ英獨ノ所得稅ノ負擔ニ比スルモ、決シテ重カラサルノミナラス寧ロ輕キヲ見ル、千九百八年度ニ於ケル普魯西ノ所得稅納稅人員ハ、五百八十七萬六千七百四十一人ニシテ、其稅額ハ二億七千六十八萬八千「まいく」ニシテ、其一人當リハ平均四十六「まいく」即チ大凡我二十三圓ニ該當スヘシ之ヲ我第三種ノ所得者ノ負擔一人當リ二十圓八錢ニ比スレハ恰モ伯仲ノ間ニ在リ更ニ之ヲ同年ニ於ケル同國人口三千七百二十九萬三千四百三十四人ニ割當ル時ハ、其一人當リハ七「まいく」五十二「ぺん」にひ強トナル、而シテ大正二年十二月末ニ於ケル我帝國ノ現住人口ハ五千二百七十一萬一千八百五十三人ナルヲ以テ、所得稅金三千六百九萬五千八百十三圓ノ一人當リハ、僅ニ六十錢一厘ナルニ比スルトキハ、普國民ノ所得稅負擔ハ我ニ比シテ約六倍ニ上ルヘシ、是

レ正ニ記憶スヘキ事實ナリ、而モ國民ハ殆ト舉ツテ其重キヲ訴フルハ果シテ如何ノ理ニ由ルヤ、吾人ハ一見惑ナキ能ハサルナリ。

然レトモ細ニ之ヲ考察スルトキハ、所得稅ノ負擔ノ重キハ之ヲ訴ヘサル者ノ却テ謂レナクシテ、之ヲ訴フル者ノ却テ謂レアルヲ見ル、先ツ第一種ノ所得乙ノ負擔ハ、千分ノ六十二、五即チ六分五厘五毛ナルニ反シ、第三種ノ所得ノ平均負擔ハ千分ノ百十強即チ一割一分三毛ニ當ルナリ、サレハ前者ハヤカテ歐洲諸國ニ於テ謂フ所ノ所得稅ノ最重要點ニ近ツキタリト云フヘク、後者ハ之ニ反シテ學者ノ所謂制限點ニ達セントス、同一租稅ニシテ斯ノ如キ不權衡アリトセハ、假令左程迄ニ重カラストスルモ、其納稅者及擔稅者ノ之ニ對スル感情ノ自ラ平ナラサルハ有リ勝チノ事ニシテ、毫モ無理ナラサルナリ、況ンヤ其懸隔如上ノ如キニ於テヲヤ、又況ンヤ第二ノ所得ハ僅カニ千分ノ二十二ニ過キサ

ルニ於テヲヤ、  
目下我國人ハ朝野ヲ通シテ國富ノ増殖ヲ叫號スルモ實ハ國民ハ比較的貧

弱ニ陥リツアルハ果シテ何ノ理ニ由ルヤ吾人ハ惑ナキ能ハサルナリ、現ニ大正二年十二月ノ國民一人當リハ四十錢一厘ニシテ之ヲ明治四十二年十二月末ニ於ケル一人當リ六十四錢五厘ニ比スルトキハ一人ニ付平均二十四錢四厘少キノ理ナリ、言フ勿レ、二十四錢四厘ノ金額ハ微少ナリト之ヲ五千二百七十有餘人ニ配シ一人平均二十四錢四厘宛リナリト言ハハ吾人ハ決シテ國民ノ爲祝福スルコト能ハサルナリ況ンヤ事ハヨリ大ナルモノアルヲヤ。

### 第七節 大小所得ニ付テノ寬嚴

斯ノ如ク三種ノ所得ニ就キ、個々別々ニ其負擔ヲ論スルモ、尙如上ノ不權衡ヲ現ハス、若シ夫レ三種ノ所得ニ通シテ收入アル所得者ノ負擔ヲ考檢スルトキハ、一層甚シキモノアルヲ見ン、予輩ハ假リニ左ニ二三ノ假定的實例ヲ舉ケテ、其一班ヲ説明セントス、然リ予輩ハ之ヲ稱シテ假定的實例ト云フ、何トナレハ事ハ設令予輩ノ想像ニ基クモ、實際ニ於テハ必スシモアリ得ヘカラサルニ

アラサルカ故ナリ。

試ミニ先ツ壹萬圓ノ第三種ノ所得者アリト想像セヨ、其現行率ハ千分ノ百ナリト雖モ超過累進率ナルヲ以テ之ヲ計算スルトキハ、稅額六百二十圓トナル次ニ同シク一萬圓ノ所得者アリテ其所得ハ第一種法人ノ所得ヨリ成リ、而モ其課稅セラレサル前ニ於テ一萬圓ノ配當ヲ受クルトシ、且甲乙各五千圓ヨリ成ルト假定センニ、甲ノ五千圓ニ對スル稅率ハ千分ノ四十乙ノ同稅率ハ千分ノ六十二、五ナルヲ以テ、此所得稅額ハ各二百圓及三百十二圓五十錢ニシテ合計五百十二圓五十錢トナルヘシ、故ニ後ノ場合ト前ノ場合トヲ比較スルトキハ、其所得ハ等シク一萬圓ナルモ、稅額ニ至リテハ前後百〇七圓五十錢ノ差アルヲ見ルヘシ、然ルニ若シ一萬圓ノ所得者ニシテ、其五千圓ハ國債ノ利子ヨリ成リ、他ノ五千圓ハ第三種ノ所得ヨリナルトセハ、後ノ五千圓ニ對シテ超過累進率ニ依リ最高唯千分ノ五十五ノミヲ課セラルルカ故ニ、其負擔ハ三百五圓ニ止マルナリ、予輩ハ尙課稅ノ目的物タル所得金額ヲ小ニシ、姑ラク三千圓

ニ就テ更ニ考檢スルトキハ、更ニ一層奇ナルモノアルヲ知ルニ至ラン。

茲ニ三千圓ノ第三種ノ所得者アリト想像セヨ、其稅額ハ最高千分ノ五十五ナルカ故ニ超過累進率ニ依リ稅額ハ百〇五圓ナリ、又第一種ノ甲乙所得トシテ各一千五百圓ヲ得ル三千圓ノ所得者アリトセヨ、甲ノ稅率ハ千分ノ四十ナルカ故ニ其稅額ハ六十圓乙ノ稅率ハ同六十二・五ナルヲ以テ其負擔ハ九十三圓七十五錢ニシテ合計百五十三圓七十五錢トナルヘシ。若シ此場合ニ於テ、乙ノ稅率タル千分ノ六十二・五ヲ稅ストセハ、其稅額ハ飛テ百八十七圓五十錢トナルヲ以テ、以上三千圓ノ所得者ノ負擔ハ前者ニ比シ三十三圓七十五錢ヲ加フヘシ而シテ、十萬圓以上ノ所得アル會社ヨリシテ、千五百圓又ハ三千圓ノ配當ヲ得ル所得者ハ決シテ稀有ノ事實ニアラサルナリ。次ニ第二種ノ所得トシテ千五百圓第三種ノ所得千五百圓ヲ得ル三千圓ノ所得者ハ、唯後ノ一千五百圓ニ對シテ千分ノ三十五ヲ稅セラルルノミナルヲ以テ、其負擔ハ僅ニ五十二圓五十錢ニ止マルノ理ナリ。

是レニ由リテ之ヲ觀レハ、等シク三千圓ノ所得者ニシテ、唯其財源ヲ異ニスルニ由リ或ハ百〇五圓ヲ負ヒ、或ハ百五十三圓七十五錢ヲ擔ヒ或ハ百八十七圓五十錢ヲ納メ、或ハ五十二圓五十錢ヲ仕拂フコトトナルナリ。而シテ斯カル假定ハ之ヲ千萬遍モ繰返シ得ヘキト同時ニ、實際ニ於テモ亦數百千萬ノ異リタル所得者アルハ明カナリ。同一租稅ニテアリナカラ、而モ同額ノ所得ニシテ斯ノ如キ千差萬別ノ負擔ヲ餘儀ナクセラルルトハ、豈一奇ト謂ハサルヘケンヤ。現行稅制ニシテ斯ノ如シ改正前ノ稅率ノ結果ハ尙一層著シキモノアルヲ見タリ。然リ而シテ予輩ハ尙大ニ論スヘキモノアルヲ認ム、既ニ論述セシ如ク所得ハ其財源ノ種類性質ニ由リ、大ニ其負擔力ヲ異ニスルヲ以テ、此差異ヨリ生スル稅額ノ多少ハ固ヨリ不可ナカルヘシ、當ニ不可ナキノミナラス寧ロ是レ却テ望ムヘキノ事ナリト雖モ、シカモ事茲ニ出テスシテ唯課稅ノ便利ニ因由セシ外、他ニ理由ナキ形式上ノ所得ノ種類及區別ノ爲、納稅者ノ負擔ヲシテ支離滅裂ナラシメ、云ハハ納稅者ノ提供力ト沒交渉ニシテ負擔ノ増減ヲ惹起

スル原因、因又ハ規定ヲ税法中ニ存スルハ餘リニオ目出度コトニアラスヤ、吾人ハ之ヲシモ尙忍フヘシト云フカ。

加之以上説ク所ニ依リテ之ヲ觀ルニ、一萬圓未滿ノ第三種所得者ハ、第一種甲ノ所得者ニ比シテ輕率ヲ課セラルルノ理ナリ、之ヲ反言スレハ後者ハ設令如何ナル少額ノ所得ニ對シテモ、前者ヨリハ重率ヲ課セラルルコトトナリ、又第一種乙ノ所得者ハ若シ其之ヲ得ル法人ノ所得ニシテ五千圓未滿ナルトキハ、其所得金額ハ設令如何ニ尠少ナルモ、尙三千圓以下ノ第三種ノ所得者ヨリハ絶對的ニ重率ヲ負擔スル譯ナリ、是レニ由リテ之ヲ觀レハ第一種ノ小所得者ハ或ル程度迄、第三種ノ所得者ニ比シテ重稅ヲ負ヒ、之ニ反シテ彼ノ大所得者ハ此レニ比シテ輕稅ヲ擔フノ理ナリ、之カ爲第一種所得者全體ノ平均負擔ハ、千分ノ八三・八六ヲ算シ又所得稅ノ平均負擔率ハ千分ノ九八・六四ナルニ反シ、第三種ノ所得者ノ平均負擔率ハ千分ノ一〇三・七ト云ヘル奇現象ヲ呈スルヲ見ン、千分ノ一〇三・七トハ第一種ノ所得甲七百圓ヲ超ユルヨリ、一萬五千圓

ニ至ル稅率千分ノ百十二比シテ稍輕キ所アルノミ、若シ夫レ第一種ノ所得ニ至リテハカカル重率ハ甚タ少シ。

果シテ然リトセハ、現行所得稅法第一種ノ所得ニアリテハ小所得者ニ嚴ニシテ大所得者ニ緩ナルヘク、第三種ノ所得ニアリテハ大ニ小所得者ニ緩ニシテ、大所得者ニ嚴ナリト云フヲ得ヘシ、二者正ニ相反シテ、其主義ノ上ニ於テ相矛盾スルノ跡アルハ掩フヘカラサルナリ。

### 第八節 稅率ノ輕重肯綮ヲ失フ

第一種、第二種及第三種所得内ニ於ケル負擔ノ輕重ハ、大體其稅率ニ依リテ定ルヲ以テ、大抵該稅率表ニ據リ判斷シテ可ナリト雖モ、予輩ハ大體ニ於テ其大小所得ニ就キ、累進ノ餘リニ急遽ナルト同時ニ、高低ノ懸隔ノ餘リニ甚シキヲ認ム、殊ニ第三種ノ所得ニ就テ其甚シキモノアルヲ信セントス。

第一種ノ所得ノ稅率ハ、千分ノ四十二始マリテ同百三十二終ル、是レヲ以テ



其高低ノ懸隔餘ニ甚シト云フコト能ハサルヘキモ、普通所得稅トシテハ千分ノ四十八必スシモ高シト云フヘカラス、又千分ノ百三十八、必スシモ低シト云フヘカラス。シカモ是レ猶忍フヘシ、唯所得金額五千圓未滿ヨリ十萬圓以上ニ至ル迄階級ヲ分ツコト僅カニ十級ニ過キサルカ故ニ、各階級間ノ所得額ノ懸隔餘リニ多大ナルノミナラス、之ニ伴フ稅率ノ等差餘リニ大ナルヲ覺ユ、是レ舊所得稅法ニ於テ殊ニ甚シトス。是レヲ以テ各階級ノ間ニ於テ所得金額ノ等差僅ニ一圓或ハ五十錢ノ微ナルニ拘ラス、唯階級ヲ異ニスルノ理由ニ依リ、稅額ニ至リテハ大ナル懸階ヲ生スルヲ免レサルナリ。此弊タル、第三種ノ所得ニ關シテ殊ニ甚シトナス。何トナレハ其最低率ハ千分ノ二十五ナルニ反シ、最高率ハ千分ノ二百二十ニ上ルヲ以テナリ、予輩ヲ以テ之ヲ見ルニ、千分ノ二十五ハ其餘リニ低キニ失スルヲ見、千分ノ二百二十八其餘リニ高キニ過クルヲ思ハスンハアラス、又三百圓以上十萬圓以下ニ至ル迄階級ヲ設クルコト十三級ニ過キサルカ故ニ、各階級間ニ於テ稅率ノ突飛スルコトハ、第一種ノ所得ニ比

シテ更ニ甚シキヲ見ル何トナレハ最高及最低率ハ前者ニ比シテヨリ大ナレハナリ、今ヤ稅率ヲ改メテ超過累進率ヲ課スルカ故ニ稍如上ノ欠點ヲ改ムルコトヲ得タリトスルモ尙多少ノ缺點ナキヲ得サルヘシ舊稅率ニ從ヘハ以上ノ所得金額ニ付キ唯僅カニ一圓ノ差アルカ爲、其負擔ノ上ニ於テハ直チニ三千三百五十圓餘ノ差異ヲ生シ、如何ニモ誕ラシク思ハルル程ナリキ而モ其信ナルヲ如何ニセン、今ヤ幸ニシテ改正セラレタリト雖モ所得ノ階級及稅率ニ關シテハ尙改正ノ餘地ナシトセンヤ。

負擔ノ不釣合ヲ知ラント欲セハ、所謂所得ノ成形ト其之ニ伴フ稅額トヲ比較スルニ若クハナシ、第三種所得ノ最高級タル十萬圓以上ノ所得者ハ(大正二年度)僅カニ十七人ニシテ、其所得金額ハ亦百九十五萬二千四百十三圓ニ過キス、而モ其稅額ハ三十九萬七千三百十八圓ニ上ル而シテ二萬圓以上三萬圓以下ノ所得者ハ六百四十人ニシテ、其所得金額ハ九百〇七萬三千二百七十四圓稅額百五萬二千四百九十三圓ニ達ス是レニ由リテ之ヲ觀レハ、後ノ場合ハ前

ノ場合ニ比シ所得者ノ増加スルコト約三十八倍ニシテ、所得金額ハ四倍強ナルモ、税額ハ二、六四倍ノ増加ヲ呈スルニ過キス、サレハ十萬圓以上ノ所得者ハ二萬圓以上三萬圓以下ノ所得者ニ比シテ、均シク其所得一圓ニ就テモヤカテ二倍ノ擔稅力アリト看做ササルヘカラス、兩者ノ擔稅力ハ果シテ斯ノ如キ懸隔アルヲ容ルヘキヤ、吾人ハ大ニ疑ナキ能ハサルナリ。

是レヲ以テ所得ノ階級ノ下ルニ從ヒ人員及所得金額ハ漸次著シキ速度ヲ以テ増加スルモ、其税額ニ至テハ左迄ニ増加セサルナリ、是レ現行所得稅法ノ規程上怪ムヘキノ數ニアラスト雖モ、若シ夫レ其統計上ノ數字ニ就テ之ヲ觀察センカ、一見直チニ其奇ナルニ驚カサルヲ得サルヘシ。

舊稅率及階級ノ規定ハ現行率ニ比シテ國民ノ配分ヲヨク明カニ顯スヲ以テ姑ラク舊稅率實行ノ結果ヲ示サンニ蓋シ明治四十二年度ノ所得稅中ソノ上リ高ノ最モ多キハ、五百圓以上千圓以下ノ階級ナリ、其税額ハ四百五十萬六千八百六十五圓四十七錢ニシテ其課稅所得金額ハ一億七千九百萬八千七百

五十六圓四十三錢ナリキ、之ニ次クハ千圓以上二千圓以下ノ階級ニシテ、税額四百十二萬一千四百六十九圓四十八錢、其所得金額一億一千九百五十萬三千三百四十四圓四十四錢ナリ、更ニ之ニ次クハ最下級タル三百圓以上五百圓以下ノ所得ニシテ、税額三百九十一萬〇〇五十五圓八十四錢、所得金額一億九千五百五十七萬七千七百九十五圓九十八錢ナリ、是レニ由リテ之ヲ觀レハ本邦所得稅法ニ依ル所得金額ノ最モ多キハ、其最下級タル三百圓ヨリ五百圓迄ノ所得ニシテ、税額ノ最多ナルハ、直チニ其上ニ接スル五百圓ヨリ千圓迄ノ所得ナリトス、吾人ハ之ニ頼リテ以テ我國ニ於ケル所得ノ成形及富ノ分配ニ關シテ、其之ヲ解釋スル秘鑰ヲ得タリト云フヲ得ヘシ、若シ我國富ニシテ今少シク増殖シタランニハ、カカル最小所得ニ於テ税額及所得金額ノ多カルヘキ筈ナク、三千圓乃至四五千圓ノ所得ニ於テ最多ナルヘキノ理ナリ、英國ノ如キハ一萬圓ニ達スル所得ニ於テ最モ多シト云フ而シテ如上ノ最多額ヲ占ムル階級ニ對シテハ、比較的重率ヲ課スルカ故ニ其結果ハ必スシモ賭難キニアラサルナリ。

第九節 各種ノ財源ノ賦課

予輩ハ更ニ進ンテ所得ノ根源ニ溯リテ以テ其負擔ノ關係ヲ論セントス大正二年度ニ於ケル第三種ノ總所得額七億七千五百四十二萬五千四百六十二圓ヲ財源別ニスルトキハ大要左ノ如シ。

田畑	二二四 五九五 〇八七	百分比例 三二、三六
宅地貸附及貸家	六九 二六九 四四四	九、九八
山林	一四 九八三 六一六	二、一六
山野其他	二七九一 八三六	〇、四〇
鑛業	一六一九 一一六	〇、二三
牧養業及採取業	八七一四 八一二	一、四〇
貸金預金ノ利子	三四 一〇〇 四二四	四、九一
俸給及給與	一〇一 一九六 七三三	一、四五八
諸給與	一〇 二七〇 四四〇	一、四八

商業	一五〇 五七二 九〇一	二一、七〇
工業	三八 九九七 二三一	五、六二
庶業	一八 九八八 〇二五	二、七四
勞力	一 四五四 四四四	〇、二一
其他ノ所得	一五 五〇一 九五三	二、二三
總計	六九三 〇五六 〇六二 一〇〇、〇〇	

之ヲ明治四十二年度ニ比較スルニ、勞力ニ四百三十三萬三千六百七十一圓ヲ増加セルノミ、中ニ就キ田畑ニ基ク増加ハ百四十九萬七千三百三十四圓俸給及給與勞力ニ基クモノ、却テ五百八十一萬三千八百十六圓ヲ減シ宅地及家屋貸附ニ由ルモノ一千五百五十五萬四千二百九十圓ヲ増加シ、商業ニ六百二萬八千七百四十六圓ノ増加ヲ見タリ、以テ所得ノ成形ノ一斑ヲ察スルニ足ル。予輩ハ以上ノ統計ニ依リテ以テ、大體我國ニ於ケル所得ノ成形ト且ハ富源ノ存スル所ヲ窺フヲ得ヘシ、尤モ此外ニ第一種ト第二種ノ所得存スルアルヲ以テ第三種ノ所得中ニ於ケル商工業ノ所得額ハ意外ニ少シ、是レ大規模ノ商

現行稅法ニ依ル各種所得ノ負擔 各種ノ財源ノ賦課

業殊ニ工業ハ主トシテ會社組織ニ成ルヲ以テナリ。暫ク第一種ノ所得額二億三百十八萬四千九百九十九圓ヲ以テ工業所得ト看做ストキハ、合計二億五千四百七十五萬七千七百圓トナル、商業所得ノ一億五千五百七十七萬二千九百餘圓ニ對シテ、左迄ノ徑庭ナシ、而モ其中ニ商業所得ノ存スルハ言フヲ俟タス、況ンヤ第二種ノ所得トシテ千五百四十六萬六千八百八十三圓ノ之ニ加フヘキモノアルニ於テヲヤ是レ我國民經濟ノ組織上、特ニ注意ヲ拂フヘキ點ナリトス。

以上ノ所得中、田畑、宅地、山林、原野竝ニ牧養業及採取業ハ地租トシテ大正二年一月一日ノ現計ニ依ルトキハ七千五百六十三萬二千五百五十七圓ノ國稅ヲ負ヒ、之ニ加フルニ大正元年度土地ノ附加稅ハ千七百七十七萬四千七百六十一圓ノ地方稅ヲ擔ヘリ、家屋ノ所得ハ宅地ニ算入セラレ居ルヲ以テ今其幾許ナルヤヲ明知シ難キモ、府縣戶數割、市町村戶別割及家屋稅ヲ合セ算スル時ハ合計八千二百二十三萬八百二十圓トナル、中ニ就キ戶數割戶別割ハ其實土地財產、例ヘハ地價ヲ標準トシテ等級ヲ設ケ、以テ各戶ニ割リ當ルヲ以テ其實地

租ノ特別附加稅タル傾ナキニ非ス。故ニ其幾許カ、果シテ純然タル家屋ノ負擔ニ歸スルヤハ茲ニ明知シ難シト雖モ、其大部分ハ戶數及戶別割ヨリ成ト云フモ大過ナシ、是レ予輩カ既ニ家屋ノ負擔ハ比較的ニ輕シト云ヒシ所以ニシテ、今ヤ地方ニ於テモ別莊其他諸種ノ建築物ノ造築セララルルニ當リ、徒ラニ舊時ノ戶數割ノミヲ以テ満足スヘカラサルナリ、而シテ家屋ノ負擔ニ關シ、敢テ一言セサルヘカラサルモノアル所以ハ他ナシ、現行所得稅法ハ其所有家屋ニ居住スル者モ借家人モ同様ニ課稅スルノ一事ナリトス。故ニ借家人ハ其仕拂フ家賃ヲ構成スル所ノ所得ニ對シテ所得稅ヲ負擔スルト共ニ其家屋賃貸者ハ又其收ムル所ノ家賃ニ對シテ、所得稅ヲ負擔スル場合少カラサルヘシ、若シ彼等ノ所得ニシテ、四百圓以上ニ達ストセハ是レ明ニ二重課稅ニ非スシテ何ソヤ、況ンヤ所有家屋ニ住居スル者ハ其家屋ノ所得ニ對シテハ所得稅ヲ負ハサルニ反シ、借家人ハ却テ其借家料ニ對シテ之ヲ負フノ不釣合アルニ於テヲヤ。次ニ商工業者ハ大體其所得タル三億九千二百七十五萬三千三百三十一圓

(第一種所得額及商工業所得合計)ニ對シ、第一種所得稅トシテ一千三百二萬三千六百六十四圓ヲ負ヒ、國稅トシテノ營業稅二千七百八十二萬三千四百七十二圓ヲ擔ヒ、地方稅トシテ國稅附加稅、府縣營業稅其他各種ノ附加稅等合總シテ三千五百四十五萬六千九百三十二圓ヲ主トシテ之ニ加フルニ各種ノ租稅ヲ分擔スル次第ナリ、尤モ第一種ニ屬セサル商工業所得一億八千九百五十七萬百三十二圓ハ、田畑ノ所得二億二千四百五十九萬五千八十七圓及其他ノ所得ト共ニ、第三種ノ所得稅二千二百七十六萬九千九百九十一圓ヲ分擔スル譯ナリ。土地家屋營業資本等ト等シク、收益ノ根源タル資本ノ利子ニ就テハ、第二種ノ所得稅トシテ三十七萬二千九百五十八圓ヲ存スルノ外、第三種所得中貸金預金ノ利子三千四百十萬三千四百二十四圓ニ對シ、亦第三種ノ所得稅ヲ分擔スルノミニシテ、凡ソ十六億圓ノ内國債ノ利子六七千萬圓ハ、先ツ以テ國稅地方稅兩ナカラ之ヲ免ルル次第ナリトス。

其他所得トシテハ設令之ナキモ、尙稅源トシテハ認ムルコトヲ得ヘク、而シ

テ其所有者ハ擔稅力ニ富メル場合少カラス、例ヘハ諸般ノ嗜好品又ハ美術品等ノ如シ、是等ノ有體財產ニ對シテハ勿論所得稅ヲ課スルコト能ハスト雖モ、而モ收益稅ヲ課スルノ餘地ナシト云フヲ得サルヘシ。人若シ地租カ年ノ豊凶ニ由リテ増減セサル所以(地租條例舊第二條)ノ理ニ思ヒ及ハハ、蓋シ思ヒ半ハニ過クルモノアラシカ、若シ又收益稅ヲ以テ之ヲ稅スルコトカ果シテ不可ナラハ、資產稅、相續稅、印紙稅等ニ賴ルモ可ナリ、況ンヤ是等ノ財產ハ元ト不生産的奢侈品タルニ於テヤ。

## 第十節 結論

以上說ク所ニ依リテ觀レハ、現行稅法ハ一般ニ全體ノ上ヨリ之ヲ判斷スルモ、又所得稅法ノミニ就テ之ヲ察スルモ、決シテ負擔ノ公平ヲ得タルモノト云フヘカラス、試ミニ其著シキ點ヲ左ニ掲ケンカナ。

一、大體各種ノ稅源及所得ニ於テ負擔ノ權衡ヲ得サルコト。

- 二、所得稅ノ稅率及所得階級ノ分ケ方實際ノ經濟情態ニ適合セサルコト。
  - 三、最低及最高率ノ懸隔餘リニ甚シキコト。
  - 四、第一種及第三種所得ニ於ケル稅率ノ規程ニ關シテハ其主義矛盾シ居ルコト。
  - 五、所得ヲ三種ニ分ツノ結果設令同額ノ所得者ト雖モ、其所得財源ヲ異ニスルカ爲其負擔ニ甚シキ輕重ノ差ヲ生スルコト
  - 六、彼レヤ此レヤノ結果兎モ角自ラ勤勉活動シテ以テ所得スル者ニ重ク晏然トシテ自家ノ財產ヲ抱キ配當若クハ利子ニ賴リテ以テ所得スル者ニ輕シ。
- 凡ソ國富ノ増殖ヲ企圖シ、若クハ國民經濟ノ發展ヲ策セントスル者ハ宜シク茲ニ注意スル所アリテ可ナリ。現行稅法ハ動モスレハ生産的財源ヲ捕打シテ却テ消費ヲ庇ハントスル傾アリ。否設令消費ヲ稅スルモ生活ノ必要費ヲ稅シテ、却テ贅澤費ヲ見遁サントスル傾ナカラスヤ、故ニ予輩ハ決シテ遠シト云

ハス、近キ將來ニ於テ須ラク經濟組織及其情態ノ變遷ニ應シテ以テ、根本的ニ租稅制度ヲ改革スル必要アルヲ認ム、序ナカラニ一言スルコト斯ノ如シ。

## 第五款 公經濟的官業收入論

## 第二十六章 官公有山林論

## 第一節 總論

森林業ハ農業漁業ト等シク原始生産ニ屬セシカ其初ニ當リテヤ、英國ニ於ケルカ如ク山林ハ供材ノ場所ト謂ハンヨリモ寧ロ遊獵地トシテ、其使用ハ君主若クハ封建諸侯ノ特權ニ屬シ人民ノ之ニ與カルヲ許ササリキ、然カルニ其後人口ノ増殖ニ伴ヒ原野稍開ケ山林漸ク減スルニ及ンテ、殖林業ハ農業ト同シク一種ノ生産業トナリ、茲ニ山林ヲ以テ國有又ハ公有タラシムヘキカ、將タ民有タラシムヘキカノ問題ヲ生スルニ至レリ。

十八世紀ノ初頭以來耕地ノ増加ニ伴ヒテ森林地積ノ減少ヲ見ルヤ、當時ノ學者政治家ハ大ニ其前途ヲ憂慮シ、此趨向ヲ以テ進マンカ、一方ニ於テハ水源

爲ニ涸渴シテ氣候ニ變化ヲ起スニ至ルヘク、他方ニ於テハ用材薪炭ノ缺乏ヲ來シ延ヒテ木材ノ騰貴ヲ促スモノトナシ、大ニ森林ノ國有ヲ鼓吹シ、殖林保存ノ必要ヲ主張シタリ。サレト斯ノ如キハ未タ以テ山林國有ノ論據トナスニ足ラス、惟フニ水量竝ニ氣候ノ順和上ニ於ケル森林ノ關係ハ極メテ緊切ナルモノアリ夫ノ用材薪炭ノ缺乏及騰貴ニ關シテハ石炭等一層優良ナル代用品ノ發現ヲ見タレハ、此點ニ於ケル殖林ノ必要ハ昔時ノ如ク絶對的ナラスト謂フヘク、假令木材ニシテ騰貴スルコトアリトセンモ、需要ノ緊切ナル所供給ノ之ニ隨伴スルハ經濟社會ノ通態ナリ。サレハ之ヲ民業ニ委スルモ必スシモ不可ナリト謂フヲ得ス、斯ノ如ク觀シ來レハ森林國有ノ論據ハ之ヲ他ノ點ニ求メサルヘカラサルカ如シ而シテ現今山林ヲ國有トナスハ國民經濟上ノ根據ニ基クモノニシテ其主要ナル點ヲ舉クレハ左ノ如シ。

第一、水利ヲ整ヘ土壤ノ崩壞ヲ防クコト、山林ノ濫伐ハ一方ニ於テ水源ヲ涸渴セシムルト共ニ、洪水ノ患ヒヲ多カラシメ、他方ニ於テ山岳ノ崩壞ヲ來シ、

水路ヲ閉塞スルコト往々ニシテ是レアリ。而シテ其關係スル所ハ決シテ一方ノ利害ノミニ止ラサルナリ。故ニ斯ル重大ナル關係ヲ有スル山林ハ一私人ノ所有ニ屬セシムルコトナク、宜シク之ヲ國有若クハ公有トナシ、其保護ヲ圖ルヘキハ經濟政策上當ニ然ルヘキ所ナリトス。

第二、地勢峻峻ニシテ殊ニ山林ニ適當ナル土地ハ之ヲ國有トナスニ如カス。村落ニ近ク採伐容易ナル山林ニアリテハ之ヲ民有トナシ、人民ヲシテ建築用材薪炭等ヲ之ニ求メシムルヲ以テ經濟上且ハ政策上却テ有利トスルモ、深山幽谷ニアル森林ニシテ地勢峻峻ナルモノニ至リテハ殖林採伐共ニ容易ナラス。隨テ又之ヲ人民ノ日常生活ニ利用スルコト難シ、故ニ資本乏シキ私人ヲシテ此等ノ山林ヲ所有セシムルヨリハ、寧ロ資本實力ニ富ム政府ニ於テ之ヲ所有スルヲ以テ便利且策ノ得タルモノトナス。

第三、山林業ハ特殊ノ性質ヲ有ス、山林ノ經營ハ一朝一夕ニシテ其效ヲ收メ得ヘキ性質ノモノニ非ス、短キモ十四五年、永キハ七八十年以上ノ期間ヲ待

タサルヘカラス。斯ノ如キハ眼前ノ利益ヲ目的トシ、資本ノ回收迅速ナルヲ貴フ一個私人ノ事業トシテハ不適當ナリ、故ニ山林ハ永遠ノ生命ヲ有スル國家ニ於テ之ヲ所有シ、經營スルニ於テ、始テ其完キ效果ヲ收ムルコトヲ得。

第四、森林ノ收益ハ一般經濟社會ノ進歩ニ因ルコト多シ。木材價格ノ騰貴ハ山林改良ノ結果ニ非スシテ、運輸ノ便開ケ、製作ノ法進ミ、爲ニ木材ノ需要ヲ増進セル結果ニ外ナラス、サレハ之ヲ一私人ノ功ニ歸スヘキモノニ非ス、已ニ森林ノ收益ニシテ所有者ノ力ニ依ラス、一般社會進歩ノ結果ナリトセハ、政治道德上ヨリスルモ一個人ヲシテ之ヲ私セシムルハ、一般民衆ノ利害幸福ヲ目的トスル國家ヲシテ之ヲ所有セシムルノ公平ナルニ如カサルナリ。

第五、森林ハ氣候ヲ調和ス、氣候及天候ヲシテ適度ノ乾燥ヲ保タシメ、且ハ寒温ヲ調節スル上ニ於テ森林ノ效用至大ナルモノアリ。殊ニ風害ヲ防止又ハ制止スルハ曠野ノ開拓上世人ノ耳目ニ著シキ所ナリ、風防林ノ制度ノ必要ナル所以モ茲ニ存ス。



之ニ反シ一方ニハ又森林國有ヲ非難スル理由ナキニ非ス之ヲ國有トナスニ於テハ其經營劃一ニ流レ各地方ノ事情ニ剴切ナル經營ヲナス能ハス且微細ノ注意ヲナスヲ怠ルト謂フハ反對論ノ一ニシテ山林國有ノ收益ハ民有ノ收益ニ及ハストナスハ其二ナリ第一ノ非難ニ關シテハ經營法ノ改善ニ依テ其缺點ヲ除去スルコトヲ得ヘク而シテ第二ハまんちゑすた一派ノ經濟學者ニ依テ主張セラルル所ナルモ森林業ニ付テハ必スシモ適切ノ非難ナリト謂フヲ得ス由來森林業ナルモノハ資本勞力ニ待ツヨリモ天然力ニ待ツコト遙カニ多キモノナリ故ニ假令不注意怠慢ニ陥リ易シトノ譏アル政府ヲシテ之ヲ經營セシムルモ必スシモ大ナル不都合ナキノミナラス時トシテハ之ヲ國有トナス方却テ利益ナルコトアリ他ナシ山林ハ一定ノ期間ヲ經過スル後ニ於テ其收益最モ多ク而シテ其期間ハ普通七八十年ノ長期ニ亘ルヲ以テ一人ノ事業トシテハ餘リニ長期ニ過クルノ嫌アレハナリ

斯ノ如ク山林國有說ニ對スル反對論ハ其根據有力ナラスシテ未タ以テ國

有論ヲ動カスニ足ラス尤モ茲ニ予輩ノ國有ト稱スルハ總テノ山林ヲ以テ國有ニ歸セシムヘシト言フニアラス民有必スシモ不可ナラサルニアラスト雖モ若シ單ニ學理上後者ノ利害得失ヲ計較スルトキハ寧ロ前者ニ與ミセサルヲ得サルナリ況ンヤ頻年風水害連リニ至リ水源ノ涵養及水害豫防ノ必要今日ノ如ク急ナルモノアラサルニ於テヲヤ故ニ左ノ場合ニハ殊ニ山林ノ國有ヲ以テ可ナリトス。

第一、保存林若クハ保護林設定ノ場合。

第二、國家ノ事務ヲ行フニ必要ナル場合例ヘハ製艦ニ必要ナル木材ヲ培養スル場合ノ如シ。

第三、私人ニ損害ヲ與フルコトナク而モ政府ニ於テ之ヲ管理スル方却テ利益アル場合。

## 第二節 官有林ノ經營及管理

官有林ノ經營方針ハ須ラク經濟主義ニ由リテ、可成多クノ收益ヲ得ルヲ以テ其目的トセサルヘカラス。從來學者ノ主張ニ係ル附近ノ住民ニ對シ善良安價ニシテ且充分ナル木材ヲ供給スルヲ目的トスル原則ノ如キハ必スシモ深ク考慮スルニ足ラス。是レ一部ノ人民ニ特種ノ利益ヲ與フルモノニシテ不公平ノ措置タルヲ免レサレハナリ、又山林ノ保護厚キニ過キ採伐ノ期ヲ失スルカ如キハ管ニ歳入ヲ減シ經費ヲ増加スルノミナラス、無用ノ山林ヲ増殖スルノ弊ヲ醸成スルニ至ルモノナリ。

官有林ノ經營上經濟主義ヲ遂行セント欲セハ之ヲ政府自身ニ於テ管理スルヲ以テ策ノ最モ得タルモノトナス、是レ山林國有ト同一ノ理由ニ基クモノニシテ、直營ト稱スルモノ即チ是レナリ。此外一時貸付世襲貸下ノ法ナキニ非サルモソハ山林國有ノ主旨ニ反シ、且ヤ實行難ノ隨伴スルヲ免レス。森林經營ノ方法タル國情ニ由リテ異同アルヲ免レスト雖モ其管理上多少技術ヲ必要トスルノ故ヲ以テ、各國皆特別ノ行政官衙ヲ設ケテ之ニ當ラシムルヲ常トス。

然リ而シテ森林行政事務ハ大抵之ヲ分チテ左ノ六種トス。

第一、樹木ノ培養、例ヘハ植付ヲナシ、枝ヲ剪リ、害虫ヲ驅除シ、惡木ヲ除去シ良木ヲ成育セシムルカ如キコトニシテ、普通勞働者又ハ最下級ノ官吏ヲシテ之ヲ行ハシメ、専門ノ技師之カ監督ニ任ス。

第二、森林ノ保護、天災ニ對スル保護ト、人爲ニ對スル保護トノ二種アリ。後者ハ野火盜伐等ニ關スルモノニシテ警察的事務ニ屬シ、前者ハ技術ニ關スル研究ヲ要シ獨リ警察ノ力ニ依頼スルヲ得ス。うゆるてんべるひ王國ノ如ク山林ヲ酷愛スル國ニアリテハ軍隊ノ組織ニ倣ヒテ山林官ノ制度ヲ設ク。

第三、森林ノ監理、是レ技術ニ關スルモノニ非スシテ、純然タル山林行政事務タリ。監理制度ニ二種アリ。一ハ中央集權ノ制ニシテ、他ハ地方分權ナリ。佛境ハ前者ニ屬シ獨普ハ後者ニ屬ス。我國ノ制ハ大林區ノ下ニ小林區アリテ其監督ニ服ス、蓋シ前者ノ例ニ則リシモノナリ。

第四、地方的官廳、山林署ト中央官廳トノ中間ニ介在シテ山林ニ關スル

行政ヲ掌リ、地方行政廳ノ一部ヲナス。我國ニ於テハ之ニ相當スル官衙ヲ缺クモ、山林ノ經營未タ進歩セサル時ニアリテハ左マテ必要ニ非ス。

第五、中央官廳、普墺二國ニアリテハ農務省内ニ一局ヲ設ケテ最高統轄官廳ニ充テ、一切ノ官有財産ヲ管理セシムルモ、佛國ニアリテハ大藏省ニ於テ之ヲ統轄ス。我國ニ於テハ農商務省内ニ山林局アリテ山林ニ關スル行政事務ヲ執行シ全ク官有財産ヲ兼理セス。

第六、山林會計、森林官ヲシテ之ニ當ラシムルトキハ弊害百出スルノ恐アルヲ以テ、普國ノ如キハ森林ノ會計事務ハ一切收稅部ノ官吏ニ依托シ、森林官ハ技術及山林ニ關スル行政事務ノミヲ專掌ス、蓋シ至當ノ制度ナリ。

### 第三節 森林培養

經濟主義ニ基ク山林ノ培養經營ニ關スル主要事務ニ四種アリ。

第一、山林ノ境界ヲ正スコト 殖林ノ法ハ先ツ山林ノ位置ヲ決シ境界ヲ

定メ、其面積地勢ヲ精計考察スルニ始マル、是レ森林經營ノ第一義ナルカ、深山幽谷ニ富ム我國ノ森林ハ山岳ノ峻峻ナルト、地積ノ廣大ナルトニヨリ、殆ト其境界ヲ正シ難キ場合アリ。從テ培養困難ニシテ又盜伐ノ弊ヲ免ルル能ハス。

第二、樹木ノ成長ヲ計ルコト 森林ノ培養ヲシテ完全ナラシメント欲セハ、不斷樹木表ヲ調製シテ次テ年々樹木成長ノ度ヲ計リ或ハ年齢ニヨリテ其成長ニ差アルコトヲ考覈スヘシ。夫ノ山林管理ニ付テ收益最モ多キ採伐時期ヲ決スルカ如キハ、一ニ斯ル樹木表ノ調製ニ俟タサルヘカラサルナリ。

第三、採伐方法ノ決定 年々間斷ナク山林ヨリ收入ヲ得ント欲セハ、樹木ノ年齢ニヨリテ森林ヲ數十區ニ分テ、收益最モ多キ時期ニ達シタル年齢ノ樹木ヨリ順次採伐ヲ始サルヘカラス。一時ノ收入ヲ得ンカ爲ニ全森林ヲ伐リ盡スカ如キコトアラハ、以後數十年間全ク收入ナクシテ、培養費ノ爲ニ年々ノ支出ヲ爲ササルヘカラサルニ至ラン。

第四、木材ノ處分方法 現今ニ於テハ官有林ノ樹木ハ之ヲ賣却スルヲ以

テ原則トナス、假令之ヲ政府ノ用ニ供スル場合ト雖モ相當ノ對價ヲ徵收シ收支ノ會計ヲ明カニスルコト必要ナリ。凡テ森林ノ收益ヲシテ多カラシメント欲セハ一方ニ於テ建築用、器具用材ヲ培養スルト同時ニ、他方ニ於テ道路ヲ修メ運送ノ便ヲ圖ラサルヘカラス。現今我森林經營ノ第一策ハ運輸ノ便ヲ講スルニアリトス。

森林經營カ經濟主義ニ基ク結果トシテ其拂下ハ現今一ニ競賣ニヨリテ之ヲ行フヲ常トス。往時ハ山林附近ノ住民ヲシテ年々一定ノ金額ヲ納付セシムルト同時ニ、樹木成長ノ後之ヲ採伐スルノ權ヲ與ヘ、一見山林小作法ニ類スル制ヲ採用シタルコトアルモ今日ハ行ハレス。競賣拂下ニ三方法アリ。第一、立木ノ儘ニテ拂下ル法、第二、採伐製材シテ後材木トシテ製材地ニ於テ拂下ル法、第三、木材ヲ市場ニ持出シ以テ世ノ需要ニ應スル法、即チ是レナリ。第一ハ管理上便利ナルモ立木ノ實際價格ヲ測知スルコト困難ナルヲ以テ商人ニ乘セラルル機會多ク、第三ハ人民ニ便利ナルモ手數ヲ要スルコト多ク、又政府ノ收入ハ

市場ノ氣配ニ由リテ著シク左右セララルルニ至ル故ニ、現今ニ於テハ其中間ニアル第二法最モ多ク行ハル。

最後ニ一言スヘキハ林業ノ副産物即チ枯草、菌、肥料用ノ草葉等ニ關スルコト是レナリ。此等ノ副産物ハ附近人民ノ生活及經濟ニ關係スルコト甚大ナルノ故ヲ以テ、我徳川時代ニ於テハ人民ニ向ツテ下木ノ採伐、下草ノ苜取等ヲ許シタルモ現今ハ一切之ヲ禁ス。此等副産物ヨリ生スル收入ハ村落附近ノ山林ニ於テ最モ多ク、其管理宜シキヲ得ルトキハ其收益ハ却テ主産物ニ超過スルコトアリ。之カ拂下ノ法ハ木材ノ拂下ト稍其趣ヲ異ニス。蓋シ副産物ニアリテハ年々一回若クハ數回發生シ又或種ノモノニアリテハ精密ニ其生産額ヲ知ルコト能ハサルヲ以テ、競賣拂下ノ法ニ由ルヨリモ寧ロ小作法ニ由ラサルヲ得ス。夫ノ有名ナル豆州天城山ノ山葵ハ之ヲ小作ニ付シ、政府ハ年々數千圓ノ收益ヲ得ツツアリト云フ。

我國ノ官林ハ臺灣ヲ除イテ一千二百四十一萬町歩ニシテ、全國森林ノ大部